
屍ヶ台

骨休め

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

屍ヶ台

【Nコード】

N7532X

【作者名】

骨休め

【あらすじ】

屍ヶ台と揶揄される、過去より食人を重ねてきた土地。知らずにその一角に住むことになった姉を襲う悲劇に立ち向かおうとする水嶋涼二。死者の悪意に翻弄されながら、家族の絆を保とうとする彼が、最終的に選ぶ道は……。現実感のある設定。全編に渡ってシリアスです。ライトな要素はありません。

姉貴の家の訪問者（前書き）

この章にはグロイ表現があります。耐性のない方はお気をつけ下さい。

姉貴の家の訪問者

「もう、本当に腹が立つ！」

結婚して家を出ている姉貴の、今日の第一声はそれだった。

少し前から頻繁に実家に電話をするようになっていた。なんでも、新居として住み始めた賃貸マンションの隣室から、子どもを虐待するような怒鳴り声が、毎晩、響くのだという。

「深夜の１時とか２時に、延々１時間ぐらい喚き続けてるのよ、その母親。異常すぎじゃない？」

そんな報告を聞けば、無関係な独身男の俺としても、なんとなく心がざわつくものである。

「児童相談所に通報すれば？」

無難ながらアドバイスすると、俺よりはるかに血気盛んな姉貴は、「隣の子をつかまえて学校とクラスを聞き出したから、まず小学校に連絡してみる。それと、隣の家の玄関先で、『いい加減にしてよね、毎晩毎晩！』って大声出してやったわ」

と鼻息を荒くした。苦笑しながら、でも俺としては隣人トラブルで刺されたりしねえだろうな、と心配になってみたりもした。

その姉貴の本日の怒りの要因はこれだ。

学校に連絡を取ってから数日、隣家の声は聞こえなくなった。一昨日には地区の民生委員も訪問していたそうだ。地域絡みで虐待阻止に乗り出したんだな、と安心した姉貴は、昨夜も達成感から健やかに熟睡していた。

深夜２時。なにかが聞こえたような気がして目を覚ました。夜中の物音には敏感になっていた。耳を澄ますと、ぼそぼそと喋る複数の人間の声が聞こえる。玄関先から。

仕事で疲れている旦那を起こす前に、正体を見極めてやろうとした姉貴は、こっそりと玄関に歩み寄った。覗き窓から外を覗くが、暗いばかりで動くものは見えない。声は途絶えている。気配もない。

気のせいだったかと身を離れたとき、突然インターホンが鳴ったそう。重なるが深夜2時。尋常じゃない。

「ヘタレだと思うけど、怖くて玄関、開けられなかったわよ」

そう意気消沈する姉貴に、

「絶対開けんなよ」

と釘を刺して、その日の会話は終わった。

次の連絡は翌々日。

会社から帰ると、お袋が受話器を握り締めながら青い顔をしている。何事かとそばに寄ると、姉貴からだという。精神的に弱いお袋と電話を換わった。

「俺。今、帰った。どうかしたの？」

「あ、リヨウちゃん？ちよつと気持ち悪いことになってるのよ」

姉貴は、珍しく取り乱した様子で、畳みかけた。

「一昨日、話した深夜のインターホンだけど、電話したその夜も昨日も、続けて2時から3時頃に鳴らされるの。カイさんに出てもらったんだけど、こっちの動きを察したみたいで逃げられた後だった。今夜も来そう。で、ちよつと滅入ってるの」

カイさんというのは姉貴の旦那だ。大手の自動車部品会社に勤める技術者で、毎日のように帰りが遅いと姉貴がこぼしていた。

「今度は調べに行く前に警察を呼んだら？もしくは監視カメラつけようぜ」

そう提案すると、

「監視カメラかあ…。やってもいいけど、明日になっちゃうよね。

今晚、カイさん出張でいないのよ。どうしよう…」

と答える。

結局、お袋の後押しもあって、俺はその晩、姉貴の家に泊まりに行くことになった。

引越しの手伝い以来、久々に訪ねた新居は、すでに綺麗に片付け

られていた。姉貴はむしろ潔癖症に近い性格で、俺の部屋が汚れているのも我慢ができずに、よく勝手に物を捨てられた。非難する俺を、

「部屋の汚れは心の汚れ！」

と汚物扱いしたのも、今となつては、なんだか懐かしい。

「一応、ここに入る前に隣の家の物音を探ってみたけど、怒鳴り声とかはしなかったぜ」

と開口一番に言うと、

「うん。声は聞こえなくなつたね。でも、だからって虐待が止んできるとは言い切れないじゃない？ 非常識な嫌がらせするような母親なんだし」

と答える。姉貴は深夜の訪問者が隣家だと確信しているようだ。

「複数の人間の会話が聞こえたんだろ？ 隣って家族何人？」

「母親と小学生の女の子だけみたい。お父さんは見たことない」

その説明に、俺は首を傾げる。深夜2時、母子家庭にわざわざやってきて嫌がらせに加担する物好きがいるんだろうか。

「ふうん……。まあいいや。捕まえりゃはつきりするし」

そう言うと、姉貴はホツとした顔をして、

「よかった。リョウちゃんが遅しくなつてくれてて」

と微妙な表現で褒めた。

「あ、でも、番してくれるのは嬉しいけど煙草は吸わないでよ。お風呂の排水口の髪の毛はちゃんと拾つてね」

釘を刺すのも忘れない。

相変わらずうるせえなあ。それが人にモノを頼む態度か。

0時を回って姉貴が消灯の時間に入った。俺も明日の出勤のために眠っておかなければならないが、なんだか目が冴えてしまった。

電気の消えた部屋の中で携帯をいじりながら、耳を澄ます。

隣家からは何のアクションもなかった。もしかしたら、この後の悪戯に備えて誰かが訪問して来るんじゃないかと疑ったが、気味が

悪いぐらい静まり返っている。

「訪問者、か」

姉貴に聞こえない声量で呟く。なんとなくゾクツとする響きだ。相手の顔が見えないから無闇な想像をするんだろ。インターホンが鳴ってドアを開けたとき、そこにいるのが目を釣り上げて怒りの形相を顕わにした母親だったらOKなんだ。いや、それ以外ありえないか。姉貴はお節介だが、間違ったことをして他人の恨みを買うような奴じゃない。

少し眠気を感じ始めた俺は、布団を持って玄関先に移動した。音を聞き逃して、姉貴に、また明日から怖い思いをさせるのもアレだし。

：足音がした。ような気がした。

慎重に起き上がると、俺は手元の携帯を見た。時刻は2時を少し回っている。

狭い玄関を挟んだ先にドアがある。その向こうから、やっぱり何かの音がする。妙に乾いた響きだ。足音とは違う。布団から這いで、厚い鉄製のドアに耳をつけた。話し声はない。カシンカシン、と、耳慣れないそれは、移動する気配もなく、この家の前に留まっている。

枯れ枝でコンクリの床を叩くような音だな、と思った。水分の抜けた物体が奏でる軽い振動。わずかの衝撃で簡単に折れそうな脆い質感。

唐突に思い出した。大学時代、ワンダーフォーゲルの部活動をしていた俺は、2年生のひと夏、先輩に連れられて山岳救助に携わらせてもらった。天候の良い日に限り、行方不明者の搜索に山々を歩きまわる。一般的な登山者が行かないような深い谷や雪渓にも足を運んだ。

「こんなことでも見つかる可能性はほとんどないんだよね」
とあきらめムードのプロに混じっての搜索の結果、1体だけ遺体を

見つけることができた。鮮やかな赤いリュックの傍らに、完全装備した服装を身につけたそれは、すでに皮も内蔵も残っていないかった。風化したスカスカの骨になっていた。

骨の音だ……。穴だらけの石灰質の棒の羅列を思い描いて、吐き気がこみ上げてきた。表にいるのは、本当は何なんだ？人間なのか？インターホンが鳴った。俺は飛び上がったと思う。ドアノブを掴もうとしたが、痺れたように腕が伸びない。人間じゃない。そうとしか思えなかった。人間の気配じゃない。

どれぐらいの時間、葛藤していたのか。

気づくと表の音はなくなっていた。それと入れ違いに室内から控えめな足音が近づいてくる。姉貴が不安そうな顔を覗かせた。

「いま、インターホン鳴らなかった？」

俺は弾かれたようにドアを開けた。

共用通路の常夜灯が、すでに誰もいなくなったコンクリートの床を照らしているだけだった。

生者が死者か（前書き）

この章には遺体の表現があります。耐性のない方はお気をつけ下さい。

生者が死者か

寝不足の目をこすりながら出社した。地方都市のオフィス街に、俺の仕事場はある。

地下駐車場に車を突っ込み、エレベーターの上昇ボタンを押すと、急に脱力感が来た。睡眠不足のせいじゃない。過度の緊張感から解放された自覚が芽生えたせいだ。

朝まで姉貴宅で過ごした俺は、ちゃんと主婦をしているらしい彼女手製の朝飯を食って、マンションを出た。ドアを開けるときに、まざまざと深夜の物音を思い出す。見送りに出ている姉貴を何度も見返ると、

「何よ？うつとうしい」
とケチを付けられた。心配してやってんのに。

骨…いや、俺の妄想の中で、訪問者はもつと確実な姿を持っている。口を大きく開けた頭蓋。欠損している肋骨。粉を吹いた骨盤。折れた大腿骨。山の中で見つけた遭難者は生きて帰りたかった未練を全身で表していた。玄関の向こうにいた、あの質量の軽い存在は、生きている人間と同質の立場に見せようとしていた気がする。

「幽霊や妖怪なんてものが本当にいたとして…なぜ、それが姉貴のところにも現れたかが謎だよな…」

あちらを立てればこちらが立たず。超常現象で推理してみても答えは出ない。

オフィスのドアを開けると、すでに出社していた先輩社員が、
「おはよつす。なんだ？冴えない顔だな」
とからかってきた。

「ちよつとあつてね…。あんまり寝てないんです」
答えると、

「一晩中、何があつたのかなあ？」

と下卑た笑いをぶつけてきた。

「そんないい話じゃ……」

苦笑しながら言い訳する。

そうこうするうちに、後輩の彩ちゃんあやが入社してきた。俺の顔を見るなり、

「どうしたんですかあ？ 顔色が、青いつて言うより白いですよ」

と驚いた。そんなに病的な症状なのか、俺。

「あんまり追及するなよ。一晩中の作業で衰弱しきってるんだから俺が答えるより早く、先輩が茶々を入れる。」

「違うつ。泊まったのは姉貴のとこだって！」

彩ちゃんの前で恥をかいたことに感情的になって、思わず声を荒らげた。

「お姉さんつて、この前、結婚した？ 新居に泊まるなんて仲がいいんですね」

屈託なく笑う彩ちゃんは、その後、こつそりと、

「妬けちゃうなあ」

と呟いた。大きな瞳を伏せる仕草にドキツとする。

朝の定例業務をこなし、次の波が来るまでの時間をぼんやりと過ごしていた俺に、先輩が話題を蒸し返してきた。

「お前つて彩つぴ狙いじゃなかったの？ 本当はどこに行つてたんだよ？ 姉貴の家で寝不足つて変だろ」

こそつと耳打ちに忍び寄る小太りの体を押し返して、

「だから違うつて」

俺は半ば笑いながら否定した。

「隣人トラブルつてやつですよ。真夜中にインターホンを鳴らす非常識な馬鹿を捕まえようと思ったの」

「そりゃあ悪質だな。姉ちゃん、そんな馬鹿に絡まれてんのか」

「あの人も喧嘩腰なところあるから……」

身内として、少々、姉貴に厳しい評価を下すと、彩ちゃんが聞きつけて寄ってきた。

「お姉さんに何かあったんですか？それで泊まったの？」

結局、俺は2人に顛末を話すことになった。

「なんだか妙な話だなあ。嫌がらせなら、もっと恫喝的なことしてもおかしくないんじゃないか？相手は複数なんだろう？」

先輩が珍しく真面目な顔で反応する。

「でも、お隣さんですし、自分の正体を知られるのは嫌なのかも」
彩ちゃんの意見も、至極、的を射てると思う。

「自分の立場を守りたいなら、俺なら、むしろもっと恐怖感を与えて話もできないようにさせるぜ」

「先輩は過激すぎですよ」

俺は割って入った。彩ちゃんの先輩を見る目が変わりつつある。

「訪問者が誰だって、今日にははつきりします。姉貴、今ごろ監視カメラを買いに行ってるはずだから」

そう説明すると、

「よかった」

と安心する彩ちゃんの横で、

「誰も映ってなかったりしてな」

とニヤつく先輩。

…もし、本当にそうだったら…。

「…幽霊が訪問してくるなんてこと、本当にあるんだろうか…」

一笑に付されると思って黙っておいた仮説を、思わず口にした。

「マジで受け取ったの？んなことあるわけないだろ」

嘲る先輩に対して、意外なことに彩ちゃんが俺を肯定した。

「そういうの、ないとは言えないんじゃないでしょうか…。だって、今朝の水嶋センパイの顔、生気が抜かれたみたいなさ色してた…」

俺は自分の顔を触ってみた。ちゃんと体温も持つてる。疲れも回復している。

「とり憑かれたみたいだった？」

笑ってそう聞くと、彩ちゃんは、

「ちよつと心配になりました」

と控えめに微笑んだ。

その流れを傍観していた先輩が、いきなり俺に受話器を突きつけた。

「あのさ、ちよつと面白くない、そういうの？『実録お化け屋敷！』みたいな」

「人事だと思つて…」

調子のいい言葉に苦笑しながら、俺は受話器を受け取る。

「それでどうすればいいんですか？寺にでもかけて悪霊退治頼めて？」

「違う違う。かけるのは不動産屋」

先輩は自分のノートPCを手繰り寄せながら言った。

「よくあるだろ。そのマンションが建つ前は墓場だったとか沼地や井戸があつたとか。それ、確認してみろよ」

「不動産屋なんか知りませんよ」

受話器を突つ返そうとすると、先輩はそれを遮って続ける。

「マンション名ならわかるだろ。検索してやるよ」

結果。大手の住宅情報会社がヒットし、俺も悪ノリで事故物件の是非を追及することにした。

会社を退社すると、そのまま姉貴宅に向かう。監視カメラの設置をしてやらないといけない。

「意外に安いだね、こういうの」

警告灯付きの丸いフォルムのカメラには数千円の値札が付いていた。それを玄関のすぐ上に取り付けたあと、別売の受信装置を室内のビデオに繋ぐ。

「これって録画OKなんだよな？」

確認すると、

「って店の人は言ってたわよ。白黒だけど」

答えが返る。録画機の電源を入れると、接続したモニターに外の様子が映し出された。

「よし、成功。明日の夕方また来るから、そのときに一緒に確認しようぜ」

促すと、姉貴は怪訝な顔をした。

「その前に見ちゃだめなの？」

不動産屋からは、特に手がかりは得られなかった。しつこく粘ってみたが、マンションが建っているのは山地を削りとった岩盤の上で、災害にも人災にも見舞われたことはなかったらしい。その回答を聞き、俺もいったんは「やっぱり隣か」と納得したんだが、このマンションに戻ってみると、言いようのない胸騒ぎが襲ってくる。

ビデオに映った『もの』を、姉貴一人のときに見せたくはなかった。

「もし想像しないものが映ってたらショックだろ？」

軽口でごまかしながらそう答えると、姉貴は、奇妙に真剣な表情で尋ねた。

「それって…鳴らしてるのが、隣の母親じゃなくて子どもの方ってこと？」

「は？」

質問の意味がわからない。

「深夜2時だぜ？子どもが起きてるわけないだろ」

否定すると、

「でも…」

と言いあぐねる。続きを促すと、姉貴はぐぐもった声で呟いた。

「なんていうか…気配がね、小さいのよ。大人の大きさじゃないみたいな…」

「……………」

心当たりは…あった。軽い骨のような音の羅列は、子どもが跳ね踊っているようなリズムを刻んでいた。

俺は姉貴に向き直って、俺の想像と不動産屋の回答を伝えた。顔をしかめて聞いていた姉貴だったが、一瞬、パツと目を見開いたあと、

「そっだ！」

と笑顔になった。

「そういうこと知ってそうな人が近所にいるわ。95歳のお爺ちゃんなの。おすそ分けに行ったりして顔を繋いでるから、話も聞かせてくれると思う」

次の俺の休みに合わせて、その老人宅を2人で訪問することにした。

屍ヶ台 1（前書き）

この章には食人の表現があります。耐性のない方はお気をつけ下さい。

屍ヶ台 1

順調に週末の休みが取れた俺は、この日、95歳の長老宅を訪問するために、姉貴の家を訪れた。世間一般的にも休日^{あにき}に当たる曜日だからだろう、いつもすれ違ってばかりの義兄にも挨拶することができた。

「カイさん、久しぶり」

姉貴と同じ呼び方で馴染むと、若干、小柄な義兄は背中を丸めて、
「久しぶりだね、リョウくん。君までサチの酔狂に付き合うとは思わなかったよ」

と妙に引つかかる返事をよこした。

俺は実はこの人をよく知らない。熱心に姉貴にプロポーズしていたのは見ていたけど、姉貴はむしろ、最初は冷淡だった。カイさんの情熱にほだされたのだろうか。男の俺から見ての彼の魅力は…まあいいや。結婚した後^{あにき}に論じる話題でもない。

「すぐにそういう冷めたことを言う。虐待の声を聞いたときもそうだったよね。関係ないからほっとけ、とか。カイさんは人間的に冷酷だと思う」

義兄の反応に噛み付く姉貴。義兄は軽く肩をすくめただけだった。夫婦げんかに巻き込まれるのも不毛なので、姉貴を促して早々にマンション^{あにき}を出る。

入り組んだ住宅街の路地を、いくつも曲がった。

「ここらへんは古くからの居住区みたいで、道が狭いのよね」

姉貴が言った矢先に、侵入してきた車が体側ぎりぎりのところを掠めていく。マンションから見るかぎりには、一面のススキ野原に囲まれた開放的な土地だと思っていた。でも一步奥に入ると、こんなにゴミゴミとした風景になってたんだな。

近所という触れ込みだったが、ずいぶんと歩く。

「結構遠くない、その爺さんの家？」

姉貴の生活圈から外れようとしているのを見咎めると、振り返った姉貴は笑顔を作っていた。

「だって、うちのマンション評判悪いんだもん。近くの人はあるまじ親しくしてくれないのよ」

「……………何それ？」

意味がわからず問い返す。

姉貴の話によると、引越した当初から感じている違和感があるそう。マンションのそばには戸建ての家屋がいくつか散在している。近所に顔を繋いだほうがいいと思っただ姉貴は、それらの家々に機会があるときに外向いて交流を計ったらしい。最初はにこやかに対応してくれていた相手は、姉貴がマンション名を口にすると、急に表情を曇らせた。中には姉貴自身に距離を置く態度を見せ始めた家庭もあるようだ。

「それ、かなり重要な情報じゃねえ？姉貴のマンションが近隣に疎まれてるってことだろ？その原因と訪問者の件が結びつくんじゃないか？」

勢い込んで言う俺に、姉貴は、

「うーん…そうかなあ…」

と懐疑的な返答をした。

「だって、うちのマンション、ゴミ出しのマナーも悪いし、不良学生が夜中に溜まったりもするのよ。そういうことで嫌われてるんじゃない？」

現実的な理由を突きつけられると、俺自身の考えも尻すばみになる。『幽霊屋敷』なんて遠因より『迷惑行為の横行』のほうが、近所にとっては、よっぽど敬遠する原因になるだろう。

両脇に立ち並ぶ家屋が、やや歴史がかってきた。住宅地の奥は、古くから人が住み着いていたとの説明通り、5、60年は経っていいそう。趣を連ねている。車が入れないくらい細い小路。幹の黒ずん

だ路傍の柿の木。一軒一軒の敷地が広い。通り過ぎた屋敷の立派な門構えの奥には、日本庭園が覗いていた。

「爺さんの家もこんななの？」

ちよつと不安になってきた。親父を早くに亡くした俺たちは、金持ちの生活に縁がない。今日の服装は思いっきりカジュアルだし、それらしい話題も用意してない。

「お爺ちゃん、^{はが}芳賀さんっていうんだけど、芳賀さんの家はこのへんで一番大きいよ」

構えたふうもなくそう答える姉貴の格好は、エプロンを外したただけの内着だった。

「俺、失礼に当たらない態度なんか取れないぜ？」

そんな爺さんにどうやって話しかけるっていうんだよ？臆していることを伝えると、姉貴は高笑いしながら、

「大丈夫よ。リヨウちゃんがビビるような人に、私が話しかけられるわけないでしょ？」

とフォローした。俺はお前のほうがよっぽど肝が座つてると思ってるよ。

瓦屋根の乗った格子戸の門扉を開けると、姉貴は慣れた調子で、砂利の敷かれた庭先を横切った。平屋の堂々たる日本家屋が目の前にそびえている。磨りガラスを嵌め込んだ引き戸に手をかけてから、思い直したように、すぐ横に設置されたインターホンを鳴らした。

「いつもは挨拶してそのまま玄関に入っちゃうんだけど、今日はあんたも一緒だもんね。一応、礼儀」

人懐っこい姉貴の態度は、出迎えてくれた芳賀氏の家人の対応で納得が行った。

「やつと来た。待ってたわよ。お爺ちゃんも朝からご機嫌だったんだから。さ、上がった」

50前後の穏やかな雰囲気的女性が俺たちを招き入れてくれる。年代と会話からいって、芳賀の爺さんの孫つてところか。軽く会釈を

してついでいく俺の前で、姉貴と女性は華やかな声を上げながら世間話を始めた。そっか。そういえば姉貴は独身時代から男女問わず人気のある性格だったな。

襖で仕切られただけの部屋が、奥に向かっていくつも並んでいる。「本当は客間に上がっていたきたかったんだけど、お爺ちゃんがどうしても自分の部屋に来てほしいっていうもんだから。ごめんなさいね。こんな薄暗いところまでお通しして」

女性、やはり芳賀氏の孫娘だと名乗る彼女は、俺に向かってても親しげな声をかけてくれた。

「いえ。こういう造りは珍しいので、拝見できて喜んでいます」俺が答えると、姉貴が口を挟んだ。

「歴史に興味が有るくせに、資料館みたいなどこにはあんまり行かないのよね、リョウちゃんは」

そうだ。今日の俺の立場は『歴史好きで郷土の古老に史料を提供してもらっているアマチュア』だったな。

「江戸の宿場町の本陣みたいな資料館にはよく行くさ。でも、実際に人が住んでいる家屋は貴重だろ」

そう言い訳すると、孫娘は感心したように、

「本当にそういうものが好きなのね。わたしなんか、こんな家に住んでいても、ちっともありがたさがわからないから、尊敬しちゃうわ」

と言ってくれた。本当はボロが出ないように内心ヒヤヒヤしてるんだけどね。

10以上の部屋を通った気がする。どの部屋も縁側から差し込む陽の光が、障子を通して室内に流れ込んでいた。現代家屋のようなサッパリとした明るさはないが、控えめな白い波長の光源が心地良い。

爺さんの居室が一番とっつきにあった。孫娘が襖を開けると、そ

こだけ、障子窓のない陰気な闇が漂っている。

「こんにちは、サチさん。待ってたよ」

床の間を背にした老人が、ゆっくりとした動作で立ち上がった。背が高い。高齢を感じさせない姿勢の良さに、俺は目を奪われた。90を越えて生きる人間ってというのは、やはり、こんなふうに頑強なのかもしれないな。

「こんにちは、芳賀さん。こっちが話してた私の弟です。今日はお世話になりますね」

姉貴の紹介に、雰囲気呑まれて呆けていた俺は、慌てて頭を下げた。

「涼二といいます。時間を取っていただいてどうも」

間抜けな挨拶を後悔しながら老人をちらりと見ると、無表情だった顔に笑みが差していた。

「サチさんに似て礼儀正しい弟さんだね。しかも、若いのに勉強家なんだろう？会うのを楽しみにしていたよ」

とりあえず批判的な態度を取られなかったことに安堵しつつ、でも姉貴の図々しさと同列に評価されたことに対して不満を感じた俺は、「姉よりはるかに礼儀は心得ているつもりです」

と爺さんの言葉を訂正した。即座に姉貴から無言のパンチが飛んできた。

大きな座卓に出された茶と菓子を脇によけ、爺さんが古書の類を次々と積んでいく。町の郷土史。古地図。古文書。そして先代が書いていたという日記まで。

まさかマンションに現れるお化けの由来を調べたいとは言えなくて、便宜上、俺の興味と引っ掛けての来訪だったが、歴史に対して俺はあながち無知でもない。と言っても高校の日本史レベルだが。学生時代、史跡巡りを趣味としている教師に授業を受け持ってもらえた縁で、教科書の活字でしか情報を与えられなかった同年代よりは明るい知識を持っている。…はずだ。

「この辺りは、昔、山だったと聞きました。それを削って宅地にしたとか。いつ頃のことなんですか？」

尋ねると、古老は、それがつい昨日だったかのような俊敏さで記憶を取り戻した。

「儂が生まれる数年前だから、明治の末期の頃だろう。それまで、この土地は…山というよりは小高い台地だった」

なるほど。俺は頷いた。不動産屋の説明と一致する。今では周辺の土地との標高差はないに等しいが、山地だった頃は、木も生えない硬い岩盤の斜面が覆う、ハゲ山、だったそうだ。

「芳賀さんは、その明治末期の開拓以前からこの場所に住んでみえたんですか？あまり住居には向かない環境だったと聞いていますが」踏み込んでみると、爺さんは能面のような無表情になり、黙って古地図を開いた。手書きの細かい地名がびっしりと書きこまれている。『荒谷』『石神』などの文字が複数見えた。

「この辺りは粘土質で米が取れず、水はけも悪かったから、雨が降るとよく浸水したらしい。儂らのご先祖も、他所の土地を追い出されたのでなければ、こんなところには住み着かなかっただろう」

言葉の端に微かな悪意を乗せて、そう生き字引は切り出した。

そして、数百年にも及ぶここでの過酷な生活を語り出した。

屍ヶ台 2（前書き）

この章には食人の表現があります。耐性のない方は、重々、お気を
つけ下さい。

屍ヶ台 2

明治45年7月30日。岩盤の掘削に当たっていた鉦夫たちは、その手を止めて新聞に見入っていた。『天皇崩御』の大きな見出しが一面に謳ってある。

「具合が悪いとは言われていたが…やつぱり亡くなっただんなあ…」

「明治はどうなるんだ？次の天皇は嘉仁様か^{よしひと}」

「年号は変わるだろう。そういう決まりだ」

思い思いの話題に終止符を打ち、また鍬を振るい出す。明治天皇、睦仁^{むつひと}が病床に倒れてから、自粛ムードの蔓延する中で仕事ができなかった。予定よりずいぶんと遅れている。

「こんな住みにくい村を開拓してどうしようっていうんだ、お役所は？」

自然とこぼれる愚痴。硬い地面を掘っても掘っても、現れるのは岩の亀裂だけ。麓には集落があつたが、総勢で60人ほどの過疎地である。手を入れる意味はないように思えた。

「なんでも、ここは屍体の投棄場だつたって話だ。役所としても、

そんな土地を残しておきたくないんじゃないか^{としがき}ねえか」

年嵩^{としがき}の行った鉦夫が抑えた声で言うと、反論する者もいなかった。

この土地に芳賀氏の一族が住み着いたのは室町時代だったらしい。当時、芳賀氏は別の土地で地頭代を務めていた名家だった。

地頭というのは、と爺さんが改めて説明してくれた。平安末期から室町にかけての動乱の時代、時の権力者たちは、自分たちの優位性を安定させるために、穀物の取れる土地の所有権を欲しがった。幕府はそういう権力者たちを統率し、支配下に置くために、忠誠を誓った大名に、それまでに各々が手に入れた土地の所有を維持する保証を行った。つまり、絶対的な力を持つ公的機関が、曖昧だった不動産に対して登記を行ったということだ。

土地を与えられた権力者（当時の言葉で御家人と表現したらしい）の中には、自分の住居のある都から遠く離れた場所の管理を強いられる者も少なくなかった。それはそうだ。群雄割拠の中で手当たり次第に略奪してきたものなんだから。幕府が確立し、都に中央政權が集中したからといって、都合よく近場の土地とトレードするなんてわけにはいかない。そういう地方の僻地を管理するのに、本来なら、御家人自身が該当地に出向き、生活をするのがもっともシンプルな方法だった。けれど、幕府との連絡を密にする必要があったために、当人が都を離れられないケースも多かったのだ。そういう場合に、御家人は自分の親族などで構成した『管理者』を現地に赴任させた。それが『地頭』である御家人の代わりを務めた『地頭代』である。

初期の頃こそ、本領者である御家人の指示を忠実に聞いていた地頭代たちだったが、時代が下るにつれて、自身が土地の所有者であるかのような横暴ぶりを見せ始めた。年貢を納める際に本領者に申告する出来高を過少申告したり、法外な課税を小作人（実際に耕作していた百姓）に課したり。また、徴税だけでなく治安の安定に対しても権力を与えられた結果、年貢に反対する小作人たちを武力で制圧するようなことも行われたようだ。

大きな財を成し、栄華を極めた地頭代の時代が終わりを告げたのは、豊臣秀吉が行った太閤検地によってだった。秀吉はこの制度改革で、年貢を本領者に直接納めさせるといふ手法を取った。このため、中間管理職の地頭代は職を追われる羽目になる。

典型的な搾取者であった芳賀の一族は、本領者である御家人の元にも受け入れてもらえず、管理の厳しい豊臣、徳川の支配下の中、耕作に向かない荒地への定住を余儀なくされた、とのことだった。

「因果応報とはいえ、酷い時代だった」

爺さんは、話を始めた時と同じような凍りついた表情を、皺だらけの顔に浮かべていた。俺は、その中に、伝えてはいけない言葉を口

にしようとする決意を感じた。犯罪を告白する前の人間は、きつと、こんなふうに無情な冷たい風貌を覗かせるんだろ。

「儂らの先祖が住み着いたこの土地には先住者がいた。樹木の恵みのないここは、常に風害と水害の脅威に晒されていたそう。そんなところに定住していた先住者がまともな人間たちじゃないのはすぐに知れたが、それでも先祖たちは、やっと受け入れてくれた土地を離れることができなかった」

自らも多大な罪を犯してきた一族が共存した相手は、でも、話が進んでいくうちに、俺の想像をはるかに超えた醜怪な輩たちであることが伝わってきた。姉貴は心なしに青ざめながら、吐き気をこらえるかのように口元を覆っている。

室町時代末期。太閤検地が浸透してから数年が経っていた。国を追われたときは50人からの大所帯であった芳賀一族は、放浪を重ねるうちに死別や逃亡を繰り返して、20人ほどに集団に目減りしていた。経過途中、盗みや追い剥ぎに走ったこともある。彼らは生きることになった。

先住者はそんな芳賀一族と同じ目をしていた。地区を分けてではあるが生活を共有していくうちに、彼らのそれまでの行状が明確になる。ざつと言え、彼らは野盗だった。戦国の乱世において大きく膨れ上がった犯罪集団。織田信長の治世以後の駆逐で勢力を削がれてはいたが、多くの者は未だに近隣の山野に潜み、山賊を生業としていた。

気性の荒い彼らとの関係は、自然、芳賀一族の弱体化を招いた。なにせ、彼らの集落の女に誘われて手を出しただけで、問答無用の斬撃に見舞われるのだ。わずかな芋畑の占有権も、当然、彼らの物だった。芳賀一族は常に困窮していたが、彼らの悪事に加担すること、なんとか餓死者を出さずに済んでいるといった惨状だった。

台地の上を強い風が吹き荒れる。江戸時代中期。

この集落に一人の旅人が訪れた。…いや、旅人だったものが入り込んだ。疲労からか瀕死状態だった彼は、すぐに息を引き取る。集落の人間は、彼から金目の物を奪い、着物を剥ぎ、髪まで剃った。売れるものをすべて切り取られた彼の惨めな遺体は、どの家屋の敷地にも捨て置かれるのが嫌だという理由で、台地のうまで運ばれた。当時、相当の標高のあったその場所は、秋口に取れた野菜の乾燥所になっていた。湿気が低く風の絶えない環境は、岩盤を突き抜けるほどの強さを持った野草や収穫物を、1日で干物へと変えてくれたからだ。

冬の保存食の傍らで干からびていく遺骸。遺棄当初は猪の餌にでもなるのだらうと思われたそれは、どんな運が働いたのか、捕食されることもなく、綺麗なミイラとなっていた。

真冬。集落にとって一番辛い季節。もともと、わずかしかなかった食料の備蓄は、早い段階で底をつく。山賊稼業も思わしくない。旅人が雪深い山を避けて正規の街道を通るからだ。村の男たちは、その街道辻まで遠征する日が多くなった。当時は、大通りとはいえず、日が暮れてからの往来はごく少数だったそう。特に足並みの乱れるポイントを狙って待ち受ければ、リスクを最小限にして成果を得ることができた。

残された女や年寄りはずっと待つしかなかった。生まれたての赤ん坊が凍死や餓死するのも珍しいことじゃない。そのために女はたくさん子どもを産んだ。現代では到底イメージできないけれど、貧困の中の人間の営みは、動物のそれと変わらなかったようだ。

そんな中、寒風荒ぶ台地に、何か飢えを凌ぐものがないかとやってきた先住者の一人が、臀部を切り取られた例のミイラを見咎めた。明らかに人の手による損傷。村へ下り、仲間を問い質すが、誰も事情を知らないという。先住者たちは、今度は芳賀の一族のエリアにやってきて、同じように詰問した。子を生んだばかりの母親が、当たり前のように答える。

「ああ、食った。食わなければ乳が出ない」

「飢饉の時に、人間が同族を食うことは、たまにあつたらしい。けれど、この集落ではそれは禁忌だった。許せば、お互いを食い合うことになる。だが、少人数で定住せずに放浪してきた先祖には、そういう理屈がわからなかつたんだな……」

爺さんが力のない声で呟いた。

街道での強盗稼業を終え、村に戻ってきた男たちが見たのは、怯えて家に引きこもる芳賀の一族の面々と。

腹を割かれて放置された母子の遺骸だった。

緊急で合議が開かれる。食人に対して強い嫌悪感を示す先住民に、芳賀が懐柔にかかる。

「儼らの先祖が治めていた土地では、時折やって来る薬売りが、人間の肝や心の臓から作った丸薬を売っていた。手先のできあがつたばかりの胎児を見たこともあるらしい。今も、江戸城下では、幕府がそういう物を許可していると聞く。仲間を殺して食えとは言わんが、行き倒れや襲撃で絶命した者を食うことは許してもらえないだろうか」

芳賀の一族の中には『生きることが価値』という信念が根強かった。このような惨劇があつたとしても、時が経てば、また同じ事をする輩が出るだろう。

「そのような話は信用できん。薬売りなど、この集落には来たことがないし、話も聞いたことがない。人間が人間を食うなどと、幕府が認めるものか」

一方で先住民の懐疑心も強固だった。

「だったら江戸へ出て確かめようではないか」

芳賀の提案に先住民も乗る。

そして、江戸に出た彼らが見聞きしたものは、処刑した罪人の肝臓が労咳（結核）の薬として高値で取引されているという事実だった。

「なぜそんな知恵をつけてしまったのかのう…」

芳賀の言い分が通ったはずなのに、爺さんは暗い表情を変えなかった。

死体が金になると知った先住者は、江戸市中で商いをしていた薬売りに声をかけた。集落にはたくさん死体がある、と。それはそうだ。略奪を生業としている彼らは、他所者を殺すことを厭わない。事情を知らない薬売りは興味を示した。結局、それが買い手の第一号となった。以降、噂を聞きつけた同業者が途切れることのない訪問を繰り返す。

集落は潤い、人々は活気づいた。台地の上には、いつも、腐らせないように戸板に並べられた遺体が、かさかさ^{しほ}と萎んだ音を立てていたそうだ。

「明治政府が正式にそれを禁止してから、この土地は忌地として扱われるようになった。儂らの子どもの頃に、もう台地の高さは半分になっておったが、それでもここは、屍の台地、『屍ヶ台^{かはねがだい}』などと揶揄されていたよ」

老人の話が終わる。

俺は芯から冷えた自分の腕を無意識にさすっていた。…姉貴のマンションの住所は『川根ヶ台』と言った。

「芳賀さんの一族は、この辺りに居残ったんですね。なぜ？」

死体売りで潤沢な資金を得たはずの彼らが、忌地を出ることもなく留まっていることに、疑問を持つ。

「儂らは罪を償っていかねばならんからな」

老人は、やっと明るい笑顔を取り戻して答えた。

「この話も次の世代に伝えていかねばならんのだが、家族でさえ聞きたがらん。まったく情けない」

サチさんと涼二くんが聞いてくれて良かったよ、と話を振られて、俺は頭を掻いた。姉貴もバツが悪そうな顔をしている。

「あ、もう1つだけ聞いていいですか？先住民の方々は、今はこの土地には？」

芳賀一族にとって微妙な立場だったはずの彼らの行く末が気になった。

「大方は他所に行ったが、一部分だけ残っている。サチさんのマンション周りに固まっておるよ」

爺さんの説明で、俺にはすべての事象が繋がった。

屍ヶ台 2（後書き）

莊園制度（地頭や地頭代）や労咳の薬等の記述は、一応、史実を元
にしています。ただ、この話のケースは完全にフィクションです。

屍ヶ台 3（前書き）

『屍ヶ台』の章のラストです。

屍ヶ台 3

芳賀さんの邸宅を出て、また細い小路を歩き始めた俺と姉貴。頭上から降ってきた気の早い落ち葉に、姉貴の肩がビクツと震えた。

「…んなビビるような話じゃなかったろ…」

過剰な反応を咎めながら、でも俺自身も重苦しい気分を払拭できなかった。

「だって…」

姉貴は苛つ^{いら}いた様子で、目の前の小石を蹴る。

「私のマンションの建つとこで、よりによって食人があつたなんて…。今度から肉料理が嫌いになりそうだわ」

「ほら、その程度の認識だろ？」

どこかズレてる姉貴の感覚を笑いながら、俺は言った。

「同じ土地とはいえ、時代が違いすぎるんだよ。気にすることじゃない」

「でも、江戸時代ってそんなに昔でもないのよ。たかだか…えっと？何年前？」

「自分から反論しておきながら、答えを俺に求めるなよな」

呆れる。子どもの頃からこうだ。負けず嫌いの姉貴が吹っつけたトラブルを収束するのが俺。西暦換算して、差分を出す。

「2011 1868…150年ぐらいだな」

「ほら。芳賀のお爺ちゃんのお祖父さんが生きていた年代ぐらいじゃない」

「芳賀の爺さんを基準にするかあ？」

95歳の長老は、平均寿命82の日本においても特殊だと思うぞ。

「一般的なサイクルから見て、六代か七代ぐらい前の先祖の頃の話だよ。そう思えば、ものすごく昔じゃないか」

「そうね…一代前も、そろそろ記憶が薄くなってるわ」

「親父のことぐらい、覚えといてやれよ」

姉貴がボケで言ってると思いたいが、お袋といい姉貴といい、親父に対しての姿勢は、未だに辛辣だ。本当に忘れようとしているのかもしれない。

「酒に溺れなくなる時期ってのは、あると思うからさ……」

手の付けられないアル中だった親父。飲酒中に運転した車で他車を巻き込み、自身と3人の命を奪った。残されたお袋は、被害者からも親父の親族からも、自分の身内からさえも非難されまくって、結局、未だに精神を病んでいる。

「リョウちゃんはよく知らないから肩が持てるのよ。早死してくれたのはありがたいけど、最後まで大迷惑な人だった。大っ嫌い」
まったく『記憶が薄れてはいない』様子の姉貴は、忌々しそうに吐き捨てた。

「俺は、親父にいてほしかったと思うことが、たまにあるよ」
ぼそつと呟くと、姉貴は、

「代わりに姉を頼りなさい」
と虚勢を張って反り返った。

苦笑しながら、それはもう無理だ、と内心で拒否する。まだ親父が存命だった小学生低学年の頃、母方の親戚の家にあった大きな柿の木の実を収穫を手伝う家内行事があった。脆い幹先の実を取るのには体重の軽い子どもの仕事。でも、俺は怖がって登らなかった。親戚連中が揶揄する中、3つ年上で、そろそろ体も大きくなりかけて姉貴は、俺の名誉を回復するために、注意喚起も聞かずに枝に取り付いた。鮮やかなオレンジが地面に落とされたのとほぼ同時に、姉貴の体も骨折の音を響かせて落ちた。鎖骨と上腕と肋骨にヒビ。それ以来、俺は姉貴がしゃしゃり出そうになるたびに、怖気を吹っ切って自ら行動するようにしている。

「ところで、お爺ちゃんの話、参考になったの？」

考え事をしながら歩いていた俺の前に、急に姉貴が立ち塞がった。
「この土地に幽霊が出てもおかしくない曰くがあるのはわかったけ

ど、それが私の家に来る理由は、やっぱりないと思うのよ。だとしたら、夜中のあれはお隣じゃないの？」

「もちろん、俺もそれが、一番、合理的な解釈だと思ってるよ」

そう断言しつつも、気の晴れないしこりが依然として残ることを、姉貴に伝える。

「なんて言うか…。相手が生身だとすると、しっくりこない感覚っていうのがあるんだよ。さっきの爺さんの話の、死体を並べた、って表現を聞いたときには、これだって思ったんだけど」

「ミイラ？確かに音は軽い感じだったもんね。でも、忍び足で来てるのかもしれないじゃない？ゾンビの訪問よりは、私にはしっくり来るわよ」

姉貴はおどけたように肩を竦めた。

「音だけじゃないんだ」

自分の中にくすぶる警鐘を説明しあぐねて、俺は無意味に指を空回りさせた。

深夜に、ドア一枚を挟んで対峙したあの存在は、俺にとっては『恐怖』の対象ではなかった。『畏怖』だったんだ。強烈な悪意を発するそれに、体が痺れたように動かなかった。ドアを開けて姿を見てもしまえば、自分というものが破壊される。それぐらい、絶対的な脅威だった。

「お前に説明してもわかんねえよ」

脳天気な顔の姉貴に悪態をつくと、

「わかるように説明できないあんたのアタマが悪いのよ」
と即座に言い返された。

来た時とは逆に、入り組んだ住宅街を抜けると、突然、農村地帯のような緩やかな風景が広がった。比較的、車通りの多い道路を挟んでの向こう側は、菜園や耕作放棄の田園が広がっている。ススキの群生が真昼の太陽を受けて金色に透けていた。冷たさの交じる秋風がその穂を揺らしていく。

「こっちの賑やかな方が、芳賀一族の住処で…」

背後を振り返って確認する俺の隣で、姉貴が反対側を指さす。

「こっち側が先住者の居住区ってわけね。私のマンションも含めて？」

確認するので、

「当然そうだよ」

と肯定しておいた。

「だったら、先住者同士で、もっと仲良くしてくれればいいのに」
古い家屋の庭先に、腰の曲がった老婆が立っている。こちらが会釈をすると、礼儀程度には反応が帰ってきたが、すぐに目を逸らされた。

「自分たちが虐げてきた芳賀さんたちが、すぐ目の前で繁栄してるんだ。先住者同士が繋がれば、芳賀さんたちを刺激するとも思ってるんじゃないの？」

俺は自分の至った結論を姉貴に話した。

明治以降の近代に入り、屍ヶ台の人々は、それまでの行為を非難される立場になった。今でこそ芳賀の爺さんは『償い』を口にするが、当初は、そんな余裕はなかっただろう。人殺し、人食いと蔑まれた彼らが、その非難から逃れようとするには、お互いに罪をなすりつけ合う必要があったのではないか。

初期に力を持っていたのは先住者の方だったのかもしれない。だから、集落で温存していた資金を持ち出して、他所に移ることができた。その波に乗れなかった芳賀氏は留まることを余儀なくされる。そのうちに先住者の数が少なくなってくる。居残ったのが先住者の中でも力のない家庭だったのも容易に想像できる。そうなれば立場の逆転が起こるのは必然だ。

芳賀氏の台頭。それに対しての先住者の弱体化。開拓地の中で大きく敷地を広げる芳賀氏の横で、細々と田畑を営む先住者たちが、芳賀氏の視線を現在まで気にして暮らしていたとしても、俺はそれ

ほど不思議には思わない。田舎には往々にしてある現象だ。

芳賀の爺さんが、この土地の歴史を広めようとしていることにも、関連があるのかもしれないな。実際の爺さんの話は、芳賀氏にも先住者にも偏らない、かなり中立な立場を取っていた。けれど、周囲はそう見ないだろう。芳賀氏によって継承された事実が、芳賀氏に有利な内容に傾いていると見るのが普通だ。一方的に悪にされていると思い込んだ先住者たちが、ますます萎縮してしまうのは、仕方がないことだと思う。

そうになると、芳賀の爺さんと交流を持つ姉貴は、自分で思っている以上に、この地区で孤立しているのかもな。芳賀の爺さんから、いろいろ吹き込まれていると誤解されて…。

「なあ姉貴…、カイさんって…頼りになるの？」

夜中の訪問者の件だけじゃない。こういうしがらみの強い土地で、姉貴のように社交的に暮らしていくには、家族の支えが必要だろうと思った。

「カイさん？」

突然の話題転換に戸惑ったような姉貴は、すぐに苦笑して首を振った。

「…よくわからない。虐待の声が聞こえ始めてから、ずっと相談はしているのだけど、自分には関係ないだろう的な反応ばかりで…」
表情を曇らせて、視線を落とす。

「結婚前は、あんなに精力的だったのになあ」

変貌ぶりが、俺にとっても腹立たしかった。

「カイさんにとっては、私を手に入れることが1番の目的だったみたいよ。ほら、私って意外に誰にでも好かれるじゃない？そういう相手と結婚したら優越感に浸れるんでしょう」

茶化しながら、でも寂しそうな本音を、姉貴は覗かせた。

うちに戻ってくれば、と言いかけて、やめる。

「また泊まりに来てやるよ。カイさんがいないときに連絡くれ」
言外に義兄への嫌悪感を滲ませて言うと、姉貴は明るい顔になって、

「ありがとう。あんまり何度もリョウちゃんを使うのもなあ…と
思ってたけど、そう言ってくれるなら遠慮なく
と笑った。

「いいよ。ヒマだし」

普通に忙しい毎日だったが、なんだか俺も依怙地になった。体た
るくな義兄と同列に成り下がりはたかくはない。

姉貴の失踪 1（前書き）

この章は5000文字を超えています。短気な方はお気をつけ下さい。

姉貴の失踪 1

翌出勤日に会社に出向くと、いつものように先輩が先に出社していた。今度は俺のほうから挨拶して、にじり寄る。

「おはようございます。アレって解析できました？」

先輩はパソコンの画面を睨みながら、言葉だけ返した。

「おう。できたが、あんまり効果なかったな。暗いのはどうしようもないぜ」

「まあ、仕方ないですね」

俺は礼を言つて、忙しそうな先輩から離れた。実は、姉貴の家に取付けた監視カメラの映像ビデオを、彼に預けてあった。

というのも、生憎、監視を始めたその夜から廊下の常夜灯が切れてしまい、映像には暗闇しか映つてなかったからだ。

「こんなタイミングで明かりが切れるのが厭らしいな」

姉貴と2人で、そう零^{こぼ}したが、マンションの共用廊下の備品では、ありがちなことなのかもしれない。安物の解像度しか持たない白黒画面は、時折、目障りなノイズが走るぐらいの変化しか捉えていなかった。

その話をすると、先輩が、

「俺、映像解析ソフトを持ってるぞ。ビデオをハードに落とし込んで、解析してみてやるうか？」

と提案してくれた。喜んで預けたのが5日前だ。

自分の席につき、仕事の段取りを準備し始めていると、一段落つけた様子の先輩が話しかけてきた。

「そっちの状況はどうなんだ？長老から面白い話は聞けたのか？」

「うん。かなり手応えのあるのを」

先輩には逐一の報告がしてある。芳賀の爺さんの話を掻い摘もうとしたとき、入口が開いて、彩ちゃんが顔を出した。

「おはようございます。今日は寒いですね」

まだ10月の内だというのにコートを着込んで、手袋までしていた。
「寒がりなんだ？」

と聞くと、

「はい。冬は苦手」

と、ピンクに染めた頬を緩ませて、微笑んだ。こんな女の子の前で食人の話はできないよなあ…。先輩に目配せし、話題をいったん打ち切ることにする。

昼休憩時、彩ちゃんを連れて外に出た。先輩は奥さんの手弁当だし、事務所を空にするわけにはいかないんで、1人で居残ってもらっている。だいたいはこのパターンで、俺は彼女とのプライベートルな時間を楽しんでいた。

4つ年下の彩ちゃんが今年の4月に配属されたとき、人手不足の事務所で先輩と陰気な顔を付き合わせる毎日を送っていた俺は、彼女をどう扱っていいかわからず、最初は会話を避けてすらいた。女に免疫がなかったわけじゃない。特に、口うるさかったり、ウツ気味で気遣いが必要なタイプには、身内柄、精通していたと思う。彩ちゃんは、むしろそういう要素のまったくない娘で、明るくて賢いし、優しいし、可愛いしで、完璧すぎて馴染めなかった。そんな俺に、警戒心のない彼女から積極的に近づいてくれて、仕事を通し、良好関係を構築していった。

…恋人とかいるのかな…。ものすごく気になってはいるが、聞いて肯定されるのもシヨックなので、未だにその課題には手をつけないでいる。

昼食には事務所のそばの喫茶店を選んだ。ここは窓が大きくて、太陽の熱がよく入る。少し眩しいけど、窓際の席を取った。まだ暖房のかかる季節じゃない。寒がりの彼女にとって居心地の良い場所が、ここしか思いつかなかったんだ。

「水嶋センパイって、神様とか宗教とかに興味あるんですか？」
着座してすぐ、彩ちゃんはそんな質問を投げてきた。

「え？なんで？」

彼女とその手の会話をした覚えのない俺は、記憶を辿りながら聞き返した。

「なんとなくです。ほら、お姉さんのマンションの話のとき、すぐに『幽霊』とかって発想してたでしょう？神秘的なものに興味があるのかなと思って」

大きな瞳を輝かせながら、彩ちゃんは付け足す。

俺は少し考え込んだ。『神秘』とか『空想』とかは、興味の範疇じゃない。むしろ現実的な理屈を大事にする方だ。

「幽霊だと思ったのは、人間と仮定するには無理があったからだよ。普段は、そういうご都合主義な発想はしないよ」

そう伝えたと、明らかに彼女は不満そうな顔をした。

「そうなんだ…」

「？」

どういふ答えが望みだったのかな…？

注文を済ませた後も、質問は続く。

「神社とかに行くのも…嫌い？」

ねだるように言われると、なんだか無碍むげにするのも可哀想な気がしてきた。

「そついうのは神秘とはまた別の話。寺なんかにはわりと立ち寄るよ。土地の由来を調べるのが好きなんだ」

寺社は初期の頃から人間の生活圏に置かれることが多い。だから、創建時の謂れなんかを調べると、思わぬ歴史を知ったりする。でも、彩ちゃんは、

「お寺じゃなくて、神社、です」

と依怙地にこだわった。…意図がよくわからない。

「何かの宗教に興味があるか、ってことを聞いてんの？」

強引にでも思い当たるのは、彼女がある種の信仰にハマっていて、その話をしたがつているのかということだった。

「う…。その…、そついうの、嫌いだったり…します…？」

言いくそうにテーブルに視線を落とす様は、凶星だと見ていいんだろう。

…彩ちゃんが宗教かあ…。そういえば、彼女の誠実な性格とか、他人との関わりの深さなんか、ちよつと特殊な気もするな…。

「嫌いつてほど、よくは知らない。ただ、少し警戒は持つてる」俺は正直に答えた。新興宗教の脅威は見聞きしている。彩ちゃんはその類いの宗教に心頭していたとしても、同調する気にはなれなかった。ただ、彼女の成り立ちを見ると、全否定する気は起こらないだから、

「彩ちゃんが好きなものを非難する気はないよ。今の君から変わってほしくはないからさ」

とフォローも入れておいた。

「そういうことじゃ…」

まだ彼女は納得しない。なんだろう。もつと積極的に勧誘されたほうが良かったかな？

うだうだと煮え切らない呟きを繰り返す彩ちゃんの前に、ランチメニューが運ばれてきた。華奢な体のわりに大食いの彼女は、

「えつと…今はいいです。今度、また続きに付き合ってください」と表情を一変させて、嬉しそうに箸を握った。

まだ続くのか、この話題は。……………ま、でも、見てて面白いから、いつか。

事務所に戻り、午後の仕事を手早く済ませて定時を待った。先輩は解析済みの映像を持参してきていた。彩ちゃんの退社を待って、再生する約束になっている。

簡単に説明してもらったところによると、ビデオには、はっきりとした『異変』は映っていないかったようだ。録画したのは、姉貴が就寝する23時から朝までの7時間ほど。問題の時間も稼働していたはずんだけどな…。インターホンは鳴ったのかと姉貴に確認したら、

「鳴ったと思うけど、ここのところ神経質になつて、昼間でも幻聴が聞こえるのよ。だから、確信はできない」

と答えられた。精神的に参つてきてるんだらうか…。

「お疲れさまでしたあ」

と、にこやかに帰る彩ちゃんを見送つて、先輩を急かした。事務所にある37インチのテレビにPCからケーブルを繋ぎ、

「7時間は付き合つてられないから、先に送るぞ」

と2時間ほど再生をすつ飛ばす。午前1時頃の映像が大写しになった。

「何も見えないですね」

思つていた以上に闇の濃い処理画像に、少し、がっかりする。

「室内灯を消すか。そのほうが目が慣れる」

先輩は立ち上がつて、入口横にあるスイッチをフル消灯した。

音のない黒い画面が延々と流れていく。監視カメラにはマイクがついていない。時折、白い帯が現れて画面が揺れた。その時だけ、わずかに背景の固形物が浮き上がる。

「アナログのノイズ除去は難しいな。ブロックノイズならある程度は行けたんだが」

言い訳する先輩が啞えた煙草の火が、暗い室内に火の玉のように浮いていた。

「ブロックノイズ？」

聞き返すと、

「モザイク」

と返ってくる。

「普段、何のビデオを解析してんだよ？」

つつこむと、

「そういう指摘を受けるから、彩つぴを先に帰したんだらうが」と低い笑い声が響いた。

30分ほどが何の変化もなく過ぎた。確かに、目の慣れのせいか、

背景が認識できるようにはなった。玄関ドアの上部に取り付けたカメラは、向かい側の高さ1・5メートルほどのコンクリート塀に向いている。塀の上辺が、真っ直ぐな横線となつて、画面の中央を切り裂いていた。

「何か動きましたね」

塀の向こう側の風景に当たる闇の中で、俺は、手招きのような仕草を見せる物体を見つけた。

「でも、人間の動きじゃないような……」

それは単調な動作を繰り返す。前に倒れ、後ろに倒れ、また前に戻る。

先輩は黙つたままだ。

俺はまた注視を再開した。白っぽい色をした、本当に、ちょうど人間の掌ぐらいの大きさだった。他のパーツは見えない。塀の向こうに、よきつと腕だけ出している。そんな印象だった。何だろう

…。

「…最初に、うちの妻が気づいた。それ、ススキじゃねえか？」

先輩が奇妙に抑えた声で指摘した。

「ああ、なるほど」

俺も納得した。マンシヨンの周囲、特に共用廊下の面する裏手は一面のススキ野原だ。そうやって見ると、何の不思議な光景でもなかった。

「疑心暗鬼で見ると、それらしく見えるもんだな。正に『正体見たり枯れ尾花』だ」

自分の網膜がいかに信用に値しないかを知つて、苦笑する。

「案外、インターホンが鳴つたのだから、風で何かが当たっていたのかもしれない」

ビデオに映る深夜の時間帯が、ススキの穂を揺らすほどの風を伴っているのだと知つて、そうこじつけることにも成功した。

先輩は黙つたままだ。

俺の導いた答えに不満を持っているのがありありと感じられた。

でも、他にどんな解釈があるだろう。何かを見落としているか、俺？

「お前のお姉さんの部屋、マンションの高層階じゃなかったか？」

意味ありげな声音で聞かれて、俺は、暗室の中、首を縦に振った。

「そうです。3階にある」

高層というほどではないが、あのマンションの最上階に位置する部屋だった。質問の真意を掴もうと先輩を見返ると、テレビ画面からの僅かな反射に映えた黒い顔が、無言で顎をしゃくる。

「もういつぺん、しっかり画像を確認してみる。お前がおかしいと思わないんなら、それでいい」

「……………」

少し巻き戻し、言われたとおり、もう1度、テレビを凝視する。黒い画面の中央やや上部寄りに、コンクリート塀の上辺が映っている。コンクリート塀が真つ黒な障壁となっている向こう側、マンションの敷地の外に当たる場所で、白っぽい植物の穂先が、よく見ると大量に揺れている。

「…遠近感がちょっとおかしいですね」

本来なら、3階から地面に生えたススキを見ているのだから、もつと小さく感じてもいいはずだ。

「でも、ここまで暗い動画だと、おかしいとも言い切れないなあ。

脳が勝手に錯覚してるのかもしれないし」

自分の感覚に、自分で反論してみる。と同時に、日のあるうちに見た姉貴の玄関先の光景を反芻した。3階から見下ろした場所にススキの原は見えていたか。…見えていた、と思う。

「もつとはつきりとした…例えば、いるはずのない子どもがいたとか、骸骨やミイラが立っていたとかいう証拠が出てほしかったんだけど」

理想を呟くと、先輩が、やっと自分の意見を口に出した。

「俺も奥さんも、その遠近感には引っかけかりを覚えたよ。でも、俺たちは現場に行ったことがねえからな。お前がそれほど違和感を感じないんなら、大したことでもないんだろう」

「違和感を感じたとしても状況の説明ができませんよ。姉貴の部屋がスキの原っぱの真ん中にワープしたとも思っただんですか？」俺は笑って、先輩の疑問を杞憂とした。

そのとき、いきなり事務所の入口あたりから、第三者の声が聞こえてきた。

「あの…何やってるんですか…？」

入口脇のスイッチに手をかけたまま、点灯をためらっていたのは、もう30分以上も前に帰ったはずの彩ちゃんだった。俺は、反射的にテレビを消した。

「なんだ、まだいたのか」

先輩も所在無げに腰を浮かしてから、彩ちゃんにスイッチを入れるように指示する。

明かりがついた。蛍光灯のちらついた光線が目染みる。彩ちゃんが近づいてきて、俺の隣に放ってあったビデオの空パッケージを持ち上げた。

「これ、なあに？仕事のビデオ？」

どうやら、俺と先輩で勉強会を開いていたと勘違いようだ。向上心の強い彼女は、新人だからと、残業を免除したり、講習から外したりすると、逆にいじける。

「違うよ。いたってプライベートなもん」

俺がやんわりとパッケージを取り上げると、猜疑心の拭えない視線で見返された。

「男同士の鑑賞会っていやあ、わかるだろうに。お前も見たいのか？」

先輩が迷惑なほど絶妙なフォローをしてくれたお陰で、

「いえ、いい、いい」

彩ちゃんは真つ赤になりながら、俺たちから距離を取った。…こうやって評価が墮落していくんだろうな、俺…。

「んで、なんで戻ってきたんだよ？忘れ物か？」

俺がデッキからビデオを取り出している間も、それと平行して先輩が2本目の煙草に火をつけている間も、彩ちゃんは、少し離れたところに佇んで、特に何をする気配もなかった。

「忘れ物じゃなくて…その…水嶋センパイを待つてたんです…」
縮こまったような仕草を見せながらそう答える彼女に。

俺の思考は停止した。

代わりに、先輩がニヤつきながら背中を叩く。

「良かったなあ、ミズシマくん。彩っぴが『君と2人で』帰りたいってさ」

「え、べ、別に約束してたわけじゃ…」

慌てて言い訳しかけたが、でも考えてみれば、約束もないのに待つてくれた彩ちゃんの心情は、充分に喜んでいいものだと思い直す。
「…ちよつと待つてて。すぐ支度するから」

自分のパソコンの電源を落としたが、そう伝えたと、ウィンドウの落ちていく画面の中に、弾けた笑顔で頷く彩ちゃんが映った。

親父が他人を殺したと聞いたとき、俺は、俺にはもう誰かに好かれる資格なんかないんだと覚悟した。今まで、他人の好意に触れる機会が皆無だったわけじゃない。でも自分からそれを拒絶した。関わることで、周囲に親父の罪が知れるのが怖かった。非難され続け、だんだんと狂っていったお袋のようになるのが怖かったんだ。

それなのに、…何故だろうな…、彩ちゃんだけには、その冷え固まったガードを解くことができる。信頼、というのは、こういう感情のことだろうか。なかなか心地良い。

「お待ちどう。行こうか」

抑えてはみたが、どうしても浮かれる声で、俺は彩ちゃんの横に並んだ。先輩に挨拶したかったが、直前にかかってきた電話が深刻そうな様子なので、ジェスチャーだけ見せて帰ろうとする。

「待て！…水嶋、お前に電話…」

突然、先輩が声を荒らげた。険しい表情で受話器を突き出す。

「え？」

戸惑うと、

「お袋さんから」

と補足が入る。それから、こう付け足した。

「お姉さんが、隣人を刺したらしい」

意味が頭に入って来なかった。

姉貴の失踪 2（前書き）

この章には警察の調書の場面が出てきます。経験者はお気をつけ下さい。

姉貴の失踪 2

「水嶋センパイ、前！」

助手席からの控えめな声で、俺は急ブレーキをかけた。目の前に赤く点灯している信号がある。辛うじて、停止線の手前で車を停められたようだ。

「ごめん、考え事してた」

シートベルトを握りしめて心配そうに見ている彩ちゃんに謝ると、彼女は微かに微笑んで、

「一緒に来てよかった」

と囁いた。

お袋の話は、お袋自体も事実を飲み込んでいないみたいで、よく要領を得なかった。俺に電話する、つい10分ほど前に警察から電話があつたこと。その警察から、姉貴の隣人が腹部を刺されて重症で見つかり、姉貴に容疑がかかっていると教えられたこと。姉貴の家の電話に連絡がつかないこと。そんな断片的なことを早口でまくし立てられた。

姉貴が他人を傷つけるというのが、まず信じられなかったが、トラブルの件もある。口論の弾みでそんな事態に発展したと予想するのは、無理ではなかった。

ちらつと車内の時計を確認する。7時を回ったところだった。力伊さんは…まだ会社だろうか。あれだけ取り乱していたお袋が、力伊さんにまで連絡を取っているはずはないだろうな。

「彩ちゃん、ごめん。俺の携帯、荷物の中から出してくれる？」

「あ、はい」

後部座席に手を伸ばしてカバンをたぐり寄せている彩ちゃんの安全を、少しスピードを落として図りながら、俺はせり上がってくる焦りを押し殺した。落ち着こう。大丈夫。姉貴が傷害を犯したとして

も、背景には刺した相手に不利な事情がある。大丈夫。姉貴の立場は守ってやれる。

「携帯出しました。あの、ダイヤルしましょうか？」

彩ちゃんが俺の携帯を抱きながら聞いてきた。

「ありがとう…。それじゃあ、ごめんだけど、自宅にかけてくれる？お袋と話がしたいんだ」

彼女を使うのは申し訳なかったが、注意力が散漫な今の俺が携帯操作まですれば、さらに余計な心配や迷惑をかけかねない。

「はい。わかりました」

彩ちゃんは遠慮がちにアドレス帳を開いて、通話ボタンを押したようだ。

「…繋がらない」

コール音が俺の耳まで届いていた。30秒は鳴らしている。自宅の固定電話は、子機がお袋の部屋に置いてある。気づかないわけはなかった。

「お母さん、もしかして警察のほうに？」

「かもな」

彩ちゃんの推測は当たっている気がした。

入れ替わりに俺の携帯に電話がかかってきた。

「前川さんからです」

彩ちゃんが先輩の名前を着信表示に見る。

「出てくれる？」

頼むと、頷いて内容を仲介してくれた。つい今しがた、会社にお袋から電話があったこと。お袋は、警察から呼び出されて、刺された隣人が運ばれた総合病院に向かっているとのこと。

「なんで直接水嶋センパイの携帯電話に連絡しないんだろう、って前川さん、言ってます」

もつともな先輩の疑問を伝える彩ちゃんに、俺は頭を掻いて答えた。「あの人、長い数字を、覚えたり、打ったりすることができないん

だよ。だから局番の短い固定電話同士で話したがるんだ」

「そうなんですか。じゃあ、前川さんには、お母さんと合流するまで会社にいてもらったほうがいいですね」

てきばきと先輩にまで指示を飛ばしてくれる彩ちゃん。心底ありがたく思いながら、甘えついでに愚痴まで聞かせちゃった。

「お袋、中度の鬱病なんだ。だから、こんなふうに、普通の人間にできることができなかったりするんだよ」

ごめんな、と付け加えると。

彼女は、しばらく無言で前方を見据えた後、俺に軽くもたれかかってきた。

「水嶋センパイ、謝ってばかり。なんにもセンパイのせいじゃないのに」

「……………」

…そうだな。俺が全部を背負う必要はない。少し力が抜けた。

総合病院に進路を変更する。会社と病院が同じ街中にあるため、自宅に帰るよりはだいぶ早い到着になった。

一般診療の時間が終わった病院は、正規の玄関が閉められ、救急搬入口と隣り合わせた夜間診療口に動きが集まっている。受付で事情を説明すると、救急搬入口のほうに回れと指示された。搬入口すぐの処置室に警察が待機しているらしい。

赤いランプが照らす、妙に薄暗い入り口を入ると、廊下の長椅子に見知った顔が座っていた。カイさんだった。

「来てたんだ。なあ、どうなってんの？」

今まで連絡の一つも超越さなかった気の利かない義兄に苛つきながら、俺はカイさんに詰め寄った。彼はぼんやりと濁った顔を上げて、皮肉っぽいセリフを返す。

「サチが傷害事件を起こしたんだよ。聞いてないの？」

「聞いたよ。それはわかってる。どうしてこんな状況になったか聞いてんだよ」

嫌味なんか言える立場じゃないだろ、と、内心、憤慨した。カイさんがもつと親身に姉貴の相談に乗ってやっていたら、こんな事件は起こらなかったんじゃないかと思えたから。

「サチが勝手なことしたんだよ。だから言っただろ。他人なんかに関わるなつて。隣がどんなことしていようが、うちには関係ないじゃないか」

カイさんの吐き捨てるような言葉。俺は、わざと乱暴な音を立てて、義兄の隣に腰を落とした。

「姉貴は間違っただことはしていない。俺には、あんたのほうが、よっぽど、みつともない人間に見える」

率直に感情をぶつけると、カイさんは声を2トーンぐらい上げながら、

「犯罪者のくせに偉そうに言っくなよ！」
と喚いた。

俺に対して言ったセリフではないと思う。俺は犯罪者じゃないから。だから余計に許せなかった。姉貴を、あれだけ執着して妻にした女を、簡単に断罪するカイさんが。

「あんた、屑だな」

言いたいことが多すぎて、それだけしか言えなかった。

「お前らのほうが屑だ」

義兄はそう呟いて顔を覆った。

カイさんと話しても埒が明かないので、早々に座を辞して処置室に向かう。

後ろからついてきた彩ちゃんが、ためらいがちに俺の腕にまわりついて、心配そうに覗き込んだ。

「センパイ、大丈夫？いつもと違う…」

…いつも？いつもは、俺、どんな態度を取ってたんだっけ？それすらも思い出せない。駄目だな。冷静なつもりだけど、頭に相当、血が上ってる。

「義兄とは、普段から仲が良くないんだ」

特別にカイさんと仲違いしていたわけじゃないが、そう言い訳する。「その…彩ちゃんには、変なところを見せて…悪い」

無関係な彼女に対して、申し訳なく思う。恐縮して彩ちゃん表情を伺うと、彼女は目を細めて、

「また謝る。そういうの、要らないですよ」

と笑った。感謝より罪悪感で胸が痛くなって、俺は彼女の頭を、やや乱暴に撫で回した。

「謝るぐらい、させてくれ」

そう頼むと、彩ちゃんは、びっくりしたような顔をした。

「だからセンパイは…」

と何かを言いかけたが、結局、続きは言わず、黙って、頭に乘せている俺の手を強く握り返した。

小さなプレートを掲げただけの殺風景なドアをノックすると、中から若い看護師の女性が顔を出した。

「すみません、警察の人は…？」

事情を聞くだけだ。そう思っていて、警察とコンタクトを取る羽目になったことに、内心、怖気づく。…我ながら情けないな。

「警察の方なら、もう被害者に連れ添ってICUに行かれましたよ」
看護師は答えて、2階の奥にあるという集中治療室の場所を丁寧に教えてくれた。礼を言って場を離れようとしたとき、処置室の中から、かすかな雑談の声が聞こえてきた。

「どっち？ 加害者の身内？ 被害者の身内？」

「加害者つばいわよ。さっき、廊下で言い争いをしてたって。やっぱり身内もそういうタイプなのね」

…事実だから、そう認識されても仕方がない。でも…なんだろう…。必要以上の悪意が周囲を締めつけてきているように感じる…。

1階には夜間外来の患者の姿も見られたが、2階に上がると、冷たい廊下の先にも後にも人影はなくなった。

「あ、そういえば」

唐突に彩ちゃんが寒がりだったことを思い出した。と同時に、俺は自分の上着を脱いで、彼女に渡していた。

「冷える前に着ておいて」

自分が笑顔を維持しているのが自覚できる。彩ちゃんは、また驚いたような表情をしたが、すぐに、

「ありがとう」

と受け取って、それを羽織った。

「…センパイ、大丈夫？」

さっきの質問を繰り返す彼女に、機械的に、

「うん。大丈夫」

と繰り返す。いや、本当に大丈夫だ。まだ、彩ちゃんに配慮するぐらいの余裕はある。

複雑な造りの建物を、案内されたとおりに進んでいくと、急に光量を落とした一角に出た。壁沿いにいくつか部屋が並ぶ。磨りガラスをはめ込んだドアから光が漏れる部屋があった。案内プレートを見ると『親族控室1』。目を転じると、廊下の先には右側に曲がる大きな角があった。『この先ICU』と、手書きの注意書きが貼られている。

「警察もICUにまではついていかないだろうから、この辺にいるんじゃないかな」

『親族控室1』の前を未練がましく通り過ぎた俺は、角を曲がってからも、そこに関係者が溜まっているんじゃないかと、人の気配を探した。けれど、『集中治療室(Intensive Care Unit)』と表記された看板が掲げられた、ごつい自動ドアの前には、誰の姿もなかった。

「インターホンで聞いてみますね」

彩ちゃんが自動ドアの脇にある送信機に走り寄る。気を使ってくれているのが、ありありとわかった。喉に詰まるような重苦しい空気が、そんな行為1つで薄れていく。

彩ちゃんがいてくれて、よかった。カイさんは、すでに俺たちの味方ではなくなっている。お袋には、もともと力がない。頼みの綱だった姉貴が当事者として身動きが取れない今、俺が放棄できる分は1つもない。深呼吸をして、何度も、大丈夫、の言葉を飲み下す。平気だ。俺が危惧しているのは最悪の事態だから。姉貴の正当性が認められずに懲役に課せられて、自己防衛のためにお袋まで姉貴を見捨てて、なんて結果にはならない。いや、しない。

彩ちゃんが、応答してきた病院関係者と会話を始めた。その瞬間、親族控室のほうから、つんざくような悲鳴が聞こえた。お袋の声だった。

叫び声が断続的に続く。俺は急いで控え室まで戻り、ドアノブを握った。開閉までのわずかな躊躇の時間に、室内からは別の怒号が響いた。

「キチガイの言い訳なんか誰も聞いてないんだよっ！さっさとミニを返せっ！！」

女の声、それも、お袋と同年代ぐらいに思える。お袋の泣き声が大きくなった。俺は反射的に部屋に飛び込んでいた。

中には、応接テーブルにもたれて床に崩れているお袋がいた。その横に仁王立ちしている、ガリガリに痩せた茶髪の女が、憎々しげな表情を露わにしてお袋を見下ろしていた。女を抑えるように腕を取っているスーツ姿の若い男は警官だろうか。他にも、制服を着込んだ巡査が1人、ドアのすぐ脇に待機していた。

巡査が俺のプライベートエリアに踏み込んできて、厳しい声で質問した。

「君は？関係者か？」

「そうです。その…」

俺はお袋を指さした。

「泣いているのは、俺の母親です」

自分の親の醜態を言葉に出すのは、かなり気分が悪い。しかも警官

の態度は威圧的だ。不快さから逃れるために離れようとすると、彼はさらに距離を縮めてきた。犯罪者を逃すまいとしているような態度だった。

「姉が大変なことをしてしまったようで、すみません」

俺は、警官の態度を緩和させるべく、そう謝った。司法に噛みついてもいい結果にはならないだろう。

「弟さんかね。事情は聞いていると思うが、飯塚幸子には傷害容疑がかかっている。被害者は重症で意識不明だ。場合によっては、罪状は殺人未遂に」

けれど俺の思惑は外れて、警官は畳み掛けるように責め立ててきた。スーツ姿のほうが、

「高見さん、そのへんで」

と歯止めをかけると、舌打ちをして離れていく。

まただ。さっきの処置室の奥にいた看護師たちの会話が重なる。

なぜ、こんなに誰からも敵視されるんだ？

動揺を抑えて、お袋に近寄った。お袋は顔を上げることなく、ヒイヒイと掠れた声を床に向かって吐いている。背中をさすって体を起こさせ、俺は、未だに憎悪の色を浮かべる60代ぐらいの女に向き直った。

「飯塚幸子…加害者の弟です。あなたは？」

予想はついたが確認してみる。女は応えず、横柄な態度で向かい側のソファに腰を沈めた。スーツの警官が間を取り成す。

「被害者のお母さんです。事情を聞くために、関係者を同室に集めてしまいました。すみません」

頭を下げる、俺より若干、歳若い彼に、俺も謝罪を返した。

「いえ。お世話をかけたのはこちらですから」

お互い、冷静に話ができる相手だと認め合えた俺たちは、警戒を解いて会話を進めた。

「家族の方にも調書作成のご協力を願いたいんですが、よろしいですか？」

「わかりました。ただ」

俺は頷いて、それから、お袋を目で示した。

「母は精神を病んでいます。できれば別室で休ませてやりたいんですが」

「そうでしたか。それは本当に申し訳なかった。すぐ手配します」
警官は制服の巡査にその旨を指示した。すぐに看護師が来て、弱って歩けなくなっていたお袋を抱えていつてくれた。

調書というから、姉貴の家族構成や生い立ちなどを、俺の視点で聞かれるのかと思ったら、警官：栄生^{やんごう}さんは、姉貴の現在の友人関係などに踏み込んできた。

「よく遊びに行かれる友だちとか親戚とかのお話を聞いていませんか？」

「親戚は疎遠になつていて、姉貴が立ち寄るような相手は思いつきません。友人は…結婚してから、それまでの関係のほとんどが消えてしまったと、以前、言っていました」

カイさんがヤキモチを焼くから家庭外の人間とはあまり交流できない、と、姉貴は笑っていた。聞いたときは惚気^{おぼけ}の一種かと思っただけど、こうなつてみると、むしろ呪縛^{まじな}だったんだなと同情する。

「唯一の心当たりは、同じ町内に住むお爺さんですが…遊びに行く相手というよりは近所付き合いの域を出ていないように、俺には思っています」

芳賀さんのことも、念のために伝えておいた。栄生さんの思惑がわからないからだ。

「お爺さんですか…。他に…例えば、男性の知り合いなどに心当たりはありませんか？」

具体的になつてきた栄生さんの疑念に、俺は不当なものを覚えて、語気を強くした。

「今回のことは、以前からあった隣人トラブルが発展しただけのものです。隣人：姉が刺してしまった相手は、普段から自分の子ども

を虐待していたようでした。姉はそれを苦にして、いろいろと手を尽くしていたんで、被害者も、きっと姉に対していい感情を持つていなかったんだと……」

俺は栄生さんと、それから、向かい側で目を光らせている被害者の母親に向かって訴えた。けれど言い切る前に、母親の激しい反論を浴びせられる羽目になる。

「うちの娘が虐待なんかするわけないだろっ！お前んとこのキチガイが毎日毎日嫌がらせをしてきたんじゃないか！！」

「虐待は事実です。学校にも相談しています。民生委員も訪問したとか。学校のほうに問い合わせてもらえばわかります」

俺は、今度は栄生さんだけに向かって説明した。この母親には、きつと何も通じない。

「確認しておきましょう」

栄生さんは請け負ったが、あまり重要視はしていないようだった。

「お姉さんが被害者の間部さんまなへと争う原因は、以前からあったということですね」

そう言いながら、パサパサの髪を掻き上げる老女に視線を送る。味方を得るどころか、むしろ揚げ足を取られたような流れになって、俺は絶句した。

……なんだろう、この不条理なシナリオは。姉貴は善意から……、と、恐らく、子どもに対する保護欲から、こんな厄介な隣人と関わることになった。事情としては、それでいいはずだ。目の前の凶暴な『母親』に是があるとしても言いたいのだろうか。

「……姉は他人に簡単に手を上げるような性格ではありません」
どうフォローしているのかわからなくなって、俺は、今回のことが『事故』に近い行為であることを、改めて強調した。

「被害者：間部さん、ですか？彼女はどのような状況で刺されたんでしょうか？姉に一方的な非があるような状態だったんですか？」
確認すると、栄生さんは、少し顔を曇らせて、答えた。

「飯塚幸子さんの旦那さんから、何も聞いていませんか？」

「いえ、何も…」

カイさんがその辺りを知っていたのか。でも、さつき廊下であった彼には、そんな説明をする素振りはなかった。

「そうですか」

栄生さんは溜息をつくとき、

「ちよつと外へ出ましようか」

と老女の不信に満ちた視線から逃れる場所へと、俺を誘った。

暗い空間を、来た時とは逆の方向に戻っていった。相変わらず廊下は無人だ。白い無機質な蛍光管からの光が、長い道先を照らしている。空調が最小限に抑えられていて、俺にとっても寒く感じた。彩ちゃんを先に帰してやればよかったな。そんな考えが頭を掠める。彼女は、今、お袋に付き添ってくれているはずだ。

栄生さんは、途中にある、すでに照明の落とされた休憩室に入り、奥の席を俺に勧めた。それから自分は長テーブルを挟んだ向かい側に座る。

「正確に言えば、お姉さんが間部さんを刺した現場は、誰も見ていません」

そう切り出す彼。真意が測れず、俺は慎重に問いかけた。

「でも、姉が刺したことに間違いはないんですよね？」

「十中八九」

微妙な言い回しで逃げる警察機構に苛立った俺は、コントロールできない感情をぶつけた。

「姉は何と言ってるんですか?! 嘘だと思われてもいいから、姉の言葉をそのまま聞かせてください!」

栄生さんは、そんな俺を無表情で観察する。

強い、いや、怖いぐらいの違和感が襲ってきた。そうだ。ここに来てから、姉貴の存在を感じていない。カイさんはなぜあんな外れた場所で孤立していたのだろう。お袋はなぜ姉貴を守るための反論もせずに弱りきっていたのだろう。

「あの…いえ…」

嫌な考えが頭を掠めて、俺は栄生さんへの質問をためらった。被害者は腹部を刺されて重症だという。俺は、刺したほうの姉貴は、少なくとも身体的には害されていないと思い込んでいた。でも、そうじゃなかったら…。姉貴も危害を加えられていたとしたら…。

「……………姉は無事なんですか？」

言葉を搾り出すと、栄生さんは、ふっと息を漏らした。

「本当にお姉さんの行き先を知らないようだね」

「は？」

思わぬ答えに、我ながら間拔けな声を出した。栄生さんは、やや厳しい表情をして、先を続ける。

「お姉さんは現場から逃走したんです」

うろたえる俺に、さらに重ねる。

「間部さんの娘さんも一緒に失踪しました。たぶん、行動を共にしていると思います」

頭の中が疑問符だらけだ。姉貴が逃走？しかも、虐待されていた子どもを連れて？

「エスカレートした虐待から子どもを守ろうとして、逃げたってことじゃ…」

後先の事情をすっ飛ばして俺がそう推理すると、栄生さんは苦笑した。

「母親を刺したのが、子どもを守るための正当防衛だったとして、なぜ一緒に逃げる必要があるんですか？」

もつともだ。

「重症の母親を見て動揺した子どもを、放っておけなかった、とか姉貴ならそんなこともやりそうな気がした。自分が傷つけてしまった母親を見てショックを受ける子ども。その子どもを現場に放置しておけなくて連れ出した…。

栄生さんは頭を振って、また小さく笑った。

「どんな事情であれ、お姉さんが行なっていることは犯罪です」

そうだな。俺も納得する。姉貴は間違っている。逃げた時点で、子どもを巻き込んだ時点で、弁解はできない。

「姉を…捕まえてはもらえるんでしょうか？」

俺から尋ねると、栄生さんはゆっくりとした仕草で、

「全力を尽くしています」

と頷いた。

なんだか妙に落ち着いた。諦めがついたんだろう。自分でもわかる。

姉貴の名誉を守ってやりたいと、ここに来るまで、ずっと思っていた。でもそれが破綻して、…俺は少しホッとしている。姉貴にだって悪いところはある。すぐにヒステリックになって泣き出すお袋も、世間知らずで小心者の俺も、欠点だらけの人間なんだ。アルコール中毒の親父を詰なじっているうちに、自分たちだけは、そんなつまらない人生を送ることはない、というわけだか思い込んでいた。つまらない人生を送らせてはいけないと、ずっと気負っていた。

栄生さんは、パネルの照明の消えた、でも辛うじて動いている様子の自販機から、コーヒーを2つ買い込んで、1つを俺の目の前に置いた。

「すみません。気を使ってもらって。払います」

財布を取り出そうとすると、笑って、

「僕からの敬意です。普通は、家族が加害者になったら、もつと見苦しく足掻くもんです」

と言った。俺も笑って軽口を返そうとしたが、予想せず、声が震えて、コーヒーをこぼした。

「…すみません。勝手だとは思いますが、姉貴のことが心配で」

言い訳すると、

「そうですね。当然だと思います」

と慈悲のイントネーションが返ってきた。ちくしょう…。本当に情

けないな、俺は…。

携帯が鳴った。栄生さんのものだ。
「失礼」

立ち上がった隅に移動する彼をぼんやりと見送っていると、暗い休憩室の中、

「えっ、ほんと？」

と若い警察官の本性が現れた物言いが響いた。

電話を切った後、栄生さんは走り寄って来て、空になったコーヒーのカップを握った。

「間部アリサが目覚ましたそうです」

『アリサ』という聞き慣れない名前に戸惑っていると、

「被害者ですよ。あのお母さんがつけた名前らしいでしょう？」
と笑った。俺も釣られて顔を緩ませかけてから、

「え？意識が戻ったんですか？！」

と一気に覚醒した。

被害者が回復してくれた。それがこんなに嬉しいことだとは思わなかった。巡査に脅されていた言葉が消滅していく。『殺人未遂になるかも』。いや、罪状は軽くないだろう。でも、姉貴を人殺しだけにはしなくて済んだ。

「医師から許可が出たので、話をしに行ってきます。水嶋さんはさっきの控え室に戻っていてください」

栄生さんから、そう指示されて、俺は大きく頷いた。

控え室に戻ると、入り口の横に彩ちゃんが佇んでいた。

「あ、センパイ…。どこ行っちゃったのかと思った」

俺の顔を見ると、明らかな安堵の顔で駆け寄ってくる。

「うん、ちよつと警察の人と話を…。彩ちゃん？」

俺の腕を掴んでうつむく彼女。

「どうかした？」

聞くと、

「あの…お姉さんの行方が…」

と切れ切れに答えた。ああ、お袋から聞いたのか。

「今、警察から教えてもらったよ。大丈夫。きっと、動転して逃げただけだと思うから。姉貴、普段は偉そうなことを言うけど、こういうのに耐性がないんだ」

犯罪に耐性もクソもないと、自分でも思ったが、彩ちゃんの不安を軽くしてやりたくて、表現を砕いた。彼女は微かに笑って、

「すぐに見つかりますよね？」

と念を押した。

「うん」

身内の俺と同じレベルで心配をしてくれる彩ちゃんが、いつもの20割増ぐらいに可愛く感じた。

10分ほど待ったところで、ICUのほうから大勢の話し声が聞こえてきた。

部屋には入らず、廊下にいた俺に、栄生さんが歩み寄ってくる。

その後ろには間部アリサの母親が、相変わらずの凶悪な面相を浮かべてついてきていた。彩ちゃんを暴言の餌食にはしなくて、俺は彼女を背中に押しやり、自分から彼らに近づいた。

「完全に持ち直したんですか？」

被害者の覚醒が一時的なものでないことを祈る。栄生さんは笑顔で、

「ええ。もう大丈夫です」

と請け負った。そうか…、よかった…。

栄生さんは、俺たち、俺と彩ちゃんと母親に部屋に入るように促すと、彼自身は、

「署に報告してきます」

と離れていった。間部アリサの口から何か進展が聞けたんだろう。姉貴の行方に関することはなかっただろうか。

少しでも早く結果を知りたかった俺は、さっきと同じようにソフ

アにふんぞり返る対面の母親に話しかけてみた。

「アリサさんは、事件のことについて、証言できるぐらいに落ち着いてたんですか？」

「はあ？」

苛ついた様子の母親は取り付く島もない。仕方なく口をつぐむと、彼女は、なぜか急にそわそわしだした。彩ちゃんに向かって気味の悪い猫なで声を出す。

「ねえ、あんた。その兄さんの何なの？」

「へ？」

予想外の言葉を投げられた彩ちゃんは、目を丸くしながら俺を見た。俺にも母親の意図がわからない。

「か、会社の先輩です」

つつかえながらそう答える彼女に、母親はさらに質問を重ねる。

「兄さん、会社ではどんな仕事してるの？有能？」

「え、あの……」

うろたえる彩ちゃんに、俺は、

「答えなくていい」

と断じた。なんだ、この人。想像以上に下衆な人間性を持っていそうだ。

母親は、今度は俺に向かって話しかけてきた。眉が八の字に歪んでいる。先刻の居丈高な顔つきとは明らかに一変していた。

「アリサがミナミのことを虐待したって言ってたけど、ねえ、あんた、悪いけど、学校にそういうことはなかったって断ってきてくれない？」

文体がおかしい。でも言いたいことは分かった。

「そんなことはできません」

今さら娘の体裁を取り繕って何になるんだよ。そもそも、娘が虐待をしているって認めてないんじゃないのか。

「できる、できないじゃなくてさ。あんたのお姉さんがうちの娘を通報したんだろ？だったら、お姉さんから取り下げてもらえばいい

じゃないか」

「虐待の通告はそういうシステムではないんです。それに……」

行方不明という深刻なことになっている姉貴に、そんな些細な不利益の尻拭いをさせる気か？ 憤りをなんとか抑えて、俺は続けた。

「……虐待がないことになれば、姉がアリサさんを刺した理由に整合性がなくなります。俺は姉を、無意味に隣人に刃物を向けるような人間と見せる気はない」

あんたの娘より姉貴のほうが大事だ、と言外に込めると、母親は、そういう理屈にはすぐに反応した。

「じゃあ、あたしの娘が刺されて当然の人間だと言いたいのかい？

！」

特に反論はしない。

「アリサは虐待なんかしてないよっ！ ミナミの出来が悪いから、叱らなきゃ、マトモに育たないだろ……！」

罵倒の矛先を孫にまで向ける彼女に、軽蔑の沈黙しか返せなかった。

母親は再度、彩ちゃんに向かって、まくし立てる。

「あんたもこんな男と付き合っていると、泣き寝入りすることになるよ。人の娘を陥れておいて平気な人間なんだからね。それとも、あんた、マゾなの？ ああ、そういう顔してるわ。あんたみたいな女が、優しさの欠片もない男を作ってるんだ。自覚しろ、ばっか……！」

聞かないようにはしていたが、いい加減、こっちもキレてきた。怒鳴りつけようとした瞬間、彩ちゃんの間延びした声が割り込んだ。

「それでも、わたしはセンパイが好きですけど？」

思わずまじまじと見返すと、彩ちゃんはちょっと赤面しながら、

「あ、でも、マゾじゃないと思います」

と俺に向かってはにかんだ。

「……わかってる」

我ながら間抜けな答え。何がわかってたんだろっ。

「男性に優しくしてほしいと思うなら、お母さんも、もうちょっとお孫さんに愛情を持ってあげてください。今の話を聞いていると、

なんだか…センパイのお姉さんのほうが、ずっとミナミちゃんに親身になってあげていたみたいに感じます」

穏やかな物言いの裏の皮肉に、母親は反論してこなかった。

栄生さんが戻ってきた。開口一番に、こう言う。

「安心してください。お姉さんは無実です」

俺と彩ちゃんは意味がわからず、反応できなかった。母親だけが、バツが悪そうな顔で横を向く。

「被害者を刺したのは被害者の娘です。小学2年生の女の子。水嶋さんから虐待の話を聞かせていただいたので、今、学校のほうにも事情を問い合わせました。体罰の痕跡はなかったのですが、子どもの精神状態から何らかの障害が見受けられたそうです」

栄生さんはすらすらと説明して、それから、俺に頭を下げた。

「長い時間、ご協力いただきありがとうございます。今日はお帰りいただいていいですよ。また連絡するかもしれませんが」

「姉貴は…どうなるんですか？」

状況は飲み込めたが、今後の予測が未だにつかない俺は、栄生さんに確認した。

「一応、無関係ということになります。ただ、加害者…間部ミナミさんと行動を共にされているのでしたら、保護した後に、立場に変化があるかもしれません」

慎重に言葉を選ぶ彼に、今度は俺が頭を下げた。とにかく見つけてほしい。母親を刺してしまってショックを受けているだろう女児を、懸命に宥めている姉貴の姿が浮かぶ。善意がこれ以上こじれないように、俺にできることは、これくらいしかない。

姉貴の失踪 2（後書き）

原稿用紙にして36枚の長丁場になってしまいました。あえて感情の機微を丁寧に書きましたが、「そこまで要らないよ」と思われた方は、感想欄にでも書いていただけると嬉しいですよ。

姉貴の失踪 3（前書き）

この章には管理人の罵倒の場面が出てきます。大家さんとうまく行っていない方はお気をつけ下さい。

姉貴の失踪 3

彩ちゃんを帰すために、一旦、会社に戻ることにした。カイさんにお袋を預けたかったが、すでに病院内に姿がなかった。仕方なく、後部座席に乗るように指示して、助手席を彩ちゃんに勧める。すると、彩ちゃんは、

「お母さんのそばにいます」

と、生命力の流れ出たような体たらくを見せるお袋の隣に座った。

「ありがとう…」

お袋の手を握ってくれる彩ちゃんに、俺は感謝以上の感動を覚えて涙腺が緩んだ。慌てて運転席に乗り込む。弱った年寄りには、身内の俺の目から見ても醜怪だ。その体に抵抗もなく触れてくれる彩ちゃんは、優しいというより強い人間に見える。

会社に着くと、先輩はもう帰っていた。当たり前だな。時間は午後10時を回っている。彩ちゃんが自分の車に乗り込んで発進するのを見届けた後、先輩の携帯に電話した。

「おっ、帰ってきたか。お姉さんには会えたか？」

わざとらしく闊達な大声で対応してくれる先輩に、事の次第を話すと、急に声を潜めて、

「妙な話だなあ」

と言った。

「お姉さんが、その…ミナミとかいう子どもと母親の修羅場に出食わしたんなら、慌てて子どもを保護しようとしたって、普通は家の中に連れ込むもんだろ？」

「家には…」

無理解な夫が同居している。それで姉貴は外に連れ出そうとしたんじゃないか。先輩にそう伝えると、

「だったら計画的な逃走ってことか？財布とか上着とかを持ち出ししているか、確認しておいたほうがいいぞ。何の準備もしてないなら、

そう長居はできないだろうからな」

とアドバイスされた。確かにそうだ。俺は冷えてきた夜気に上着の襟を合わせながら頷いた。この寒空の中、万全の支度がないなら、そろそろ帰る必要が出てくるはずだ。それに、と、思いつく。子どもは母親の返り血を浴びているんじゃないか。そんな格好で遠くまでうつけるわけがない。

「もしかしたら、すでにマンションに戻ってるかもしれないですね」希望的観測を口に出すと、

「おう。お前もマンションに向かったほうがいいぞ。迎えてくれるのがそんな旦那じゃ、お姉さんも可哀想だ」
と先輩は笑った。礼を言って、車に飛び乗る。

姉貴のマンションと自宅は10キロほど離れている。本当は真っ直ぐにマンションに向かいたかったんだが、お袋を家で休ませなければならぬ。俺は電話を取り出して、カイさんにかけた。お袋を送り届けている間のことを頼みたかったからだ。けれど、数度のコールの後、

「この電話はただいま出ることができません」

というアナウンスが流れてきた。俺からの着信だと見たカイさんが、通話終了ボタンを押したんだろう。…まったく、あの人は…。

「お袋、姉貴のところに少し寄るよ」

と後部座席に向かって声をかけると、お袋は未だに掠れた声で、

「まっすぐ家に帰ってちょうだい。今回のことで、幸子のご近所に顔向けできなくなったんでしょう？そんなところに行きたくない」と答えた。ちよっとむかつ腹が立ったが、努めて態度に出さないように説得する。

「でも、姉貴が帰ってきてるかもしれないんだぜ。お袋が近所の白い目にさらされるのは嫌だっと思うなら、それは姉貴だっで一緒だろ。家族なんだからフォローしてやろうよ」
けれどお袋は、

「幸子は自業自得じゃないの」
と受け付けなかった。なんでだよ…。

お袋を自宅に着け、俺は車から降りることもなく、姉貴のマンションに向かった。１１時を少し回っている。

マンション周辺の住宅街はすでに寝静まっていた。車をフリースペースに停めようとしたが先客がいる。仕方なく見回すと、姉貴の部屋の割り当てスペースが空いていた。そこに突っ込み、運転席から出ようとして気づく。この場所には、いつも、カイさんの自家用車が停まっている。それがないということは、カイさんはマンションに戻ってないのか…。

俺はもう１度カイさんの携帯にかけてみた。…出ない。かなりの時間、待たされる。そして通信が繋がった。

「はい」

不機嫌そうな低いカイさんの声。

「俺です。今どこに？マンションにはいないの？」

聞くと、

「そんなところに帰れるわけないだろ！」

と怒鳴ってきた。

「でも、カイさんが帰っていないきゃ、姉貴が戻ったきたときに独りになるんだぜ…っ」

俺も負けずに大声を出そうとして…なんとか自制する。もう夜中だ。「なあ、あんたが姉貴を怒ってるのはわかったよ。だけど、こんな状況なんだ。もっと協力的になってくれてもいいんじゃないか？」

そう説得すると、カイさんはブツブツと何かを言った後、

「あーあ、でも今晚は帰れねえよ。もう飲んじまったもん」

と声のトーンを跳ね上げた。

…怒りで視界が歪んだような気がした。俺は握り潰す勢いで携帯を切った。目の前にこの馬鹿がいたら殴ってるところだ。

少しの間、動くことができなかった。深呼吸を繰り返して、なん

とか足を前に出す。階段を上り、3階の共用廊下に出ると、姉貴の部屋の隣、つまり事件現場の玄関に黄色のテープが幾十にも貼りつけられているのが見えた。それを横目で通り過ぎながら、姉貴の部屋のドアノブを回す。ガキ、とすぐに硬い手応えが邪魔した。…鍵がかかっている。

…そうだな。…それはそうだ…。家主が外で飲んでるんだから、誰も帰ってないこの家の施錠が開いているわけではない。

「くそっ」

俺は我慢できなくなつて壁に拳を叩きつけた。大きな音を立てる鉄扉を避けたのは、我ながら賢明だと思った。コンクリートの殺風景な外壁は、俺の憤懣ぐらいじゃビクともしない。

「親父…」

どこかに救いを求めたかったが、言葉の続きは飲み込んだ。親父は死んでいる。死者にしか頼れない自分の立場を認めるのは、情けなかった。

ドアに背を向けると、眼下にススキの群生が揺れているのが目に入った。俺はその体勢のまま座り込んだ。膝の中に顔を埋める。見なくなかった。何百本という干からびた手のような陰が、普通の生活のすぐ隣に広がる異界に、俺を引きこもつとしているように感じたから…。

結局、翌日までマンションの駐車場で留まった。朝方早くに戻ってきたカイさんを捕まえて、
「今日はどうするんだよ？」

と聞くと、カイさんは俺の方を見向きもせず、

「しばらく実家から仕事に通うことにする」
と言った。それを聞いて俺も諦めた。

「じゃあ、俺がこのマンションで姉貴を待つから、鍵を渡して」
と手を出すと、自分のキーホルダーから玄関の鍵を抜いて差し出す。戻ってくる気がないのか、と理解した。

朝一で先輩に休みの連絡を入れた。お袋の面倒を見なければなら
ないのと、マンションの管理人に謝罪に行かなければならないから
だ。先輩は快諾してくれた。

9時を待つて、まず事件を起こしたのと反対側の隣家に寄る。母
親らしい若い女性と2歳ぐらいの子どもが出てきた。騒がせたこと
を詫びると、

「びつくりしたけど、もういいの。解決したんでしょう?」
と尋ねられる。適当に言葉を濁すと、会話の流れで、事件時の状況
を少し教えてくれた。

昨日、夕食の少し前ぐらいの時刻に、鋭い悲鳴が聞こえたそうだ。
不審に思ったこの母親が、声のした共用廊下を覗くと、事件現場の
玄関先に姉貴が立っていて、その足元に間部アリサが這い出てきて
いた。最初はアリサが勝手に転んだのだと思った、と母親は言った。
けれどよく見ると、彼女の体は血まみれになっていた。

「サッチャンが『救急車を呼んで!』って叫んだから、あたしも慌
てて家の中に入ったの。119番して、また外に出たら、今度はサ
ツちゃんの旦那さんが立ってて、間部さんは相変わらずだったんだ
けど、サッチャンがいなかったのよね」

母親は姉貴と面識があるらしい。愛称で呼んでくれる関係を築いて
たんだな、と、俺は姉貴に感謝した。

「姉貴は…サチは、間部さんと揉めていた感じでしたか?」

そう確認すると、母親は大きく首を横に振って、
「警察の人にも、間部さんを刺したのはサツちゃんじゃないか、つ
て何度も聞かれたけど、サツちゃんがそんなことするわけないじゃ
ない。ミナミちゃんのことだ。間部さんに怒ってたのは知ってるけど、
でも、もし間部さんが児童虐待で警察に捕まったりしたら、一番可
哀想なのはミナミちゃんでしょう?だから、間部さんに嫌がられても
虐待を未然に防ぐんだって言うてたもの」

と説明した。

俺は礼を言つて母親から離れた。姉貴はやっぱ間違っていない。
「サツちゃん、今どこにいるの？実家？」

背を向けた俺に、母親が聞いた。逡巡したが、伝えておいたほうがいいと思つて、答える。

「姉は昨日から行方不明なんです。たぶん、あなたが119をして
くれている間に、どこかに行つてしまつたんだと思います…」

「ええ?!」

驚きの声を上げた彼女は、でもすぐに気を取り直して、

「あ、そうなんだ…。あたし、旦那さんに怒られて実家に歸つて
るもんだとばかり…。心配ね…。もし戻つてきたら、すぐ保護して
あげるね」

と言つてくれた。俺は深く頭を下げた。

マンションの脇の一軒家に住むという管理人を、次に訪ねた。竹林の囲む敷地への入り口を入ると、急に視野が開ける。芳賀さんの邸宅ほどではないが、広い屋敷だった。古い板壁の平屋が重厚な質量を持つて据わっている。

玄関に回つて声をかけると、未だにサツシになつていない引き戸が、耳障りな音を立てて開かれた。小さな80代ぐらいの爺さんが立っている。目付きは…とても友好的とは言えない…。

「飯塚です。昨夜はお騒がせして…」

謝ろつとすると、問答無用に目の前で引き戸が閉められた。中から、

「婆さん、塩！」

と怒鳴る声がある。

正直、ここまで拒絶反応が強いと思わなかった俺は、呆然としてしばらく声もかけられなかった。玄関先では老人が忙しく動き回っている気配がある。

気を取り直して、もう一度、呼びかけた。

「大変、申し訳ありませんでした。姉が戻ってきたら、必ず、また

一緒に謝まりにきます」

謝罪の言葉を重ねようとしたとき、再度、引き戸が軋み、さっきより憤怒の形相を強めた爺さんが出てきた。

「あんたたちには今日限り出ていってもらう！もう来んでいいわ！」

一方的に会話を切られて、俺は途方に暮れてしまった。

自宅に戻ると、お袋が布団に転がっていた。

「何か食べたのか？」

そう聞いて台所に向かう。そういえば、俺も昨夜の騒ぎから何も食べてなかったな。

「要らない……。食欲がない……」

拒絶するお袋に、

「食わなきゃ駄目だろ」

と諫めて、水を張った鍋を火にかけた。

背中を支えて起こし、粥を嚙らせる。お袋と同じ物を食べる気にならなかった俺は、台所の隅で茶漬けを掻きこんだ。

頭が重い……。何を考えたらいいのか、わからない。

「また幸子のところに行くの？」

布団の中からお袋が弱々しく尋ねる。

「うん。今は母さんより姉貴優先だ」

そう答えると、お袋は小さく泣き出した。

もし管理人にあのマンションを解約されたら、姉貴はどうなるんだろう。そんなことを考えながら、俺は車を走らせていた。

姉貴が何かやったのか？刺したのは隣の子どもだ。親子喧嘩に巻き込まただけじゃないか。それとも、隣人が刺されて死にかけてるのを放っておいたほうが良かったのか？苛々で、思考が前を向かない。みんな、姉貴が悪いとでも言いたいのかよ……。

車を、空きっぱなしのカイさんの駐車場に入れてから、俺は呼気

を吐き出した。そういえば、息を吸うことさえ忘れてたな。なんだか可笑しくなった。普段から、意識して呼吸なんかしてないじゃないか。

運転席から半身を乗り出すと、背後から近寄ってくる足音が聞こえた。振り返ると、芳賀の爺さんが、孫娘を伴って立っていた。

「サチさんが大変なことになったって聞いて…。どうなってるの？」
彼女は、こんなときでさえ穏やかな口調を崩さずに、聞いた。

「うん、あの…」

誰を信用していいのかわからなくなっていた俺は、懷疑の本心をなんとか隠して、慎重に状況を説明する。

「まあ。お爺ちゃん、藤原さんの言い分、あんまりじゃないですか」
孫娘は管理人の話を聞き咎めた。爺さんも厳しい顔をしている。

「一言、言いに行つてやりましょうよ。涼二さん、大丈夫よ。お爺ちゃん、この辺では一番強い力を持つてるの。解約なんかさせないから」

請け負ってくれる彼女の笑顔を見て、それから俺は爺さんに頭を下げた。

「よろしくお願いします」

爺さんたちを信用しているのか、自分でもわからない。この2人の言葉を喜んでいいのか、それすら迷う。

部屋に上がりこみ、玄関先に転がった。現実的なことは、もう何も考えたくない。

姉貴と子どもはどこに消えたんだ？隣の母親が通報している間のことだから、そんなに長い時間じゃない。事件時、姉貴は救急車を呼ぶように指示したと言っていた。冷静な行動に思える。その姉貴が、取り乱して、子どもを現場から連れ出したりするだろうか？

間部アリサを刺した間部ミナミのことを、ぼんやりと空想した。虐待されて鬱屈を溜めた小学2年生。小さな体で母親を瀕死の重傷に追い込むには、相当の思い切り…恨み…が必要だろう。そのミナ

ミが、逃げ惑う母親を追って玄関先まで来ていたとしたら…。出くわした姉貴にも見境なく刃を向けたとしたら…。

「まさか」

俺は体を起こした。ミナミは姉貴をも敵視したんだろうか。そして…。

でも、すぐに自分の考えの馬鹿馬鹿しさを認めた。もし姉貴が刺されたのなら、すぐに見つかっているはずだ。

「負けんなよな、サチ…」

姉貴の強さを信じたかった。俺もがんばらなきゃな、と頭の片隅で思いながら、意識が睡魔に吞まれていった。

心地良い声がする。彩ちゃんを想わせる優しい声音だ。

「センパイ。風邪引きますよ。ちゃんと奥に行こ？」

小さな掌が俺の肩を掴んでいた。目を開けた俺は、すでに電灯の付いている玄関で、彩ちゃんに揺り起こされていた。

「え？なんですか？」

一瞬で覚醒して起き上がる。彩ちゃんはホッとした顔をして、

「センパイの自宅に行ったら、お母さんにこっちだつて教えてもらったの。来てみてよかった」

と微笑んだ。

居間に移動して、彼女にも座を勧めると、彩ちゃんは台所に留まっ

「うっん。先に食事の支度します。キッチン借りるね、お姉さん」

と架空の住人に向かって断った。窓から外を眺めると、真っ暗になっ

「仕事帰りに寄ってくれたんだ？」

確認すると、

「はい。前川さんがフライングして退社させてくれたんです」と笑った。そっか。先輩が配慮してくれたのか。

現実との辻褄が合ってくると、彩ちゃんが食事を作ろうとしてく

れている事実が、やっと頭に入ってきた。

「あ、ご、ごめん。飯はいいんだ。家に帰って、お袋の支度もしてやらないといけないから…」

慌てて台所に行くと、彩ちゃんは包丁を離して振り向く。

「お母さんのほうは、もう用意してきました。きつとね、家族であるセンパイが行くよりも、他人のわたしが行くほうが、お母さんも気が張ると思うんです。だから、しばらく家政婦さんやってみますね」

首を傾げる様が雛鳥みたいに可愛い。俺は目のやり場に困って、視線を彷徨わせた。

「そ、そっか。助かる…。でも、彩ちゃんに甘え続けるわけにも行かないよ。今日だけにしよう」

そう提案したが、

「駄目です」

と即答で却下された。…どうしようか。抑えていたタガが外れそうなんだけど…。

炊事場に立つ彩ちゃんの背中を、俺は台所のテーブルに座って、ずっと見ていた。口は会話をしているけど、頭には何も入ってこない。入ってくるのは、視界が捉える彼女の姿だけだ。華奢な撫で肩にかかる髪が電灯に透けて柔らかく絡んでいる。固い雰囲気の仕事シャツを身につけているが、その上から着込んだ姉貴のエプロンが、妙に色っぽい。左右に動かたびに、細い足首がくるくると回った。我知らず、視線を足元から上にずらしていた俺は、自分の浅ましさに気づいて、こっそり頭を抱えた。

「そういうばさ、前に話してた神社がどうのっていう。あれって何を言おうとしたの？」

できるだけ危うい状況にならないように、俺は『カミサマ』に話題を預けた。

「ああ、あれはですね…」

彩ちゃんはちよっと考えこんで、

「水嶋センパイが神様を好きになってくれたらいいな、って思っただけです」

と、困ったような、照れたような笑いを浮かべた。

「神様かあ…」

正直、そんなものがあるなら、姉貴を返せと言いたい。

「いてくれるといいな」

曖昧に濁すと、彼女は、

「いますよ」

と断言した。ああ、そうだ。彩ちゃんは信者だったな。

飯を食って他愛のない雑談をしているうちに、リミットが来た。帰るという彩ちゃんを送ろうと玄関先に出向く。

「お袋の晩飯のこと、本当に任せてもいいの？」

気が引けたが確認すると、彩ちゃんは嬉しそうに、

「はい。センパイの役に立ちたいもの」

と答えた。頭の中が沸騰して、理性が消滅しそうになる。彩ちゃんに向かって伸びそうになった腕を、俺は、本当に必死で、抑えつけた。

「ありがとう。あ、明日は会社に顔を出すよ。そのときに、また…」

尻すばみになる声をあえて張り上げると、彩ちゃんは、

「待ってまあす」

と軽い調子で受け答えた。

駐車場で彼女を見送ってから、戻ってきた玄関で、俺はまた気力が尽きて転がった。この自制が、今日、一番に辛かった。

姉貴の失踪 3（後書き）

『姉貴の失踪』の章、最初3話で終わらせるつもりでしたが1話1話が思ったより長いため、分割させていただきます。

姉貴の失踪 4（前書き）

この章には救いようのない葛藤が出てきます。影響を受けやすい方はお気をつけ下さい。

姉貴の失踪 4

翌朝になっても姉貴は帰ってこなかった。夜中に何度か起き上がって玄関から出てみたが、しんと静まり返った寒気の中、隣家の黄色いテープだけが毒々しく目に映った。

「そつえば、インターホン鳴らねえな…」

今さら、どうでもいいことが思い出された。幽霊でも間部アリサでも、…間部ミナミだったとしても、『結果』が出た以上、もう訪問する必要はないんだろう。

姉貴の上着も財布も家の中に残されていた。どうやって、二晩も寒さと飢えを凌いだんだろう。電話の1本でいいから連絡ぐらいよこせないんだろうか…。

出社前にお袋に電話して、朝の支度ぐらい自分で何とかしろと言った。お袋は、前日より元気な声で、

「あんたの会社の人が世話していつてくれたから、こっちは大丈夫よ」

と答えた。安堵して車に乗る。

会社に着いて、先輩にまず礼を言つと、

「とりあえず本社に1人応援を頼んでおいた。お前もプライベートを優先していいぞ」

と処置してもらった。また礼を重ねる。

昼休みにカイさんの会社に電話した。携帯にかけても無視されるからだ。嫌々という態度を隠しもしない義兄に、姉貴の失踪時の話を確認すると、声を潜めてこんな説明をされた。

「一昨日は、俺、休みだったんだ。夕方5時過ぎ頃、サチが、隣の家で物が割れたような音がした、って騒ぎ出して。サチはすぐに

玄関から出て行っただけで、俺はまたかと思って放っておいた。
なかなか帰ってこないんで、おかしいと思って出て行っときには、
隣があんなふうになって、サチはいなくなってた」

「え？一度も戻ってくることなく、姉貴は消えたの？」

カイさんに聞きたかったのはそこだった。いくら否定的な夫がいる
からって、小学生の女兒を連れて、自宅にも帰らず突発的に逃走す
るなんて、普通には考えられない。

…昨日の妄想が再燃する。間部ミナミの狂気に歪んだ姿が、姉貴
に襲いかかってくる。

「そつか…。わかった。教えてくれてサンキュ」

カイさんには、当然ながら、そんな話はしなかった。儀礼的に返事
をすると、彼から意外な言葉が返ってきた。

「サチを行方不明にしちゃってごめんな」
びつくりして反射的にフオローする。

「それはカイさんのせいじゃない。いなくなったのは姉貴の責任だ」
だけど、カイさんの言いたかったのは、そういうことじゃないらし
い。小声のまま、彼は続けた。

「サチは、俺から逃げてるんだと思う」

「え？どういうこと？」

思わず声を大きくする。すると、義兄は、少し吹っ切れたような歯
切れのよい口調で告白した。

「俺、サチにはずいぶんと自分の考えを押し付けてた。…涼二くん、
君は内心では俺のことを疎ましく思ってただろう。わかってたんだ。
サチとの結婚が決まった後も、君は俺に友好的ではなかったからね。
俺、結婚してから、ずっと、君たち家族に負い目を感じてた。サ
チだけでも俺の味方につけようと必死になりすぎてたんだ。それ
がサチにとっては苦痛だったのかもしれない」

カイさんの話は、俺にとって心当たりがあるような、ないような、
という感じだったが、新しい家族として必死で馴染もうとしていた
彼をないがしろにしてしまっていたのかと認識すると、罪悪感は沸

いた。

「…そうか…。カイさんには謝らないといけないな…」

呟くと、義兄から、

「謝るなよ。本当に俺のこと鬱陶しく思ってたのか？」

と笑い声が返ってきた。

「いや、そんなことは…」

慌てて否定してから、

「…でも、姉を取られた弟の発想なんて、友好的にはならないぜ」と正直に伝えた。カイさんは、ちよつと間を置いてから、また笑った。

夕方になって、彩ちゃんにお袋のことを頼むべきか迷っていると「お姉さんのマンションに行つてあげてください。お母さんのほうは任せて」

と彼女から言い出してくれた。頭を下げると、

「あ。その後でセンパイのところに寄つていいですか？」

と聞かれた。昨夜の二の舞になりそうな気分だった俺は、

「来るなら、それなりに覚悟してきて」

と言ったが、

「何を？」

彩ちゃんには通じなかったようだ。

無用に危機感を募らせる隣家のがんじがらめのドアをやり過ごし、姉貴の部屋の玄関に腰を下ろす。帰ってきた気配はない。今晚も、またあの不安な夜を過ごすのか…。

「なあ。姉貴が何したんだよ」

誰にぶつけていいのかわからない苛立ちを、外出用の靴が並んだ狭い土間に投げつける。

「いい加減、返せよ。連れて行くなら、他にもふさわしい奴がいるだろ」

間部アリサがいなくなればよかったのに。考えちゃいけない発想が浮かぶ。なあ、ミナミ、なんで自分の母親じゃなくて姉貴を連れていくんだ？

本格的な夜になって、彩ちゃんが訪れた。

「センパイ、顔色が悪いですよ。待っててね。今、食事を作るから」昨日と同じようにエプロンを付けて台所に立つ彼女を、今度は見ないように、俺は居間に引っ込んだ。

「俺のことはいいって。本当に大丈夫だから」

本当はかなりの気だるさを感じていたが、意地で元気な声を出した。「それより、毎日、こんな遅くまで付き合わせてるほうが気がひけるよ」

と言うと、彩ちゃんは、

「責任とって、もらってください」と笑った。

足が勝手に立ち上がって、彩ちゃんのほうに向かう。

病院で、彼女は俺のことを『好き』と言ってくれた。今も思わせぶりな言葉を吐く。でも…なんていうか……、空気が軽い。本気じゃない気がしてしょうがない。

「…もらってもいいんだ？」

彩ちゃんの隣に立って、そう探ると、困ったような表情で見上げてきた。

「…冗談だよ」

やっぱりな…。落胆して、俺は居間に戻った。すぐに、彩ちゃんの包丁を捌く音が聞こえてくる。

「センパイのバカ」

少し怒っているようだった。

事件から3日が経った。まだ姉貴は帰ってこない。

今日は榮生さんから電話があった。自宅にかけたらしいが、お袋

が対応しきれなかったので、俺の携帯番号を聞き出した、とのこと。
「間部ミナミの搜索を公開に切り替えることにします」

今までは、姉貴が絡んでいる事情を鑑みて、非公開としてもらっていた。それが公にされるという意味を、俺が把握できずにいると、
「マスコミにお姉さんの名前が流れるかもしれません。ご承知ください」

と言われた。

夕方、戻った姉貴のマンションで、さっそくミナミのニュースを見た。事件当時の服装と年齢背格好は報道されていたが、アリサの傷害事件については触れていなかった。ホッとして、睡魔に身を委ねる。

インターホンが鳴った。夢の中だ。

玄関を開けると彩ちゃんが立っていた。白いシャツが返り血で真っ赤に染まっている。右手には子どもの頭部がぶら下がっていた。
ニュースで見た間部ミナミの顔だった。

「センパイ、この子が憎かったんでしょう?」

彩ちゃんは喜色満面でそれを差し出した。

叫ぼうとして。

俺は目を覚ました。

…違う。そんなことをしたいんじゃない。ミナミに対して、俺は殺意なんか持つてない…。

4日目の夕方に芳賀さんの孫娘が訪ねてきた。そういえば、あれから管理人に何も言われていない。

「その節はお世話になりました」

と礼を言つと、

「いいえ。…わたしたちはサチさんの味方よ」

と強調された。昼のゴシップ系ニュースで、姉貴は誘拐犯と同義に

報道されていた。

1週間が過ぎても姉貴の行方は知れなかった。月が変わって寒さが厳しくなった。

3週間が過ぎた頃、お袋が言った。

「幸子はもう駄目かもね…」

俺は怒鳴りつけた。

「何にもしてやってないくせに、そういうことだけ言っなよっ!」
お袋は泣きながら言った。

「きつとお父さんのバチが当たったのよ」

親父の罪を姉貴がかぶらなきゃならない道理はないだろう。腹を立てて自宅から去ろうとすると、お袋はボソリと呟く。

「あんたはいいわね。何も知らないんだから」

「…知らないって、何を…」

以前、姉貴にも同じ事を言われた気がする。『リョウちゃんはよく知らないから肩が持てるのよ』。

ある程度、泣いて、落ち着いたお袋が話し出した。飲酒運転で事故を起こして3人も人間を殺した親父。俺は、親父もその事故で死んだと聞かされてきた。けれど。

「お父さんは軽症だったの。病院に運ばれて診察を受けた後に、わたしと幸子が面会したんだけど、わたしたちは…」

お父さんを、責めて責めて死ねと詰った、とお袋は零した。

「お父さん、その病室のドアノブにベルトを巻いてね」

看護師が気づいたときには、すでに絶命していたらしい。

「わたしと幸子がお父さんを殺したようなものだった。幸子はすぐに平気になったけど、わたしは、ずっと、忘れられなかった。だから、お父さん、薄情な幸子にバツを与えたんだと思う」

俺は黙ってお袋から離れた。口を開くと、同じ呪詛をお袋に浴びせてしまいそうだったから。お前なんか死ね、と。

1ヶ月が過ぎた。仕事には出ていたが、自分が何をやっているのかわからなくなっていた。

先輩が言った。

「顔色が最悪だ。もう帰れ」

「…すいません」

詫びて鞆を抱えると、背中に、先輩の呟きが突き刺さった。

「彩っぴ…今日、見合いなんだ」

俺は、欠勤している彩ちゃんの机を見て、それから頭を下げて退社した。今日が、この事務所の見納めのような気がした。

姉貴の失踪 4（後書き）

『姉貴の失踪』の章は終わりです。次は結末に入ります。

異界との接触 1（前書き）

小刻みに行きます。

異界との接触 1

ゴトン、という音がして目が覚めた。何かが落ちたのかと思ったら、床に転がっていたのは俺自身だった。たしか、居間の簡易座卓にもたれかかって寝ていたはずだ。

ビール、何本飲んだっけ…？プライベートな空間で酒を飲むのは初めてだった。アル中の親父の癖を嫌って、自宅にはその類いが置かない。

姉貴が帰ってくるまでに空き缶を片付けないと大目玉を食いそうだ。そんなことを思ってから、

「馬鹿馬鹿しい」

と口に出した。姉貴が帰ってこないから、やりきれなくて、こんなことをしてるんじゃないか。

天井の照明が眩しくて、手をかざした。指の輪郭から溢れた光が、妙に躍動感を伴って見える。…だいぶ酔ってるな、俺。彩ちゃんが光の中から手を差し出しているように錯覚してる…。

見合いはうまく行ったんだろうか…。相手の男が、長身のシルエツトとなつて頭に浮かんだ。

俺よりもランクの高い『好き』が、彼女の意識に芽生えている気がして、悔しさに歯噛みした。

猛烈に眠かった。通常の睡眠欲以上のだるさが襲ってくる。酒のせい…だけ、だろうか。なんだか、正常な空間の向こうから誰かに引っ張られてるみたいだ…。

正気を放棄してしまいたい欲に駆られる。

「まだ駄目だ…っ…」

俺はあえて大声を出し、強引に起き上がった。まだ『あっち側』には行けない。俺がいなくなったら、やっと繋いでいるお袋と姉貴の

関係が崩壊する。

トイレに行つて、胃の中の物を全部吐いた。胃液の苦い味が口に広がったところで、やっと、はつきり目が覚める。

気分を変えるためにシャワーを浴びて、風呂から出ると、また強い欲求が駆け上がってきた。冷蔵庫を覗くと、6巻パックで買った缶ビールが、あと2巻を残すだけになっている。

「ずいぶん飲んだんだな…」

俺はそれらを持って行つて、流しに捨てた。目に付くと、また口に入れそうだ。

居間の絨毯に転がつて、天井を見る。室内でもすでに寒い季節に入っていた。眠気覚ましにはちょうどいい。

「姉貴が帰つてこなかったら、これも解約か」

現実的な発想が、抵抗なく口を突いた。

「カイさん、再婚するのかな。すぐにでもしそうだな、あの人」

苦笑して、天井から目を背け、横を向く。感情が湧いてこない。カイさんや姉貴やお袋の存在が、紙みたいに薄く感じた。諦めかけてるんだな、俺も…。

「涼二！」

突然、耳元でそう叫ばれた気がして、俺は跳ね起きた。

「……………」

誰もいるわけではない。ベランダに続く窓のカーテンを開けて、眼下の駐車場を見回したが、聞き間違えるような騒ぎも起きていなかった。

もう一度、部屋の中まで戻つて座り込む。…姉貴の声…ではなかった気がする。が…。

ぞくつと寒気が背中を駆けた。虫の知らせ…という現象が、思考を占拠する。

小さな痛みを感じて見ると、掌に血が滲んでいた。知らずに拳を握りしめていたせいで、爪が皮膚を抉ったらしい。

最悪の想像に耐え切れずに、俺は栄生さんの連絡先にダイヤルした。すぐに本人が出た。

「あの…姉貴の行方なんですが…」

しどろもどろで尋ねると、栄生さんは同情的な声で、

「手がかりがなくて…」

と言葉を濁した。

「たぶん…もう死んでます」

なぜ、こんなことを言ったのか、自分でもわからなかった。栄生さんは驚いた様子で、

「水嶋さんだけには、そういうことを言っただけでほしくないんです」と諫めてきた。

電話を切り、立ち上がって天井を見上げた。照明が眩しくて、闇を溜める隅に目を転じる。一瞬、姉貴の顔を見た気がした。土気色に強張り、白く変色した唇を固く結んでいた。

俺は、思わず、手近にあったビールの空き缶を投げつけた。高い金属音を響かせて、ひしゃげた缶が転げ落ちる。

「うるさい！」

壁の向こうからヒステリックな女の声が聞こえた。いけね、騒音…と慌てて壁に駆け寄ってから。

…再度、ゾツとした。壁の向こうは間部アリサの家だ。無人のはずだ。

声はまだ続いていた。どうやら俺に対して言ったのではなく、家内でやりとりをしているらしい。

「なんでいつもいつもいつも！言われなきゃできないのよ、あんたはっ！！」

若い女の声がヒステリックに叫ぶと、子どもの泣き声が重なる。

「ごめんなさい、お母さん。ごめんなさい」

「謝るなっ！謝るぐらいなら出て行って！あんたなんかうちには要らないんだから！」

子どもの声が号泣に変わる。

…何だ、これは。なぜ虐待が再現されているんだ…。

「あんたがいるおかげで、あたしがどれだけ不幸だと思ってんの？！あんた、人を不幸にして楽しいの？！なんで生まれてきたのよっ！！」

鈍い殴打の音が聞こえた。子どもの声が小さく、くぐもった。厚い布越しのような悲鳴が上がる。

俺はまたカーテンを開けて、今度は窓も開け放した。ベランダ越しのほうが、よりはつきりと状況がわかると思ったからだ。

けれど、その途端、音は止んだ。壁越しにも静寂しか伝わってこなくなった。

玄関を出て、隣家を確認する。キープアウトのテープは剥がされている。ためらった末、インターホンを押してみた。もしかしたら、アリサが帰っているのかもしれない。

でも出てくる気配はなく、外から窺える限り、室内は無灯だった。

自室に戻り、呆然と壁を見つめた。夢だったのかと思ったが、小さくついた新しい傷は、俺が投げた缶のせいだ。

そのとき、床が傾いた気がした。横揺れの地震に見舞われているような不安定な感覚が、足元を迫り^せ上がる。思わず壁に手を着くと、冷たい平らな壁紙ではなく、ささくれた細い固形物に当たった。驚いて、つい力を入れると、それは掌の中で簡単に砕けた。白い、脆い質感の棒。骨だ…。

背後に強い風が吹いた。冷や汗が吹き出る。振り返ることができ

なかった。漂ってくる身を冷やすような臭いには覚えがあった。親父の死臭…。

…そうだ。思い出した。

首にくつきりと残った痣を不思議がって、当時、小学生だった俺は、姉貴にこう言っただ。

「お父さん、首吊ったみたい」

姉貴は泣きながら、

「うん。お姉ちゃんが絞め殺したの」

…姉貴にしてみれば、そんな気持ちだったんだろう。

異界との接触 2

どれぐらいの時間が過ぎたのか…。気がつくと、すべての怪現象が収まっていた。ゆっくりと振り返った俺は、足から力が抜けるのを自覚しながら、へたり込んだ。

室内に異変はない。電灯が、若干、光を薄くした気がしたけれど、恐怖を誘うほどの暗さは感じなかった。

手を、見た。砕いた骨の感触が、またありありと残ってる。ただ、痕跡はない…。

幻覚？ いや…。こんなに鮮明な白昼夢を見るほど、俺は参ってはいないはず…。

「…屍ヶ台、か」

強い風に晒された屍の束を想像した。この土地に住んだ野盗たち、それに、芳賀さんの先祖たちに、殺されて、食べられた彼らは、成仏することができたんだろうか。人間の恨みは、たかだか150年ぐらいで風化されるものなんだろうか。

いや…。と考え直してみる。食われたのが俺だったら、この世にそんなに執着はしない。貧しい時代だったんだ。誰かの犠牲は仕方のないことだったんだ。

「…姉貴が『犠牲』になるのは…嫌だな…」

現実と史実の境目があやふやになってきた。床の絨毯に目を落とすと、乾いた台地の光景が広がった。

行商の薬売りを案内する村人が、戸板の上のミイラを指差す。

「女のは珍しいでしょう。腹ん中も全部残ってますよ」

長い髪を残したままのそれは、口を大きく開けて、生きて帰りたいか、つた未練を全身で表していた

「胎児はないのかね？」

薬売りが尋ねると、村人は首を振った。

「もう生んじまった後です。子どもの方は、ほら、隣に」

体が震えだした。耳を塞ぎたい。なのに指が痺れて、うまく動かなかった。呼吸が氣道の入り口でUターンして、酸欠を起こす。

姉貴は妊娠していたんだろうか。それで、他人である間部ミナミに対して、あんなに親身だったんだろうか。

失くしたものの大きさに愕然とした。親父が減り、お袋が半病人になった後の、やっと祝福できる家族の存在が、誰かの胃袋に収まっているなんて…。

「…俺が代わる、代わるからっ…。だから姉貴を返してくれよ…っ…」

会話する2人に何度も訴えた。が、反応は、ない。

…夢か…。起きているつもりだったが、目を開いた自分を自覚して、眠っていたことを認識した。

どこまでが現実だったんだろう。壁を見上げると、傷を確認することができる。

やっぱり、夢だけじゃないんだ。いや、むしろ、現実に耐え切れずに意識を落とした、というほうがしっくり来た。この部屋は繋がってる。過去の屍ケ台の次元と。

「…んなこと…」

あるわけないと、言えなかった。もしかしたら、姉貴は『あつち』にいるのかもしれないんだから。

未だに震える足を叱りつけ、立ち上がって台所に向かった。コップの水を一息で飲んで、なんとか落ち着く。

「冷静になろう」

自分に対して説得する。

「冷静になって、固定観念じゃなく、可能性だけ考えるんだ」

言い聞かせる。

屍ヶ台はこの場所にあった。それは事実だ。死者を粗雑に扱ったこの土地が、現代、何の制裁も受けずにいるとは…考えてみれば都合のいい話だ。以前から、何らかの『こういう現象』があったのかもしれない。

問題は、なぜ姉貴の家に、突然、兆候が現れたかってことだ。もともと幽霊の出る部屋に住んでしまった、というならわかる。でも、姉貴が引越したのは4月だ。すでに半年以上経っている。

そうなると、きっかけは、やはり、間部母娘に関わったことしか思えない。ミナミはアリサから『お前なんか要らない』と言われていた。母親しか慕うものがない女兒には辛い言葉だろう。その強い負の感情が、正常な世界を飲み込もうとする屍の台地とリンクしたとしたら…。

「姉貴についてきてほしかったのかな…」

ミナミの心情を思うと、その結論が出た。怒鳴り散らす母親を巻き込むことをしなかったミナミは、その代わりに、自分に心を砕く姉貴を連れていったのかもしれない。

上着を引っ掛けた。どうすればいいのかわからない。ただ、部屋に籠っていても解決はしないと思う。

勢いで外に出ようと玄関に向かったとき。

インターホンが鳴った。

異界との接触 3

ぎくつとして足が止まった。

何時だ？まだ『正常な』訪問者があるような時間なんだろうか。
動けずにいると、ドアの向こうから、聞き覚えのある声で呼ばれた。

「センパイ…起きてますか…？」

…彩ちゃん…。

慌ててドアに駆け寄った。ノブを回す手が痺れているのがもどかしい。体を押し付けるようにして扉を開き、

「なんだよ、今日は…」

見合いじゃなかったのか、と続けようとして、再度、俺は固まった。
彩ちゃんの上半身が真っ赤に染まっている。数週間前に見た、ミナミの生首を下げた姿が重なった。

「どうかしたんですか…？」

不安そうな彼女の顔に、はっとして正気づく。赤かったのは、真紅のタートルセーターを着ているせいだ。

「別にどうもしない。あ…その…。何か用？」

慌てて取り繕うと、彩ちゃんは、珍しく、笑顔を見せずに沈んだ表情で、

「センパイに会いたくて…。聞いてほしいことがあるんです」と俯いた。

居間に通すと、彩ちゃんは、まず座卓上のビール缶を見咎めた。

「センパイ、お酒飲んだの？」

「もう醒めてるよ」

素面で話を聞く環境ができていることを伝える。

ちよつとためらった後、彼女は座卓を挟んだ俺の対面に着座した。

「あのねセンパイ、…わたし、今日…」

言い渋る彩ちゃんに、

「聞いたよ。見合いだったんだろ？」

努めて平静な口調で補足した。彼女に言わせるのは、なんとなく酷な気がした。

彩ちゃんの大きな目が、さらに大きくなる。

「知ってても電話もくれなかったんだ…」

「……………」

予想外の返事だった。まさか俺のほうが責められるとは思わなかった。

「だ、だって…何を言えっていうんだよ？見合いがなれば、とでも言っただろう？」

うるたえて言い訳すると、彩ちゃんは、座卓に肘をついて、組んだ細い指先を唇に当てたまま、呟いた。

「したくてしたわけじゃないもん。ずっと、センパイが迎えに来てくれないかなって…待ってたのに」

脳への血流が堰き止められた気がした。耳障りな破壊音が頭の中に響いてる。

彩ちゃんの言葉は、喜ぶべきものの、はず…。なのに、俺に湧き上がっていたのは、不快感と怒りだった。こっちは、深刻な逆境の中、必死に自分を保っている。彩ちゃんの気持ちにまで手を回せというのは、あんまりにもわがままじゃないか。

いや、違う。そういう意味じゃない。考え直した。

姉貴のことに集中しようと、他を切り捨ててきたこの1ヶ月の間に、俺の中には強固な殻ができあがっていた。カイさんやお袋に乱されたぐらいじゃビクともしないぐらいに。でも、彩ちゃんに関しては、まったく油断した状態で…。

散々に疲れきった自分の内側に入り込まれているようで、動揺を隠せない。

「見合いが嫌なら、自分でそう言えばよかっただろ」

刺々しい気分で彩ちゃんに当たった。心の中では『ごめん』を繰り返すけど、それを言葉にすることができない。

「そ…うん…」

彼女は俯いたまま口ごもる。

それから、小さく頭を振って、無理矢理な笑顔を返した。

「そう言われると思ったんですけど」

その瞬間、ガードが解けた。彩ちゃんの二の腕を掴み、自分のほうに引き寄せる。小さな骨格が俺の胸の中に収まった。仕事上で一人の人間として見ていた彼女はそれなりに大きな存在だったが、こうして抱きしめると、怖いぐらい頼りない。

最初は強張っていた彩ちゃんの体から、少しずつ力が抜けていくのを感じた。胸に当たる彼女の吐息が熱くなっていく。抱きしめたまま、髪の中に顔を埋め、目を閉じた。柔らかい猫っ毛が気持ちいい。

彩ちゃんの指が、そっと、俺の背中に回ってきたのがわかった。

…いま、どんな表情をしているんだろう…。

好奇心が働いて、俺はゆっくりと目を開いた。ピンク色の頬に浮かべた照れ笑いを想像しながら。

けれど。

そこに予想した光景はなかった。

真っ暗だ。下も上もない。自分の姿さえ見えない。

床の下から風が吹き上げた。氷を撫でてきたように冷たい。それが天井に向かって抜けていく。振り仰いでも、物質はなく、虚しい闇ばかりが広がっている。

屍ヶ台とも違う。寂寥感の漂う渴いた台地なら、まだ視界は利いた。今は、まったくの無。視神経が脳へのアクセスを止めてしまっ

たような、強制的な暗闇だった。

引きずり込まれる恐怖に、俺はもう1度きつく目を閉じた。幻覚だ。すぐに元に戻るはずだ。

「センパイ…痛い…」

彩ちゃんの声がすぐ傍で聞こえた。腕の中には、彼女の感触がちゃんと在る。

「あ、ああ…」

知らずに、かなりの力で絞めつけていたらしい。解放しようとしたが…。

その弾みに彩ちゃんがいなくなってしまいそうな気がして、できなかった。

「痛いです、センパイ…」

彼女の体に過剰な力が入ってきた。逃げ出そうとするのを、俺はさらに抑え込む。

「離れるなよ。探せなくなる」

「だって…」

苦しそうに喘ぎながら、彩ちゃんは俺の体を押し返してきた。

「痛い。もう放して」

渾身の抵抗で離れようとする彼女の苦痛を慮おもんばって、つい腕を緩めた。隙について彩ちゃんが逃げ出す。

とたん、何も無い空間に取り残された。

反射的に手を伸ばすと、細い体温に触れた。そのまま掴む。手首のようだ。

「きゃあ！」

本気で怯えた悲鳴が上がった。多少、ショックを受けながらも、俺は、再度、彩ちゃんの体を引き寄せた。腰に手を回すと、彼女はバタバタと暴れた。

「やだっ。嫌ですってばっ。どうしたの、センパイ?!」

そう叫ぶ彩ちゃんには、この異空間が見えていないのだろうか。

「暴れるなって！治まったらちゃんと放してやるからっ！」

俺も怒鳴り返した。ビクツとした彼女から、やがて泣き声が漏れた。

長い。一向に闇が晴れない。

「センパイ…あの…苦しいんですけど…」

彩ちゃんの息が上がってきた。

「もう少し力を抜こうか？」

自分ではそんなに強く締めているつもりはない。見えないから加減が難しい。

「はい…お願いします。…逃げたりしないから…」

呟くように答えると、彩ちゃんはぐったりともたれかかった。

「ごめん…」

片腕だけ彼女の腰から離し、髪を撫でた。身動ぎした彩ちゃんは、自分から俺にしがみついた。

しばらく、どちらからも声はかけなかった。俺は失くした視覚を取り戻そうと必死だった。本当にどうしちまったんだ。なぜ、こんなに時間がかかるんだ？

絶望的な気分を押し留めて耐えていると、彩ちゃんが不安そうに囁いた。

「…センパイ。センパイの中で…何が起こってるんですか…？」

「?!」

初めてその可能性に行き当たって、俺は恐怖に言葉を失った。

ここは俺の内部なのか？いつまでも正常な世界に戻れないのは、俺が完全に狂ったからなのか？

崩壊した自覚はなかった。…でも、妙な開放感があった。

よく我慢したと思う。姉貴がいなくなってから。

…いや、本当はもっと前だ…。家族の中で頼る対象がいなくなっ
てから、常に重圧と戦ってきた。10歳に満たないようなガキが、

家族の長として振る舞ってきたんだ。精神に祟るのも無理はない。

やりたいことは…いくつもあったよ。正常なお袋の元で、親父に対する野次のない学校生活を送りたかった。痛々しいほどの自己犠牲をする姉貴の、のびのびと生きる姿も見てみたかった。どうして俺がこんな家族の一員になったのかって、大声で叫んでやりたかった。

彩ちゃんの指が俺の頬を伝うのを感じた。…その軌道に水滴が広がっているのも、自覚した。

「センパイが泣いてるとこ、初めて見た」
優しい声で指摘された。

「そんなに我慢してたんですね。可哀想に」
そう言つて、頭を撫でてくれた。

返事ができなかつた。嗚咽を殺すのに手一杯だった。

彩ちゃんは、俺の手を握りながら、ずっと話しかけてくれた。

「まだ見えないんですか？」

彩ちゃんの掌が、金色の軌跡を描いて、目の前を揺れる。

「うん。あー…その手の動きは見える」

俺は、距離を図りながら、彼女の手を掴んだ。

「救急車を呼んだほうがいいのかなあ…」

逡巡する彼女に、

「いけね。保険証取りに自宅に戻らないと」

軽口を返す。彩ちゃんからも安堵の笑いが漏れた。

「センパイはすごいね」

そんなことを言われた。

「え？何が？」

醜態を見せたばかりなのに、評価をされる理由がわからない。

「だって、我慢強いもん」

なるほど。悪い意味で言い得てる。

「うん、まあ。確かに、いろんなことを我慢してたな」

冗談で『彩ちゃんに対しても』と続けようとしたが、先を越された。
「しなくていい我慢もしちゃうし」

「……………」

彩ちゃんの頭が腕に当たったのを感じた。

「…ねえ、センパイ。わたしがセンパイを好きなこと…知ってました？」

試すように問いかける彼女に、

「本気にはしてなかったけど」

俺は正直に答えた。

「あ、ひどい」

膨れた頬を連想させる声がする。

「そんなに自分に都合のいいことはないと思ってたからさ」
言い訳すると、

「それってどういう意味ですか？センパイがわたしのことをどう思っているか、2文字で答えてください」

とやり返された。…2文字って…。答え、決まってるじゃないか。それ。

「うん、まあ…」

でも、その短い言葉が、なかなか言えなかった。

「っていうか、なんで文字数限定なんだ？他の答えかもしれないじゃないか」

ちよつと捻くれてもみる。

「それ以外の返事を聞きたくないから」

彩ちゃんの声は真剣だった。

手探りで肩を抱き、指先で彩ちゃんの顔をなぞった。柔らかな唇を探り当てる。

「今日は来てくれてありがとう…」

フエイントをかますと、

「ずる…」

と非難が返ってくる。最後まで言わずに唇を塞いだ。

目を閉じて、役に立たない視界を自ら遠ざけた。でも、頭の中には幸せそうな表情をした彩ちゃんがかはつきりと浮かんだ。

異界との接触 4

「センパイ、こっち」

先を行く彩ちゃんの輪郭が、光の粒子みたいに揺れていた。

「もうすぐ玄関ですから。足元、気をつけて」

先導してくれる彼女に礼を言って、記憶の中にある敷居を跨ぐ。

結局、彩ちゃんの車で病院に連れていってもらったことになった。

俺としては、そんなことより彼女を一晚独占したかったが、

「わたしの顔、早く見たくないですか？」

と説得されて、仕方なく腰を上げた。

はつきりとした背景は、依然、掴めないものの、朧な雰囲気はイメージできる。たぶん今の俺は、目が見えないんじゃないかと、目に見えているものが認識できないだけだと思う。

彩ちゃんの輪郭が沈み込んだ。コンクリートの土間で靴を揃える音がする。

「靴、履けますか？履かせたほうがいい？」

俺の右腕を取って誘う彼女に、

「大丈夫だよ」

と笑ってから、そういえば、いつもこの言葉で感情を押し込めてきたな、と思い返した。

「…やっぱりよくわからないや。誘導してくれる？」

頼むと、彼女の手が俺の左手に触れた。

「あと1歩前へ出て…」

慎重に引つ張る心遣いが嬉しくて、つい。

彼女を引き戻して、抱きしめた。

「…外に出て、今のいい気分を壊したくない」

そう甘えると、彩ちゃんはずっとしたまま、恐らく、俺を見上げていた。それから、伸び上がって、軽く唇に触れてきた。

「…だめです。もう…センパイは…」

叱っている口調の中に、笑い声が混じってる。

「だって、ずっと好きだったからさ」

まったく抵抗なく、そう言えた。

彩ちゃんの腕が首に巻きつく。今度は俺からキスをした。瞼の裏に穏やかな白光が広がる。

風が強くなってきた。玄関の鉄扉に空気の塊がぶつかって、どんと音を立て始める。

誰かが乱暴にノックをしているような響きだ…、と思った。

「…今、何時…？」

危機感を抱いて、彩ちゃんに尋ねると、

「えっと…2時」

身を離しつつ、そう答える。

「そっか…」

偶然？時刻も一致してる…。

彩ちゃんを部屋の中に押し返し、靴を履いた。ドアノブを握って聞き耳を立てるが、異音は聞こえない。

「…どうしたの？センパイ、怖い顔…」

不安そうな声が背中につきつく。

「別にどうもし…」

ない、と安心させようとしたが、これがいけないんだな、と反省して、前言を翻した。

「ごめん。説明をすつ飛ばすのは悪い癖だな。インターホンの件、話しただろ？あれ、今と同じような状況なんだ」

できるだけ恐怖感を抱かせないようなイントネーションを心がけたが、それでも彩ちゃんの緊張が伝わる。

ゆっくりとドアを開く。狭い隙間から激しい冷気が流れ込んできて、甲高い音を立てた。

コンクリートの共用廊下には誰もいなかった。常夜灯は相変わら

ず切れたままだ。それでも完全な闇というわけではなかった。正面の塀の向こうに、花の終わりがけたススキの群生がなびいているのが見える。

ほっとして、まだ室内にいる彩ちゃんのほうを振り向きかけた。

「何もいない。大丈夫だよ。病院に行こ…」

……。

……。

…視力が戻ってる…。

改めて完全な外に身を置いて、もう1度、周囲の景色を見回した。羽虫の死骸のこびりつく機能を停止した電灯。剥き出しのモルタルで白く浮き上がった廊下。背の高い塀の向こうに迫る荒涼とした枯れ野原の原風景。

大丈夫。おかしなところはない。たまたま回復しただけだ。外気が刺激を与えたのかもしれない。

「治ったよ、彩ちゃん」

あえて嬉々として言ってみた。そうだ。喜ぶべきことだ。重苦しい気分に見舞われることはない。

「え？ほんと？」

彩ちゃんの声も弾んでいた。外に飛び出して、笑顔を見せてくれるはずだった。

正常に戻った俺の世界の中で、今度は彼女が見えなくなっていた。黒い雑な粒子の塊が寄り添うのを、俺は、ぼんやりと、彩ちゃんだと認識していた。

「センパイ…」

彩ちゃんの声が泣きそうに震えた。粒子の一部が俺のほうに伸びて、体に触れた途端に霧散する。

「消えちゃだめ…っ」

今度は『全身』が俺を突き抜けていった。

「彩ちゃ…！」

彼女が砕けたのかと思って、俺も思わず声を上げた。散らばった破片が背後でゆらゆらと再生する。

わずかの時間を置いて、粒子が床に拡散した。嗚咽が聞こえる。泣き崩れる彩ちゃんの姿が容易に想像できた。

なんとなく塀の向こうに目をやると、かさついた手を空に掲げたたくさんの亡骸が、無造作に転がっているのが見えた。3階から見下ろしているはずなのに、その異界がすぐそばに感じる。

『姉貴の部屋がスキの原っぱの真ん中にワープしたとも思ったんですか？』。以前、先輩に言った自分の言葉を思い出す。

そうか…。

溜息が出た。あの底のない暗闇は、この前兆だったんだな…。

姉貴と間部ミナミは、この塀の外にいるんだろう、と自然に理解した。屍ケ台の『住人』に引っ張られたんだ。

そして俺も…。『姉貴と代わる』と宣言したことを、今さら思い出す。

彩ちゃんの傍らに座って、触ることもできなくなった存在を、少しの間だけ悲しんだ。

それから、声だけでも奪わないでくれたことを、『神様』に感謝した。

「見合いの相手、いい奴だった？」

聞くと、彩ちゃんは顔を上げたようだった。

「俺の時みたいに、ちゃんと大事にしてもらっただぞ」

言い含めて、立ち上がる。

塀の上に体を持ち上げ、対面の大地を見下ろした。固い岩盤は広大で、一目では見渡せない。

「でも、こん中にいるんだよなあ、きつと
もう、探すしかないだろう。」

深呼吸をして。

俺は屍の大地に飛び降りた。

着地の感触はなかったが、気づくと大地の上に立っていた。

意外なことに、そこは夜じゃなかった。薄曇の空に、控えめな太陽が昇っている。ただ、静かだった。荒れた風音は連続していたけど、それも、生命の存在を掻き消すという意味では、静謐そのものに感じられた。

少しためらってから後ろを振り向く。もしかしたら、まだそこには俺のいた世界が残っていて、もしかしたら、彩ちゃんの顔を見られるかもしれない、なんて思ったから。けれど、背後はただの闇だった。こっちに呼ばれた俺が、あちらの正常な世界の彩ちゃんを『黒い粒子』としか認められなかったように、その闇も湿った質量を伴ってゆっくりと動いていた。

後悔は、してる。

「当たり前だ」

大きな声で断言してみた。ちょっと吹っ切れたような気がする。大きく伸びをすると、それでもやる気は出てきた。

「お袋、姉貴も俺もいなくなったら泣くかなあ」

口にはしたが、実はあんまり気にしてもいない。お袋は長い時間をかけずに俺たちのことは忘れるだろう。自分のことで手一杯な人だ。「なんか身軽になった気がする」

こんな形で人生を放棄したくはなかったが、それでも、辛い気持ちばかりじゃない。

歩き出そうと正面を向くと、厄介なことに気づいた。明るいのに見通しが悪い。空気の密度が違うのか、まっすぐの視界が蜃気楼のように歪んでいた。風景とは思えない人工的な色が散在しているから、何か……まあ、あんまり歓迎しないものだろうけど、それが在るのは認識できる。

姉貴は…どんな姿になっているんだろう…。現実の時間から換算すれば1ヶ月。とても原型を保つてとは思えない。

とりあえず人工物に向かってみたが、これが意外に難しい。近づけば近づくほど視野が歪む。曲面の鏡の中を歩いているような感じだ。右方向にあると思ったそれが、突然、すぐ左手に現れる。

…そのおかげで、2度ほど悲鳴を上げる羽目になった。ミイラの乗った戸板に接触して、1回は一緒にひっくり返った。

今も、肌の色の残った物体に近づいてる。1体1体、姉貴でないことを確かめていかなければならない。視界の右側に展開するその屍にゆっくりと近づき、前例と同じ要領で反対側を見る。…が、ない。

「あれ？」

慌てて他所を見ると、すぐ至近距離で………、…簡易櫓やぐらに吊るされた、内蔵剥き出しの遺体に出食わした。

我慢できずに、その場で嘔吐した。身がついてるのは勘弁してくれ…。

それでも顔を上げる。長い舌を垂らした断末魔の顔を確認して、男であることに安堵した。

血に酔うつていうのを聞いたことがあるが、死体にも酔うみたいだ。だんだん正常な考えができなくなってきた。

屍ヶ台の惨状を実際に見てみると、芳賀の爺さんが、いかに美談に仕立てていたかがわかる。ここにあるのはミイラばかりじゃなかった。明らかに、この場で屠殺した様子の数体も目にした。

旅人を襲う野盗だという話も怪しい。江戸期当時の旅は健脚と潤沢な資金が必要だったと習った。それなのに、この場所には子どものミイラも数多く残されている。思わず目を背けた1体は、傍らの母親にすがりついた左手を切り取られていた。姉貴とミナミじゃないことは確認済みだ。

寒村の生活を守るために、やむなく取った死体売りの商い。それが、いつの間にか殺戮を目的にしたものにすり替えられていったんだろつか…。

「はあ…」

涙が出そうになって座り込んだ。ずいぶん涙腺が緩んだんだな、俺…まあ、悪いことじゃない。

「彩ちゃんに会いたい。お袋やカイさんには会いたくない。あ。先輩には挨拶ぐらいしておきたかったな」

わざと子どもみたいな口調でわがままを口にした。大人として、理性的な行動を取る余裕がなくなってる。

彩ちゃんの最後の姿が脳裏に浮かんた。あんなに可愛かった娘が、ただの霧になっちゃったのがもったいない。

…どんな顔で泣いてたんだろ。キスした時の顔も、そういえば見ていない。…あの世に写メとか…送れるわけないか。自分の考えに笑った。

寝転がって横を向いた。頭を抱えて丸くなる。耳を塞いだ。これ以上思考が進まないように。

帰りたいとは思わないように。

うつうつとしていた。目が覚めてからも、鈍った頭を醒ます気力が湧かない。

手足が重い。起き上がりたくない。姉貴には会いたいけど、もう死体は見たくない。

もう一度、目を閉じた。こんなところまで来ておいて諦めるのも馬鹿らしいけど、やる気が萎えた。

「もうどうでもいいや」

そう言ってしまうば、自分の中に燦る姉貴への未練が消えるかと思っただ。

「…んなわけ…なかった」

でも、うまくは行かなかった。柿の木の枝が折れて落ちた姉貴の、激痛に耐えて『平気平気』と笑った顔を思い出したから。

「おい」

溶けそうにだるい体を引きずって歩き回る。返事なんかあるわけない。わかってる。だけど、人間の声を耳に入れておかないと、意識が霧散しそうだった。

「サチー！迎えに来たぞー」

と怒鳴っておいてから、

「なんかこれって、あいつの高校の時みたいだな」

と自分でツツコミを入れる。サチの通学路に動物の死骸が置かれる悪戯が連続したことがあって、警戒したお袋から、下校時に迎えに行くように言われたんだ。

あのお袋は、サチの母親としての役目をちゃんと果たしていた。考えてみれば、今回のきっかけになったインターホンの事件のことだって、お袋の勧めで姉貴のマンションに行ったんだよな。

家族を大事にすることだけにエネルギーを費やしてきた中学時代の俺と、自分のために生きてみたいと願う現在の俺が、頭の中で、お互いを打ち消し合った。

「もつと気楽に行きたいんだよ」

とドライに構える俺に、俺が、

「お前って、でも実は、姉貴もお袋も大好きなんだろう？」

と反論する。

「リョウちゃん、そこ、あたしの席」

俺が親父の膝に入ると、すぐに飛んできて横入りしていたサチは、あの頃、親父が大好きだった。

「飲み過ぎはよくないけど、お父さんのお酒は明るいからいわね」

さり気なく酒の入ったグラスを片付けながら、お袋は親父に笑いかけた。

「涼二、お父さんは、あんまり強い人間じゃない。嫌なことがあると、すぐにお酒を飲んで忘れなくなるんだ。お前は俺のようになっちゃんいかんぞ」

と言う親父に、

「でも、オレ、お父さんみたいになりたい」

幼児の俺はそう返した。弱い人間性に溺れながらも、必死でそれを跳ね返して、俺たちを愛し続けてくれた親父の気持ちを、あの頃は理解していたんだと思う。

回想しながら歩いていたら、いつの間にか周囲の景色が変わっていた。行く手に盛り上がった小山が見える。斜面に張りついた剥き出しの岩が、今にも崩れそうだった。実際、崩落の跡らしい大きな横穴も開いている。

その麓に。

「…1体発見」

げんなりしながら、俺は、傾斜にもたれかかって座り込む遺体に目を向けた。嫌悪感が募る前に、足早に近づく。さつさと確認だけして、さつさと去ろう。

遺体の前に屈み込んで、土気色に変わった顔にかかる前髪を、そつとよけた。

ミイラじゃない。生前と同じぐらい、綺麗なままの姿を保っていた。

腕に固く女兒を抱きしめているのが、本当に姉貴らしかった。

泣くことを思い出させてくれた彩ちゃんには、感謝しても、足りない。号泣して、疲れ果てなければ、俺は立ち直れなかっただろう。

姉貴とミナミの体を横たえて、楽な姿勢にさせると、ほっと溜息が漏れた。見つかってよかった…。

強風が吹くたびにパラパラと破片をこぼす危険な岩盤の下に、あえて腰を下ろした。次に、彼女たちをあの世まで送ってやらなきゃならない。

その瞬間が来るまでの間、姉貴にいろんな話をした。

「カイさんが、姉貴を行方不明にしてごめん、って謝ってきたよ。

あの人、気は弱そうだけど、姉貴に対してそれなりに責任感を持っていたんだな」

「お袋薄情なんだぜ。お前のこと、もう駄目かも、なんて言ってさ。あれ、親失格だよな」

「親父の自殺のこと、聞いた。…ん、でも、責めたかった気持ちはわかるよ。再三、飲酒運転だけは駄目だって、姉貴もお袋も言ってたもんな。あれは姉貴が殺したんじゃないよ。もう気にするな」

風のせいですぐに乱れる髪の毛を梳き分けてやると、心なしか、姉貴の顔が嬉しそうに綻びた気がした。

ここで死んだら天国に行けるのかな、なんて思って、空を見上げた。歪んだ大気の間こう側に、晩秋のような寂しい光を放つ太陽が見える。

「親父…ちゃんと迎えに来るかな…」

それぐらい、してほしい。俺も姉貴も、親父のことは大好きだったんだから。

「飲み過ぎで遅刻とか、するなよな」

寝起きの悪かった姿を思い出して、苦笑する。

風に押されて転がってきた小石が指先に触れた、そんな感触だった。

目を転じると、姉貴の手が、ゆっくりと、俺の手に寄り添ってきたのが見えた。

親父の葬式が終わってから、お袋が泣きながら言った一言を、今、思い出した。

「お父さんが最後に残したメモにね、『お前たちは当分こっちに来ちゃいかなぞ』って書いてあったの。3人で、ちゃんと人生がんばろうね」

姉貴の手を怖々握ると、強ばって冷たくなった細い指が、力強く握り返した。

川根ヶ台 3

「サチっ。おい、サチ、生きてるのか！」

呼びかけても目を覚ます気配はなかった。でも、また指が、条件反射のように、びくつと動いた。

「死後硬直とか言ったら怒るぞ。なあ、生き返ってくれよ」

動きとしてはおかしいが、その可能性もないわけじゃない。過度な期待をかけないように自己を牽制しつつ、それでも込み上げてくる確信を抑えられない。

「どうすれば目え開けるんだよ？」

こちらは微動だにしない風貌を凝視すると、唇がひび割れて厚みをなくしているのに気づいた。

「水分……」

そうだ。まず水を飲ませなきゃ。

周囲を見回すが、赤茶けた粘土の土壤が広がるばかりだ。

水は、高いところに保水され、下に落ちる。背後の小高い丘を見上げた。露出した岩盤に、亀裂が幾筋も見えたが、水滴すら探すことはできなかった。

立ち上がって、小山に沿って進む。至る前に遠景として見た、この様子を思い描く。崩落跡が横穴になっている箇所がなかったか？そこなら蒸発し損ねた水溜まりがあるかもしれない。

ほんの数十歩先に目的地はあった。地面から2メートルほど持ち上がった壁面に、高さ1.5メートルほどの洞が開いている。飛び上がって下端に手をかけ、体を持ち上げた。よかった。ワングルの時の筋肉は、まだ落ちてないみたいだ。

……けれど、せっかくやってきたこの場所は、早々に退散しなければならなかった。洞窟のすぐ入り口から奥に向かって、異世界へと

誘うあの黒い粒子が渦巻いていたから。

こいつに巻き込まれたら、姉貴とまた離されるかもしれない。

洞から飛び降りて、いったん姉貴の所に戻った。こんな危険な場所から遠ざけておいてやらなきゃならない。

抱え上げると…驚くほど軽くなっていた…。

「いなくなったの、夕飯前だったもんな…」

空腹にどれくらい耐えたんだろう。それを考えると胸が痛い。

30メートルほど離れた場所にサチを置き、ミナミの元に走った。同じ運命を辿った女兒にも強い同情は感じていた。抱き上げる前に、数度、頬を叩いたが、ミナミのほうに蘇生する兆しはなかった。

2人を安全圏に置いて、再度、水探しに向かう。

そういえば、この台地の果てはどこにあるんだろう？ 屍ヶ台の下には芳賀さんたちの集落があったはずだ。そこに助けになるものが残されていないだろうか。

できるだけ直進方向に、それもかなりの距離を歩いた。たぶん、3キロは下らない。

唐突に地面が終わった。視界が正常じゃないせいで、危うく崖から転がるところだった。俺の落とした小石が、切り立った谷に落ちていく。

「…この垂直壁を登攀具なしで降りろってか…」

微かに下の集落の屋根が見えていた。フリーで下りられる距離じゃない。

途中の足場で休憩を挟みながら、なら可能かもしれない。

時間と、それから俺自身の体力とを計算する。…どうしても『無理』という答えが出る。が…。

…いいや。もう考えるのはよそう。落ちても死ぬだけだ。姉貴に水を持って行ってやれなかったら、結局は俺の運命も決まるんだか

ら。

慎重に90度近い傾斜の岩場に足をかける。幸い、風の浸食が岩盤に傷を作ってくれていた。これならルートを確保しやすい。

「あんだ、高所恐怖症になったことあるか？」

山岳救助の折りに指導してもらった民間の救助隊員が、2日目の夜にそう聞いた。

「ならないわけですよ」

当時、大学の先輩の1人が没頭していたロッククライミングに引きずり回されていた俺は、苦笑しながら答えた。

「そうか。じゃあいい山男になるな」

指導員はそう言って笑った。

「2度と山なんか行くかつ」

汗の吹き出た額を拭いつつ悪態をつく。

「こんなに苦労して助けてんのに、死んだら承知しねえぞ、サチ！」
叫んだって喉が乾くだけなのに、腹が立って気が収まらない。

安定した足場に会ったびに、身を預けて目を閉じた。10カウントする間だけ、体と脳を休める。時間を気にするのはやめた。焦りが出れば疲れが倍增する。

「…半分は来たな」

上と下の距離を見比べて安堵した。着実に成果を感じられるのはありがたい。ここでも目を閉じて休憩を取った。気力が疲れを上回っている。大丈夫だ。このまま無事に下りられる。

カウントが0になった。でも、知らず、俺は深い眠りに陥っていた。気分がいい…。自分が空っぽになったみたいだ…。

「涼二！」

突然の大声に、びっくりして起き上がった。…そしてゾツとした。俺の体は斜面から大きく剥がれて、落ちる寸前だった。

マンションの部屋で姉貴の生存を諦めかけた時も、同じことが起きたのを思い出す…。

声の正体はもうわかったけど、もしかしたら姿が見えるんじゃないかと、首を巡らした。だけど目に入ったのは別の現象だった。少し距離を取った場所の岩肌が、強風に煽られて細かい崩落を起こしている。

…考えてみれば、激しく浸食されているここだって、同じことが起きてても不思議じゃなかったんだ。なのに俺の周囲は、見えない膜にでも守られているかのように無風だった。

『当分こっちに来ちゃいかんぞ』、と、改めて親父に叱られた気がした。

足の裏に大地の感触が届く。

そのまま地面に倒れ込んで、大の字になった。

着いた…。

手も足も、もう動かない。ちょっとした間だけ、寝よう。

目を閉じると、傍らに気配がしたような気がした。確かめる必要はない…な…。

川根ケ台 4

水の音がする。地面の下から。

目を覚まして頭を起こす。その途端に音が消えた。もう1度耳をつける。…やっぱり地下水の流れる気配がした。

水がある！俺は飛び起きて周囲を見回した。井戸があつてほしい。江戸風俗の資料館などで見た水場の構造を思い出す。時代劇では長屋の外にあるのをよく目にするが、一般的な民家では…たしか家屋の中だ。

勾配のある荒れた土地に合わせるように歪んだ小屋が、とりあえず1番手近だった。走り寄ってみる。

目の前にすると、凄まじく粗末な建物だった。壁は骨組みに葦を組んだだけの吹きっ晒しで、ところどころ破れている。入り口は板戸だが、腐って下部が抜けている。広さは8畳分ぐらいだろうか。屋根だけがなくて、住居というよりは蔵のような様相だった。

すぐには入る気にならず、周囲を回って、隙間から中を覗いた。饅^すえた刺激臭が漂ってくる。暗いので内情はわからない。

水は…ありそうにない。でも、確認だけはしておかないと。

表の板戸に戻ろうとした時、突然、その板戸が軋む音がした。ぎくつとして、思わず身を潜める。

人がいる…？

足音がしていた。1人じゃない。2人はいる。

…考えてみれば不思議はないのかもしれない。屍ケ台の死者たちに呼ばれてここに来たと思っていた俺は、生存者の存在を頭っから否定していた。けど、江戸時代にタイムスリップしたのだと思えば納得が行く。ここには芳賀さんたちの先祖が、今もまだ生活しているんだ。

だったら、声をかけたほうがよくないか？姉貴を救う可能性が大きくなってきたことに、内心、躍り上がった。この集落の住人は台地との間を行き交っていたはずだ。彼らに協力してもらって、姉貴をここに運び込めば、水だけでなく食事も与えられる。

勇んで歩き出そうとした俺の耳に、聞き覚えのあるセリフが届いた。

「女のは珍しいでしょう。腹ん中も全部残ってますよ」

足が凍りついた。これは、姉貴のマンションで見た幻覚の場面なのか？

会話が続く。

「胎児はないのかね？」

「もう生んじまったあとです。子どもの方は、ほら、隣に」

「そうか、残念だな。胎児なら全部が商いになるんだが」

「今度は用意しておきますよ」

下卑た笑い声が響いた。

……。『用意しておきますよ』。その言葉が頭の中にリピートする。

妊婦をどこから調達するっていうんだ？野盗稼業でそんなに都合よく手に入るものじゃないだろうに…。

もしかして、俺はすごい思い違いをしていたのかもしれない、と気づいた。元々は二分した勢力を持っていた、この土地。死体が大きな財を成すことを知った双方が、協力して他所の人間を細々と狙うだろうか？それより、お互いを相対させ食い物にしたほうが、利益は跳ね上がるんじゃないだろうか？

いや待て…。矛盾もある。芳賀さんの一族も先住民の一族も、現代まで系譜を繋いでいる。潰し合いをしたのなら、どっちかが絶滅していてもおかしくはない…。

「若い女が手に入らないのが残念だな。さる方面の奥方衆には人気

があるんだが」

売人らしい男の声が、まだ続いた。

「仕方ねえです。産むほうがいなくなっちゃあ商売はできねえ」
集落の人間らしい声が応答する。

そうか…。そういう采配がちゃんとあったのか…。

完全な余所者の俺がこの場に居合わせるのは、非常にまずい気がした。それに、急がなきゃならない。もし集落の誰かが台地に登って姉貴を見つけてもしたら…。

そつと建物から離れようとすると、中から派手な音がした。固いものがひっくり返ったような。

「おうつ。これこれ。暴れたら傷がつくだろう」

住人のほうの音がする。

「腐る前に胎盤を取り出しておくか。抑えておいてくれ」

売人の言葉と金属の刃音が重なる。

…ちよ、ちよつと待て…。

体が固まった。もしかして、『女』ってというのは、まだ生きてるのか？

幻覚の中では、女はミイラ化して完全に死んでいた。けど…今、ここが同じ状況だという保証は…ない。

かちゃんかちゃんと耳障りな金属音に混じって、嚙り泣きのような声が聞こえてきた。やばい。マジでそれっぽい。どうしようか…。
いろんな選択肢が頭を巡る。

このままここを離れてしまえば、惨劇の様子を聞かずに済む。それが1番理想的に思えた。俺にはサチがいる。こんなことには関われない。

背中を向けて外に踏み出す。…つもりなんだけど、足が地面に張りついてた。正義感は霧散しているが、良心だけが居座っている。
『せめてここにいてやろつ』と。

「ああ、もうっ！」

結果なんか知るかつ。大声を出すと、中からの音がピタッと止んだ。

身構えたまま、しばらく待った。走り出てくるだろう連中とどうやって対峙しよう…。

不安と動揺に身が竦む。喧嘩なんか…したことないんじゃないか、俺？

けれど、いつまで待っても2人が姿を現す様子はなかった。…なぜだろう。俺の声が聞こえなかったんだろうか？でも、そんなはずはないような…。

恐る恐る移動し、板戸の隣まで接近した。抜け落ちている下の部分から覗くが、人の足らしきものは見当たらない。

？どういうことだ？出ていった気配はないのに…。

疑問だらけの状況に混乱していると。

また声が聞こえ始めた。

「女のは珍しいでしょう。腹ん中も全部残ってますよ」

板戸を開けて、中に入った。

何もなかった。黴の匂いと埃にまみれた何らかの骨組みが残っていただけだ。

天井を見上げると、明かり採りから黄みがかかった陽光が注いでいた。

…寂しい場所だな…。

今の惨劇は、きっと、本当にここで行われたものなんだ、と思った。生きながらに解体された母親の無念が、この場所に留まって、救われない回想を繰り返しているんだろう…。

俺の前に幻覚として現れたのは、この母親が、マンションと屍ケ台を繋いだ怨念の本体だからかもしれない。

「…ひでえよなあ…。これじゃあ、150年崇るのも無理ないな…」
肉体的な苦痛と、自分だけでなく子どもまで『食料』にされた彼女の精神的苦痛を図ると、俺が代わりに復讐してやりたいほどの気持ちになった。

戸板を外し、取り去れるだけの側壁の葦を引っこ抜く。この陰気な建物から、母親の魂を出してやりたかった。

相当に風通しが良くなったところで、土がむき出しになった床に目を転じると、細い骨が頼りなげに転がっていた。

母親のものだと、思った。

俺はそれを拾って、脱いで腰から下げていた上着のポケットに入れた。

「子ども…見つからないな…」

それらしい痕跡はなかった。子どもだけ処分されたのか…それとも上に連れていかれたのか…。できれば見つけて、この骨をそばに添えてやりたい。

井戸を探すうちに、村の現状を把握できるようになっていた。どの家屋も、屋根が抜け落ちていたり、それ自体が傾いていたり、廃屋感満載だ。廃村になって長い年月が経っていることを連想させる。

「実際のこの土地は開発が進んで見違えるけど、こつちの世界では150年の年月がそのまま保たれているのかもしれないな」

進歩していく生者の空間に比べて、留まることしかできない死者の村という対比が生々しかった。

「ずっとここにいたい奴なんて…いないよな…」

ポケットの中の彼女を握り締めながら、誰に、という目的もなく尋ねた。屍ヶ台に縛られている霊たちが早く解放されればいいのに、と思う。

台地から離れて村落の一番奥まで進んでみると、すいぶん大きな屋敷に行き当たった。まだ無事に残っている入り口の戸を開くと、すぐに井戸が目に入る。

「よかった。水は？」

駆け寄って確かめると、顔が映るほどの至近距離まで満たされていた。

鶴瓶を落として汲み上げ、まず自分が飲み干す。いろんなことがあったショックで忘れていたが、喉が痛むほどヒリついた。

それから、母親にかけてやる。粉を吹いていた表面が流れ落ち、細い骨が更に小さくなった。

「……………」

なんとなく彩ちゃんの抱き心地を思い出す。

「もう1回…じゃなくて…気の済むまで、好きにさせてくれないかなあ…」

もしも帰れたらさ、とは口にしなかった。でも、帰れないという絶望感は、もうない。

土間から上がり框を経て、小さな板敷きの部屋に入った。木製、しかも漆塗りと思われる食器棚が、数竿、並んでいる。

「ずいぶん、贅沢な暮らしをしてたんだな…」

これだけの財力を持っていたということは、ここは、『この村の支配者』のほうの屋敷なんだろう。

無意識に母親の骨に手をやった。彼女を殺した一族が住んでいた家だ。怖がるかもしれない。

水を運ぶ道具を探すつもりだったが、自分でもよくわからない衝動に駆られて、奥に向かった。小刻みな部屋が連続している。今の日本家屋と違うのは、北側に当たる部分に縁側ができていたことだった。屋敷内を結ぶ通路を兼ねているらしく、屋外に出たり家内に潜ったりと複雑な経路を辿っている。

道筋に導かれるままに進むと、暗い大きな部屋に出た。今までの建物とは別棟になっているみたいだ。離れだろう。

部屋の中には、豪華な仏壇があった。上を見上げると、3体の遺影がある。一番新しいと思われるものは写真だった。

「この顔、どつかで…」

と呟いてから思い出す。マンションの管理人…藤原さん、だったか…に、似てる。

「支配者は先住者のほうだったんだな…」

現代において、彼らがあれほど恐々とした生活していた意味が、よくわかった。こんな残酷なことをし続けたのなら、芳賀さんたちに負い目を感じても仕方がない。

遺影を掴んで、通路から外に投げ捨てた。それから仏壇を引き倒した。紫檀の扉が外れて散乱し、位牌が気味のいい音を立てて折れる。

「あんまり気は晴れないだろうけど」

骨に触れると、スカスカとした感触だったはずのそれが濡れているのを感じた。満足したのかもしれない。

木工の水筒を8本ほど手に入れて屋敷を出た。水の重さが大したことないとはいえ、荷物を持ってあの崖を素手で登るのは難しい。どうしようか…。

「ここの集落の人間が台地に登るときは…道があったはずだよな…」
また村内をうつろついてみることにする。

俺が下りてきた崖からそうも離れない壁面に、地均した細い階段が、かすかに痕跡を留めていた。

「…こつちも楽じゃなさそうだ」

苦笑したが、でもクライミングよりは、はるかに体力は使わずに済むだろう。

成人1人がやっと通れる幅の、それも手がかりもない不安定な悪

路を進む。風が吹くたびに体が持っていかれそうだ。必死で絶壁の瘤にしがみつく。

…親父は、もう守ってはくれないのか…、と少し寂しくなった。これぐらいなら自分で切り抜けるってことかな…。

縄でくりつけた背中の水が苦痛になってきた。登山の時は、テントから食器まで、全部持っても歩けたのに。思ったより疲労の蓄積が激しいのかもしれない。

「あのさ、水、なんで行李に入れずに、直接、背負ったか、わかる？」

気を紛らわせるために、俺は母親の骨に向かって話しかけた。

「荷物つてさ、体に密着していたほうが軽く感じるんだよ。行李だと背中から浮くだろ。だから…」

所詮、独り言だから、全部を説明しきる前に黙りこむ。

限界を超えた疲れは妄想を呼ぶらしい。いつの間にか、俺は、母親の存在を背中に感じていた。長い髪が風になびいて肩口から覗く。俺の呼吸に合わせて、彼女からも乱れた吐息が上がった。

「…リアルだな…。まあ、役得だと思えば、いいか…」

水筒よりは女の体の感触のほうが、正直、嬉しい。

「彩ちゃん、立ち直ったかなあ…」

こんな発想をしている俺を、まだあの娘が心配しているんじゃないかと、ちよつと気の毒になった。

ゴールは遠かったが、姉貴の蘇生する様を思い描いていると、希望だけは湧いてくる。

「あいつ、最初になんて言うかなあ。風呂に入りたいとか言ったら、また水を取りに、ここを往復しなきゃならないな」

笑いながら、姉貴が潔癖症であることを説明すると、背中の母親は楽しそうに頬をこすりつけた。

「それよりも飯が先か。…まさか、姉貴にも人間を食えとは言えな

いもんな」

軽はずみに言ってから、

「あ、ごめん」

慌てて謝った。被害者に言うことじゃない。

「その…俺のいた世界では、食人っていうのは、ちよつと特殊な…儀式とか嗜好とか…まあ、そんなふうには扱われないことでさ」
言い訳を続ける。

「この時代では生存のためだったんだろ？ 芳賀の爺さんから、この屍ヶ台のことを聞いたあとに、食人の歴史を調べてみたんだ。飢饉の時に子どもを交換して食ったとか…塩漬けにして保存しておいたとか…。だから、俺…実は、この村の悪習についても、貧しい時代のことからしようがないんじゃないか、ぐらいに思ってた」
背中が濡れたような気がした。母親を泣かしたと思って、さらに気まずくなる。

「だけど、あんたみたいな、…生きてるうちから中身を取り出される、とかっていうのは…、ちよつと、『生活のため』では割り切れないもんがあるんだよな…」

薬の売人の声が過剰な熱っぽさを帯びていたことに、今になって気づいた。人肉嗜好。長い間、アングラな商売に触れていると、そういう感覚が育つのもかもしれない。

「可哀想だったな」

図らずしも、彩ちゃんが俺に言ってくれたのと同じ言葉で慰めると、母親も嬉しそうに身を震わせた。

川根ヶ台 5

そういえば、ここの時間の感覚って、どうなってるんだろう。一向に傾く様子のない太陽を見ながら、そう思った。

姉貴はまだ生きている可能性が高いが、ミナミはすでに手遅れだった。遭難でも、栄養の蓄えの少ない子どもは先に死ぬ、と救助隊員から聞いている。とすると、この世界でも、時間の流れは、ある程度、正常なわけか…。

実はさつきから強い空腹感を感じている。ここに引つ張られてから、体感的には10数時間が経っているように思う。『餓死』という言葉が人事じゃなくなってきた。

「水があれば1、2週間は生きられるはず。…でも、動けなくなったら水も調達できないな…」

その前にここから脱出できればいいが…。

最悪、屍ヶ台のやり方で食料を確保することも考えた。俺が倒れたら、姉貴を現代に帰せない。

台地の上に小山が見えた。あれを目印に歩けば、姉貴たちのところに苦もなく辿りつける。

「そういえば、子ども、探してやらなきゃいけないか」

ポケットの骨にそう問いかけた。それらしい遺体はかなりの数に及んでいたはずだ。

芳賀の爺さんが『女はたくさんの子どもを産んだ』と言っていたのを思い出す。生命力の弱い乳児の数を補うためだと聞かされたが、本当は、売買のために強制的に取り上げられた数も少なくなかったんじゃないだろうか…。

「ごめんな。先に姉貴のところに行く。その後で見て回ろう」
謝ると、骨の感触が、また湿ったものに変化した。

…気のせいかな。視界が、どんどん、よくなっていくように見える。

姉貴とミナミの姿はかなり遠くから見通せた。走って近づいてみたが、途中で息切れてしまったほどの距離がある。やっぱり、あの厄介に湾曲した空気は払拭されてるんだ。

晴れやかな気分になった。だって、これはいい変化だ。重苦しい閉塞感から解放されたんだから。

もう少し奥に目をやると、遺体の群れが小さく見えていた。ひどく広大な土地を徘徊した記憶があつたが、それほどの面積を持たず、屍ヶ台は端を見せている。

「なんでこんなことが…」

呟いてから、ふと、ポケットを見た。

「もしかして…？」

死者の怨念で歪められた世界が、彼女を救ったことで、正常に向かったのかもしれない。

「ありがとう」

礼を言くと、母親は、また艶やかに色を変えた。

姉貴とミナミは、なぜか抱き合つて眠っていた。…俺、彼女たちを隣り合わせで置かなかつたか…？

「姉貴は、また動いたんだろうけど…」

ミナミの腕が姉貴の背中に巻き付いているのが解せない…。

そつと引き剥がし、少女の頬に手をやった。俺の拳ぐらいしかない小さな顔は、まったくの表情を消して、冷たく強ばっている。念のため、口元に水を流してみた。固く閉じた唇の上を流れ落ちるだけだ。反応はない。

…今まで、俺はミナミに対して、それほどの関心を持つて来なかった。むしろ、姉貴を巻き込みやがって、と、殺意さえ覚えていたほどだ。だけど、こんな小さな実体を見ていると、それが大人としてどれほど冷淡な感情だったかを思い知る。

「お前も、ずっと辛かったんだよな」

親父の事故のことで周囲からずっと責められてきた自分の子ども時代と、間部アリサの、娘を全否定する言葉を同時に思い出して、この子の耐えてきた重さを理解した。

「…はあ」

溜息が出る。姉貴が蘇生しない。

手先の反応はあった。つねると驚いたように跳ね上がる。水をかけると、嫌がつて払いのけた。なのに、口の中に流し込んだ水分を飲み下そうとしない。業を煮やして強引に注いだが、喉から先に沈んで行かず、口内いっぱいに溢れてしまった。窒息させるんじゃないかと、慌てて横向きして処置する。

呼吸は…よくわからない。心臓は動いたり止まったりしてる。マッサージもしてみたが、肋骨を折りかけてやめた。

「もつと簡単に目を覚ますと思ってたよ。」

性格から意固地だったサチに向かって文句を言った。爪先がわずかに持ち上がったのに苦笑した。聞こえてるのかな。

「俺が来てること、わかってる？」

呼びかけると、これには返事がなかった。

諦める気はないが、手詰まりなのも確かだ。俺は仰向けに転がって対策を考えた。

「…姉貴の体には、魂がもう残ってないんだろうか？」

非科学的な言い方だが、この靈魂の支配する世界では、そんなイメージが正しいような気がした。

「捕まえて体に戻す、ってことができれば、生き返るかな？」

虫取り網で人魂を追いかける漫画チックな想像が浮かぶ。

「…馬鹿馬鹿しい」

自分に呆れて横を向いた。神道や仏教にも招魂の方法はいくつもある。なのに、なんでそんな発想なんだか。

視界の隅にミナミの体が入った。なんだか、妙に黒っぽい。

「……………」

起き上がって確認すると。

少女の小さな体には、蠢く黒い霧がびっしりとまとわりついていてた。

凄惨な光景に、声が出なくなった。女兒の肉体は、わずかずつ形を減らしていた。霧がミナミを『食って』るんだ…。

黒い粒子の一部が俺のほうに伸びていた。恐る恐る目で追うと、母親の骨が入ったポケットに繋がる。

慌てて彼女を取り出し、投げ捨て。

…ようにしたが。

触れた途端、体中の血液が一斉に消滅したようなブラックアウトに陥った。

恐怖に抗う時間すら持たず、俺の意識は拡散した。

川根ケ台 6

…どこだろう、ここは。

気づくと、見覚えのない部屋の中だった。ずいぶん汚れたところだ。弁当の空容器や黴の浮いたペットボトルが放置されて、女物の下着や服が散乱している。

姉貴のマンションと間取りが同じだ、と気づいた。エプロン姿の彩ちゃんを堪能した台所の流しを確認すると、同じ照明、同じシンクに、統一感のない食器が、食べ終わったままの状態で投げ込まれている。

突然、幼児の声が聞こえた。女の子だ。涙声で訴えている。

「明日の遠足、お弁当作ってください…」

母親らしい若い女が金切り声を上げた。

「なんであたしがそんなことしなきゃならないのよっ！面倒かけるなら遠足なんか行くなっ！！」

女兒の泣き声が大きくなった。壁越しに聞いたミナミの声と同じだった。

視界が暗転する。

開けたと思ったら、また同じ場所に出た。ただ、レイアウトがちょつと違う。カーテンの柄も変わっていた。

目の前にミナミがいた。姿が今より少し幼い。幼稚園児ぐらいだろう。白いブラウスを着て、嬉しそうに歌っている。

小太りの女が、俺に背を向けて座っていた。ミナミを見ている。間部アリサだと思った。

「お母さん、生活発表会、がんばるね」

幼女は健気な笑顔を見せた。状況がわからない俺の頭に、…誰の親切なのか、経緯が流れこんでくる。幼稚園の行事で歌を披露することになったミナミのクラスは、園側の計らいで全員が同じ衣装を贈

与された。ふだん、母親からの協力が得られず、園で肩身の狭い思いをしていたミナミは、その『みんな一緒』がとても嬉しかったらしい。

「ねえ、あんた、そのブラウス、皺だらけでみつともないよ」

アリサの不機嫌な声が、ミナミの歌をストップさせた。

「もうちよつと言いようがねえのかよ」

腹を立てた俺は声に出したつもりだったが、自分の耳にも届かなかった。

俺の存在は、ここでは実体じゃないんだな、と理解した。アリサもミナミも、すぐそばに立っている俺に気づかない。

「アイロン、かけなきゃいけないね」

アリサが重そうな体を起こして、別室に消えた。何か不穏なものを覚えて、俺はミナミに近づき、聞こえるはずのない忠告をした。

「なあ、外に行こう。あの母親と2人でいたら、お前、何されるかわからないぞ」

ミナミは明後日の方向を向いたままだ。

アリサがアイロンを持って戻ってくる。手近のコンセントに電源を差し、熱が上がるまでの時間が待ち切れないとでもいうように、何度も手元のボタンを押した。そのたびに蒸気が吹き上がる。

「ちよつとおいで」

アイロンというものをあまりわかっていない様子のミナミは、アリサの呼びかけに素直に応じた。

「何するの？」

「後ろ向いて」

ミナミが背中を向けた。

馬鹿っ！俺は慌ててアリサの手を跳ねたが、まったく抵抗を感じずに通り抜けてしまった。

高温のスチームを吐き出しながら、アイロンが少女の背中に押し当てられた。

ミナミの凄まじい悲鳴と、アリサの哄笑が重なる。

見ていられなくて、俺は耳を塞いでうずくまった。

場面がまた変わった。何もない空間に放り出される。

頭を上げると、真つ黒な粒子に包まれた自分の手が見えた。

輪郭が妙に歪んでると思つたら、知らずに泣いていたらしい。

「…何がしたいんだよ…？」

特定の意思が俺の精神を蝕もうとしているのを、もう確信するしかなかった。助けたはずの女の骨から染み出した悪意が、全身に張りついているのを感じる。

「…関わらなきゃよかったか？」

理不尽さも覚えたが、余計なことをしたのかもしれない、とも思つた。人間としての扱いを踏み越えられた彼女が、人間としての感覚を放棄してしまっていることは、想像できたはずだから。

網膜に30代ぐらいの細身の女が映つた。艶やかな真紅の唇を歪めて…笑っている。

伸ばしてきた手を、払いのけるか掴むか迷つたが、拒絶してここに留まつても仕方がない。腕を差し出すと、俺の指の間に、彼女の指が絡んできた。その感覚は実体そのものだった。

白い着物の胸元から豊かな乳房を覗かせながら、彼女は俺に身を預けてくる。

「現世は希望…」

小さな湿つた声音が、彼女の口から漏れた。

「死ぬのは弱いから…。要らないから…。生きることには強い者に譲つて、あたしはあの場所に還ります」

「…現世っていうのは、生きてる人間の世界のことかな？そっちには希望があつて、あんたのいた世界には…何かあるんだ…？」

混乱しそうな言葉に注釈を加えて聞き返すと、狂人のように空っぽの笑顔を見せる母親は、

「優しさがあります」

と答えた。

「それは逃げてるだけだ」

否定すると、また周囲が暗くなった。

「いい加減にしてよね、毎晩毎晩！」

視界が戻る前に怒鳴り声が響いた。…サチだ…。

「自分の子どもを何だと思ってるのよ！母親が子どもを大事にしてあげなくて、どうするの?!」

久しぶりに聞いた元気な声だった。

会いたい。そう思ったとたん、サチのすぐ目の前に移動していた。間部ミナミの家の玄関口だ。連夜の虐待の声を、アリサに聞こえるように咎めたんだろう。

例によってサチには俺は見えていない。…見えていたら、きっと言い訳しただろうから。

「泣いてないからねっ」

と…。

姉貴のことを『サツちゃん』と呼んで親しんでくれた隣家の母親が、サチの頭を撫でながら、慰めていた。

「しょうがないよ、サツちゃん。そういう家庭もあるもの」

「『そういう家庭』に育ってきたから悔しいんじゃない。親が責任果たさなきゃ、子どもは無理をするしかないのよ」

姉貴は泣きじゃくりながら吐き出した。

…俺は…姉貴に頭を下げることでできなかった。家族の本当の姿も知らず、姉貴一人に全部を背負わせた自分の体たらくを、改めて痛感した。

どうやら、ミナミの周囲のできごとを、時系列で追っているようだ。次に飛んだのは、薄暗い部屋の中だった。万年床にアリサが寝ている。その隣で、ミナミが膝を抱えていた。

これは、たぶん、事件の起こる直前だ。ミナミが立ち上がって、台所から包丁を持ち出した。

「…なあ。なんでこんなものを見せるんだ？」

母親の骨に尋ねると、背中にかい肉感が巻きついた。

「知ってほしい…」

とだけ答える。

ミナミは、でもアリサの布団には行かなかった。寝室の入り口に立ち、夕飯の支度もせずに寝入っている母親を、じっと見ている。

「お母さん、ミナミね、どうして生まれたのかなあ」

女兒の震えた声に、俺のほうが入った。

「生まれ変わったら、今度は好きになってもらえるかなあ」

泣くこともなく、その場に座り込み、包丁を掲げる。

俺は背中の中の腕を捕まえ、無理矢理、目の前に引きずりだした。「ミナミが刺したのは母親じゃなかったのか？あんな子どもにもどうしてこんなことまでさせるんだ？！」

怒鳴りつけると、女は、やっと焦点の合った目をして、微笑んだ。

「行ってあげて」

そして、俺に抱きついてから、…ゆっくりと溶けた。

湿った黒い粒子に変わった彼女が、俺からミナミへ、橋を渡すように繋げていく。

大股でミナミに近づいて、包丁を取り上げた。少女はびっくりした顔で俺を見上げた。

俺は…なぜか、まったくためらうことなく、アリサに歩み寄り、肥満で膨らんだ腹に、刃を突き立てた。

絶叫が響き、暴れ狂ったアリサが室内の物を壊しながら、玄関に逃げていく。

俺はミナミの手を握って、その後を追いかけた。女兒は呆然としながら、黙って従っている。

玄関を開け、アリサが表に転がり出た。その直後に、姉貴の鋭い声が飛ぶ。

「誰か来て！救急車を呼んで！」

頭の中にあるシナリオは、姉貴にミナミを預けるという。でも俺は迷った。事実の通り、ミナミと姉貴を接触させれば、2人は屍ヶ台に飛んでしまう。

「俺と、ここにいようか…」

ミナミに問いかけると、反射的に頷きかけたが、すぐに怯えた顔になった。

「やだっ。お母さんっ。お母さんっ」

逃げ出す女兒を捕まえようとすると、腕が透けた。ミナミに繋がっていた黒い霧が、俺の元に戻ってくる。

もう干渉できない…。

川根ヶ台 7

血で汚れた掌を、また粒子が侵食し始めた。

…どこへ連れていかれても、もういいや。自分が人間を刺したという臍気なシヨックと、アリサのような母親がいる世界に住んでいたいという嫌悪感に、力が抜けた。可哀想な子どもも、もう見たくない。

現代も、屍ヶ台の大地と似たようなもんだ。救いがない…。

周囲から景色が消えた頃、近づいてきた女の手が、俺の頬に触れた。そのまま首をなぞって、服の中に入ってくる。

このスキンシップは、甘えの一種なのかな…。明確な意図がわからず、俺は、戸惑ったまま、手を抜こうとして。

…驚いた。

体温の低い滑らかな皮膚を想像していたが、彼女の感触は、干からびてささくれだったミイラのものだった。

ああ、そうか…。

「…牡丹燈籠って怪談、知ってる？」

聞いてはみたが、答えが欲しかったわけじゃない。女の靈魂に魅入られた男が、とり殺される話をしたかったただけだ。

「俺…あんたに好かれたってことなのかな…？」

絶望感に涙が出てきた。こんなところで、負の感情にまみれたまま、俺はこの女と共存していくんだろうか。

女が、俺の脇に身を寄せて、腰に腕を絡ませてくる。漆黒だと思っていた長い髪は、惨めに抜け落ちて頭蓋を晒していた。

気持ち悪い、と本音では思った。

…でも、その頭を撫でてやった。

こんな姿で執着してくる彼女を、畏怖の感情だけでは見られなかった。

「…さつき、元の世界に帰るって言っただろ」

声をかけると、黒ずんだ薄皮を張りつかせた顔が、俺を見上げる。

「そこで、また、あの回想を繰り返す気？」

せめて、その行為だけでもやめさせたい。

「俺と一緒にいれば…思い出すことも…その、減るのかな？だった
ら」

このままとり殺してもらっていいよ、と続けようとして。

やめた。

「あのさ、俺…恋人、いるんだ」

彩ちゃんのことを、そう断言していいものは、正直、微妙だったけど、わかってもらいたくて引き合いに出した。女は、感情を現す表皮を失った顔を歪める。

「だから、やっぱり帰りたい。自分のことばかりで悪いけど…」
彼女が寂しがった気がして、罪悪感が湧いた。でも、目を逸らして続ける。

「後な、姉貴も一緒に連れていきたい。サチはこんなところで死んでいい人間じゃないし」

アリサや、アリサの母親のような醜怪な人間が跋扈する現代に、姉貴の正義感が必要だろうと思えた。

「それから、ミナミ…。あの子も、もう1度やり直しをさせたい。
あんたが見せてくれた実情を知ったら、このまま人生を終わらせるのは悔しいだろ」

完全に諦めていた少女の復活を、今さら望むのは後ろめたいような気もしたが、ミナミだけ遺体で連れ帰るのは、もう願い下げだった。女の表面がゆっくりと変化していき、白い肌に無垢な瞳をはめ込んだ造作ができあがる。

唇に朱が乗ったところで、彼女は身を起こし、俺に口づけをしてきた。

ぎょっとしたが、抵抗するよりも、思い通りにさせてやろうと、そのまま応えた。

頭の中では、必死に本性を思い出す。彩ちゃん、ごめん。これは浮気じゃないから。

制御も虚しく、理性が溶けかけたところで、衣擦れの音がした。目を開けると、半身をはだけた彼女の乳房が目に入った。慌てて引き剥がす。

「ちょ、ちよつと待って。それはまずいつ。俺、カノジョいるんだって！」

…潤んだ目で見返す視線が…痛い。

そりゃ…。つい、逸した視線をこつそりと戻した。透けるような色白の肌に、丸みを帯びた肩。その下には、思いの外、ふくよかな膨らみがあつて、肉厚で柔らかそうな腹部に繋がっている。

急に空腹感を思い出した。

「…食欲と性欲って…似てるよな…」

何も考えずに『食っちまおう』かとも思ったが…。

やめた。どつぷり後悔しそうだ。

彼女の着物の襟を合わせ、もう1度、頭を撫でる。

「子ども…探してやるって言つといて、まだだったな」

母親としての自覚を取り返してもらいたくて、そう言った。そして、「姉貴たちのそばに戻してくれ」

と頼んだ。

彼女は黙って俺の顔を見ていたが、やがて、腕を差し出す。

細い指が俺の手首を握った。その部分から真つ黒な粒子が沸き上がって、体内に侵入してきた。また意識が暗転する。

川根ヶ台 8

目覚めると、屍ヶ台に戻っていた。

「よかった。戻れた…」

勇んで姉貴たちのところに行こうとして、違和感に気づく。視界が歪んでいる。大地が広く見通せない。

「…悪い方に戻ってる…」

愕然となった。女の骨を持って戻ったときに払拭されていた圧迫感が、今、また周囲を覆っている。

一気に不安がせり上がった。彼女には、わかってもらったつもりだったが、想いを拒んだことで逆鱗に触れただけだったんだろうか…。このまま、姉貴たちと一緒に屍ヶ台に閉じ込められちまったりするのだろうか…。

すぐそばで気配を覗かせる女に、

「…もしかして、怒ってる？」

と恐る恐る聞くと、粒子が輪郭を作って、細い肢体を生み出した。右腕が真っ直ぐに伸びて、ふやけた景色の中の丘を指さす。

「…あれって、最初に姉貴とミナミを見つけたあたりじゃ…？」

確認すると、答えずにまた拡散していった。

行けってことだよな？

歩きにくい感覚に舌打ちをしながら近づく。移動させた箇所には2人はいなかった。まったく状況がわからない。すでに生き返っているなら嬉しいけど…。

丘を間近にして、姉貴の身につけていたエプロンの薄水色が目に飛び込んできた。やっぱりここに帰ってたんだ。でも、なぜ？

近づく。

話し声が聞こえ始めた。

「ミナミちゃん、もう泣かないで。泣くと水分が体から抜けちゃうの。だから、もう泣かないで」

姉貴の諭すような声には、力が残っていなかった。

「もう少しがんばろう。がんばって、もう1度おうちに帰る。おばさん、ミナミちゃんの好きなご飯、たくさん作ってあげるから」

嗚咽混じりの言葉に、慌てて走り寄ると、姉貴がミナミを強く抱きしめていた。

「ね。元気になって。返事して」

繰り返す励ましに、でもミナミは反応しない。涙の筋をつけた顔は、緩く口を開けたまま、機能を停止していた。

俺は姉貴の目の前にしゃがんで、どう言葉をかけようか迷った。

そして、それが不必要なことに、すぐに気づいた。サチは俺をまったく見なかった。

「…これもミナミの回想の一つなのか？」

女に聞くと、空間から腕だけ伸ばして俺の首に巻き付いてきた。

「今から…」

と、また抽象的な言葉を残す。苛立ったが、感情を抑えて、続きを待った。

サチの目から溢れた涙は、最初、透明だったが、徐々に血混じりの赤いものになっていった。それに比例して姿勢が崩れていき、髪の毛が顔を覆う。

我慢できずに、途中、何度も名前を呼んだり肩を揺さぶろうとしてみたが、生命力が抜けていくのをどうすることもできなかった。

最後にゆっくりと口が開き、長い呼吸を吐いた後、サチは死んでしまった。

…まだだ。この場から逃げなくなる気持ちを奮って、次の変化を待った。骨の女は、俺に必ず活路を与えてくれる。それを盲信すること耐えた。

サチとミナミの肉体から、白い煙のようなものが抜けてきた。とっさに捕まえようとしたが、質量も何も感じずに、そのまま空へと

逃げてしまふ。それはふらふらと空中を漂い、そして方向を定めると、丘の側面に沿って離れ始めた。

後を追っていくと、数十歩先に口を開けている洞へと辿り着く。2mほどの高さにある入口から、黒い粒子が誘っていた。姉貴たちの魂は、その中に飛び込んだ。

「ここに入れば、あいつらを取り返せるんだな？」

女に聞くと、背中を押された。

「くそつたれ。もうちよつと親切なお膳立てができねえのかよ」

どこまでもこき使う屍ヶ台の仕組みに、いい加減キレそうになった。

真っ暗な洞の中は、あのマンションで起こった突然の闇と同質な空間だった。上下の区別さえつかない。自分が立っているのか浮いているのかも、よくわからない。

「…なんか日本神話みたいだな。先に死んだ妻を迎えいざなみに行くために入った黄泉路のイメージだ」

あの世とこの世の境目に踏み込んでいる感覚を伝えると、闇と同化した女が、手を握ってきた。

「早く…」

「え？時間制限あるの、これ？」

この悪条件で急かされるとは思ってた。急がないと、姉貴たちは蘇生できなくなるんだろうか。

彼女の先導の仕草はたおやかで優しかった。でも、ついていくのはかなり難しかった。集中してないと、手の感触を見失うからだ。「抱きつかせてくれたほうが安心できそうだ」
うっかり零すと、胸の辺りにすり寄ってきた。

「ごめん。冗談」

慌てて引き離すと、名残惜しそうに、俺の手を自分の頬に擦りつけた。

…こんなことに動揺してる場合じゃないんだけどなあ…。内心喜

んでる自分を自覚して、気を引き締める。

黒一色とはいえ、夜のような静寂は、ここにはない。粒子の流れるザラザラという音が耳障りだった。

「この粒…っていうか、霧…は、動いてないと駄目なもんなのか？」
答えを期待しないで尋ねると、

「魂だから」

と彼女は言った。

「へ…え…。…い、今、靈魂に囲まれてるって…こと？」

居心地の悪さに、思わず手で周囲を払うと、意外なことに、笑い声が応えた。

「…あんたって笑うんだ？」

なんだか楽しくなつて、そう指摘すると、また、俺の腕に身を寄せ
る気配を感じた。今度は拒絶せずにおく。

神経を使っているせいで、時間が長く感じた。足の疲れ具合からしたら、でもそうは歩かなかつただろう。

突然、雑音に紛れて子どもの声が聞こえた。かなり大きい。しかも喚いているように甲高い。

「もう…ないで…帰らな…ミナミ…」

切れ切れの言葉に応答するサチの声も、激高していた。

「いい加減にしなさいよっ！戻れないってのが死ぬことだって、わかんないの?!」

そうか…。こうやって引き止めてくれたから、姉貴とミナミの肉体は完全に終わらずに済んだんだな…。

感謝と同時に、こんな状況でも変わらないサチの性格に苦笑した。やっぱり、こういうしぶとい奴は長生きしないと。

声は近くなったり遠くなったりした。不安定な存在の姉貴たちは、今、俺の手を握っている彼女と同じような距離を保っているのかも知れない。そばにいますと思ったら、急に消える。慌てて探すと現れる。

「姉貴！おーい！」

呼びかけるこつちの声が聞こえないのも、同じ原理なんだろう。

ミナミの音がすぐ傍らに現れた。

「ミナミ、もう帰らない！お母さんを殺しちゃったんだもん。帰れない！！」

サチの音が、俺と重なるぐらいの位置から怒鳴り返した。

「あんな母親が死んだぐらいで、ミナミちゃんまで死んじゃうのはおかしいでしょ！なんなら私が育ててあげるわよつ。夜9時以降は一切叱らない。この条件なら生き返る気になる？！」

不毛な言い争いに、伝わらないとは知りつつも、

「間部アリサは死んでないよ」

と思わず口を挟んだ。

会話がピタリと止まった。ミナミの、叫びかけた声を飲み込む息遣いを感じる。

…もしかして、俺の音が聞こえた？

「…お母さん、死んでないの…？」

女兒の震える声が尋ねた。

「うん」

コミュニケーションが取れたことに感動しながら、俺はミナミのほうに手を伸ばした。

闇の中で、俺の指から黒い粒子が伸びるのがはっきりと見える。

その先に、少女の驚いた顔と、呆然としたサチの姿が浮かんだ。

サチがハツとしたような表情で、

「な、泣いてないからねっ」

と顔を逸したのが、らしかった。

「今さら遅いよ」

こつちも緩み始めた涙腺を必死にこまかした。

「へえ。ミナミは自分が母親を刺したと思ってたんだ」

俺は背中におぶった小さな存在に聞き返した。腕に掴まった姉貴のほうか、

「だって、いきなり男の人が出てきて包丁を取り上げましたって、説得力ないでしょ」

と答える。

「ああ、まあ。確かに」

小学生の柔軟な脳は、俺を、『母親に復讐したいと願っていたミナミの本心が生んだ幻影』だと位置づけたらしい。

まだ洞の中だった。姉貴たちは自力では方向がわからないらしく、俺のナビに合わせて動いている。俺のほうは、前方に伸びる黒い道筋に従っていた。

「それにしても、よく生きてたな。サチたちがいなくなって1ヶ月経つんだぜ。普通なら衰弱死してる」

精神力の強さだけでは説明しきれない奇跡に感心すると、

「そんなに経ってた？4日ぐらいなものかと思ってたわ」とあっさり否定された。

「え？ってことは、ここの時間は、現代では何倍にも匹敵するわけか」

密かに冷や汗をかく。

俺がここに着いてから、恐らく1日近い時間が過ぎていた。向こうではどれだけの日数を費やしたんだろう…。

「…彩ちゃんに、あんなこと言わなきゃよかった…」

見合い相手と仲睦まじくしている彼女が思い浮かんで、一気にテンションが下がる。

姉貴との会話の間、じっと黙っていたミナミが、不意に口を開い

た。

「ねえ…あの、前を歩いている人、誰？」

「見えるのか？」

驚いた。俺の目にも、今は、女の姿は見えない。子どもならではの感覚だろうか。

「あの人が、ミナミとサチの探し方を教えてくれたんだ。命の恩人だよ」

そう説明すると、女兒は訝しげな声で、こう言った。

「ミナミのうちに来た女の人と一緒に着物着てる」

……。

別に不思議はない。彼女はずっとミナミを見ていた。普段は姿を消していただろうが、たまには現れたのかも知れない。

そうだよ。夜中の訪問者のことを思い出した。軽い骨の音。複数の声が聞こえたことの説明はつかないが、実体として、彼女は俺たちの前にも存在を示していたんだ。

「お前のこと、見守ってたんだ」

とフォローすると、それでも少女は警戒心を解かない声で咎めた。

「ミナミに、お母さんと一緒に辛いなら連れていってあげる、って言った」

俺はミナミを下ろして、頭を撫でるイメージを伝えた。それから女に向かって言った。

「俺だって、あんな虐待の場面を見たら同じ事を言ったと思う。そういうことだったんだろ？」

女の気配がゆつくりと戻ってきて、俺の隣で実体化した。姉貴が小さな悲鳴を上げる。

「あたしは子どもをなくしました」

彼女は淋しげな表情で、ミナミを見下ろした。

「ほら……」

自分の子が無碍にされた母親が、同じ場所で生死の危険に晒されていたミナミに同情しただけのことだ。そう確信して後を引き継ごう

とすると。

女は予想もしなかったことを口にした。

「子どもはあたしが首を締めました。それから食べました。今もあたしの中にいます」

「……………」

言葉が出なくなってしまった。

精神的におかしなところがあるのは知っていたが、それも、みんな、この世界での不遇が彼女を追い込んだんだと思っていた。だから、コミュニケーションを取ることで、わずかず正常な状態を取り戻して、ミナミや姉貴を救う手助けをしてくれたのだと、…彼女のことを、本当は善人なんだと、期待していた。

女は狂気を孕んだ微笑を浮かべて、ミナミの頬に手を近づけた。

俺は女兒を遠ざけた。

誘うような艶かしい声が、彼女の口から漏れる。

「あたしの子どもは男の子でした。可愛い子でした。遊び相手がいなくて可哀想です。一緒に暮らしてくれる女の子が欲しかった」
それから俺のほうを見て、

「一緒に暮らしてくれる人が欲しかった…」

と、もう1度繰り返した。

「…悪いけど、あんたにやる気はないから」

ミナミのことも俺のことも、と言外に込めて跳ねつけると、彼女は焦点のぼけた目を逸らして、また誘導先に戻っていった。

「ねえ、どういうこと？」

姉貴が耳元で囁く。

「今の女の人が、ミナミちゃんをここに引っ張ってきたってことなの？」

「たぶん…」

ほぼ確信はしていたが、説明の仕方によっては、女の立場をひどく悪くすることになる。俺は慎重に言葉を繋いだ。

彼女はこの屍ヶ台の土地から魂が離れず、150年先の俺たちの世界に至るまで、ずっと空間を行き来していた。自身の殺害と同時に幼子を失ったことで、特に、子どもに対してのアンテナに敏感だったんだろう。そこで激しい虐待に心身をすり減らしていた女兒を見つけ、…それから…。

「だったら、あの鬼母に罰を与えて終わりじゃないの？」

サチの疑問は、俺たちにとっての理想しか考えていなかった。

「あんたが鬼母を刺した時点でミナミちゃんは救われたんだから、ここに引つ張る必要はないじゃない」

割り切った姉貴に苦笑する。

「彼女が寂しかったんだろ。ミナミも精神的に限界が来てた。こっちに引つ張ってやったほうが幸せだと勘違いしたんじゃないか？」
空恐ろしいことだけど。

サチは少しの間考え込んでいたが、やがて口を開いた。

「さつき、リヨウちゃんと再会したときに、なんとなくあの人の感情みたいなものを感じただけど、…あの人の、泣いてたと思う」「は？」

泣いてたのはお前だろうが、とツツコもうとして、サチが真剣なのに気づいた。軽口を引つ込める。

「私たち…ううん、私にはあんまり執着はないみたい。あんたとミナミちゃんがいなくなることを、すごく怖がつてる気がする」

「…ん…」

彼女との微妙な関係を姉貴に言おうとしたが、なんだか照れくさくてできなかった。

「だからそれは…寂しがってるんだって」
とごまかすと、

「その調子で、またここに引き止められるの、私たち？」
不安そうな声音が尋ねる。

そんなことはない…信じたい。俺は帰りたいという意志を彼女に伝えた。彼女はそれを受け止めて、こうやって協力してくれてい

る。

ただ…。もし『一緒に暮らしたかった』という女の願いが暴走したら…どうなるんだろう…。

「早く行動したほうがいいな。気が変わらないうちに」

そう呟くと、姉貴は、

「帰れるのね？」

と嬉しそうに俺の周りを飛び回った。

背負っていたミナミから寝息が漏れ始めた。子どもって肉体がなくても眠くなるんだ。意外な習性を微笑ましく思っていると、サチがミナミの体をさすったような感触があった。

「ねえ、あの鬼母、生きてるって言ってたわよね」

声を低くしての確認に、俺も思わず声量を抑えた。

「ああ。ミナミを連れ帰ったら、またアリサが養育することになるのかな…」

その危惧は、ずっとあった。ミナミに対して、あえて復活を強く望まなかったのも、また始まるかも知れない虐待に晒したくなかったからだ。

「リヨウちゃん、もう1回とどめ刺しにいった」

サチの発想は、俺の思考を上回っていた。

「阿呆」

短く悪態をつくくと、盛大に溜息を吐く。

「あーあ。やっぱりミナミちゃん、引き取るっかな。こんな大騒ぎになったんなら、間部さん、引越しちゃうだろうし。そしたら監視もできないものね」

「カイさんが承知するかあ？」

一応、旦那の顔を窺ってやると、サチは口を尖らせた。

「カイさんの承諾を得ようと思ったら、あと30年ぐらいかかるわよ」

「だけど、子どもを1人引き取るとなると、収入もなくちゃならな

いだろ。姉貴、今、専業主婦じゃないか」

現実的に見て、カイさんの協力がなければ、その計画は頓挫する。するとサチは、声に笑みを含んで、俺の前に回り込んだ。

「じゃあ、リヨウちゃんが結婚して引き取ったらいいじゃない。子ども作る手間省けるよ」

「……そこはあんまり省きたくない……」

名案、というより、迷惑な案に、即却下を願い出た。

「じゃあ……私が離婚して実家に帰るから、養ってくれる？」
代替案も似たようなものだ。

「お前、その思いつきで行動する癖をやめろよ。ミナミを育てるっていうのは、簡単なことじゃないんだぜ」

浅慮を叱りつけたつもりだったが、姉貴は譲らなかった。

「そうやって、大人が自分の都合ばかりを優先しているから、子どもを見捨てる羽目になるんですよ。何ができるか、が重要じゃないのよ。何をしてやらなきゃいけないか、が大事なの。後の始末ばかり考えてたら、行動できなくなっちゃうわよ」

「………まったく……」

呆れた。ふりをした。でも、本当に呆れたわけじゃない。

『大丈夫。なんとかしてあげる』。それがサチの口癖だった。実際に解決できてもできなくても、その言葉は、聞いた人間を勇気づけて、何らかの結果を産み出してきたんだ。

「……お前って、姉っていうより親父みたいだ」

一応、賛辞のつもりでそう評価すると、姉貴は、嬉しそうにしながらも、

「あら。お父さんはリヨウちゃんの中にいるんでしょう？」
と言った。

「どういふ……？」

意味がわからずに聞き返す。

「だって、いつも言ってたじゃない。家族を守るのはオレの仕事だ

って。小中学生のセリフじゃないわよ、あれ」

サチは笑う。

…そんなのは、親父の受け売りだ。意味も知らずに使っていただけだ。

でも…なんだろう、この感覚…。俺の中の何かが、確かに姉貴の言葉に呼応していた。

「それにね」

声を潜めたサチは、ちよつと思案してから、告白を続けた。

「私、お父さんに酷いことしちゃったの。お父さんが死んじゃったのは私のせいだね…。お葬式の時にお父さんの亡骸を見ながら、あんたに言ったこと…覚えてないわよね…。私が殺したようなものって。そしたら、リヨウちゃん、なんて言ったと思う？」

『お姉ちゃんが絞め殺したの』。そう言つて泣き崩れていた姉貴のことは、完全に思い出している。でも、その後…？何か言つたのか、俺？

「幸子は優しい子だね、って、言ってくれたのよ」

姉貴の震え始めた声に、無邪気に膝に入ってきた幼女の姿が重なつた。制御できない愛情が溢れてくる。

「でも、私、結構、悪い子だったと思う。そんなふうになつてくれたお父さんのこと、好きになることがずっとできなかったもの。自分の苦勞を全部お父さんのせいにして逃げてたのね。だからリヨウちゃんにも八つ当たりの的に無理を…」

そこまで言つて、姉貴は、突然、疑問符をぶつけた。

「お父さん？そこにいるの？」

うん、と思わず答えてしまいそうになつた。

俺は親父じゃない。けどサチが行方不明になつて一人で心細かつた間、ずっと俺を突き動かしてきた不思議な原動力があつたことは感じていた。

涼二の『二』は2番目つて意味だよ。幸子の次つて意味だ。生前、親父は俺にそう言い含めてきた。自分を優先したくなることもある

だろう。家族を放って自由になりたいと思うこともあるだろう。そういうときは姉の幸せを1番に考えなさい。それがお前の人生を安定させて、将来、いい父親へと導いてくれる。息子の手本となれないことを自覚していた親父は、俺にそういう形で道しるべを残そうとしていた。

本当に親父が俺の中にいてくれればいいな、と思った。今回みたいに、家族のために必死にならなきゃいけないときに、手助けをしてほしい。俺をもっと強い人間にしてほしい。

「姉貴：俺、親父みたいになるんだ」

うまく言葉が見つからなかったが、それで伝わるような気がした。

「リョウちゃんって、なぜか自分から苦勞するほうに向かっちゃうよね」

サチは苦笑しながら、でも嬉しそうに言った。

風が吹き込む。粒子の密集が乱れて、出口と外の景色が見える。

ミナミの気配が背中から消えた。同時に姉貴の存在も。急いで洞の口に走り出ると、クリアな視界の戻った屍ヶ台の台地の上に、2人の体が折り重なっているのが見えた。

そして、サチが…

大きく弧を描いて手を振った。

ミナミの小さな肉体も、もぞもぞと小刻みな動きを再開している。

「…よかった」

俺は脱力して、その場に座り込んだ。

女が真横に立った。でも、その姿は消えそうに揺らいでいた。

口元が微かに動き、物悲しい唄を紡ぐ。子守唄のようだった。

関節が鳴りそうなほど強張った肉体を、姉貴は四苦八苦して動かしていた。水はすでに水筒2本分が消えている。ミナミのほうは、まだほとんど動作ができない。補助して、やっと横になれる程度だった。

「体が重い…。太ったのかしら…」

「そうだったら、むしろ尊敬する」

口だけは元通りのサチは、さっきから冗談を連発している。

本当は、彼女たちを抱えてでも、すぐに屍ヶ台から出て行きたかった。女は姿を見せなくなっていたが、さっきの寂しそうな様子に、どうしても危機感が募る。

ただ。

「…安心したせいかな…。俺も、なんだかすごく眠い…」

俺自身に、2人の人間を担ぐ体力が残っていないかった。気を抜くとそのまま撃沈しそうだ。

「私たちが動けるようになるまで、ちょっと寝たら？置いていかなから」

笑いながら、偉そうに言う姉貴に、

「馬鹿」

と返す間ももたないほど、急速に意識が途切れた。

赤ん坊の泣き声がする。

目の覚めた感覚がなかったから、これは夢なんだろう。俺は台地の端に腰かけて、外界の集落を見下ろしていた。蟻のように小さいはずの人間の行動や声が、なぜかくつきりと頭に映る。

60を越えたほどの男が2人、大きめの桶を運んで、集落から離れかけていた。火のついたような乳児の泣き声は、その中から聞こえる。まだ破損の進む前の家屋の窓から、暗い表情がいくつも覗い

ていた。噉り泣きの聞こえる家もある。

男たちが辟易した様子で言った。

「よく泣くのう。煩くてかなわん」

「だが薬屋が言っておったぞ。元気な赤子のほうが安心して引き取れると。小さいのは心臓も肝もわずかだし」

そのまま、女が殺された小屋のほうに向かっていく。

男たちが見えなくなった後、粗末な家々から、家人が忍び出てきた。その中で、一際、弱っている様子の若い女が見えた。

「もう忘れな。あの子は運がなかったんだよ。また生もうよ」

慰めに、他の女たちが、その若い母親を囲む。

少し離れたところに、彼女が立っていた。2歳ぐらいの男児の手を引いている。暗い目で、赤ん坊が消えた方向をじっと見ていた。

「…ああやって、生まれてすぐに死ぬ子どももいる。お前は運が良かった」

傍らの息子に囁きかける。

「早く大きくなって、こんなことをやめさせるぐらいに力をつけておくれ」

意志の強い瞳で、幼児への言葉に思いを込める。

夢の中では、この土地にもちゃんと夜が来た。大きな蛾が白い鱗粉を撒き散らしながら、朧月の元を飛んでいく。俺はその蛾と同化して、女の家天井の梁にくっついた。

囲炉裏は消え、燭台の火が細く闇を裂いている。子どもは、部屋の隅で、すでに寝息を立てていた。女も薄い夜着に替えている。夫の姿はなかった。

突然、戸口がガタガタと音を立てた。一瞬、警戒した様子の彼女だったが、すぐに走り寄って戸を開く。

その先には20代後半と思われる体躯のいい男が立っていた。

「たえ、今日はおつとうは？」

当たり前のように家に上がり込む男を、女：たえさんは、戸惑った表情で咎めた。

「おつとうは辻に行ってる。お前さまは行かなかったのか？」

どうやら予想外の訪問者だったらしい。戸を開けたのは、夫だと思つたからかもしれない。

「土地主の息子の俺が畜生働きに出ることもあるまい」

横柄な態度の『息子』は、上り框に腰をかけた。

何の用かと焦れて待っていたたえさんに、充分な時間を置いてから、男は、

「酒を用意しろ」

と命じた。たえさんは首を振る。

「そんなものは買えない。あたしたちの暮らしを知らないのかい、お前さまは？」

集落の利益のほとんどを搾取する土地主でありながら、と言葉の裏には非難の響きがあつた。

「それなら」

土地主の息子は口角の釣り上がった笑みを見せて、彼女の肢体を引き寄せた。

「酒代ぐらい稼がせてやろう」

無理矢理、薄衣を剥がされていくたえさんを、俺は為す術もなく見ていた。

頭の中に割れた鐘のような大音響が鳴っている。

朝の陽光が差し込む部屋の中で、まだ熟睡中の幼児に寄り添い、たえさんは子守唄を唄っていた。

「平気…」

その合間に眩きが漏れる。

「こんなことぐらいは平気…」

昼になり、殺気立った村の女たちが、たえさんの住居に押しかけた。

「お前のところだけ子どもを取られないと思つたら、土地主とできてやがつたのかい?!」

「冗談じゃないよ。あたしら、みんな真面目に順番を守ってるんだ。そんなやり方は許されないよ!」

戸口を開けられないようにつつかえた棒に縋りつきながら、たえさんは震えた声で言い訳を繰り返した。

「違う。歳が行つてからの子どもだったからだよ。次に生めないから堪忍してもらつただけだ」

外で土地主の息子の寝ぼけたような声が聞こえた。

「俺はたえなんかとできてはおらん。昨日は酔っ払つて家を間違えたんだ」

救われた。そう思つたたえさんは、勢い込んで戸を開けた。

「そうだよ。あたしなんかがお前さまと何かあるわけがない」

必死で嘘に便乗して、周囲を説得しようとした。

反論が小さくなり、気まずい空気が流れる。たえさんの顔に安堵の表情が浮かび始めた。

その時。

「みながそんなに言うなら、公平にするために、たえの子どもも取り上げてやつてもいいぞ」

息子の非情な提案が下された。

狂つたように叫んで幼子にしがみついたえさんを、何人かが引き剥がそうと試みた。けれど常人離れた力に対抗することはできなかった。

土地主の息子が耳元に寄つて、彼女に囁く。

「その子どもを手放したら、お前を俺のところに連れて行ってやる。お荷物はさつさと片付ける」

たえさんは激しく首を振つた。

呆れた様子の息子は、

「しばらく小屋に放り込んでおけ。そのうちに疲れて手を離すだろう」

と言った。

葦の壁の隙間から、陰気な風が吹き込む。

昨日の赤ん坊の首のない遺体を見ながら、たえさんは放心状態で自分の子どもを絞め殺していた。

人の手に任せれば、怖い思いをさせることになる。まだ片言しか話せないけれど、

「おっかあ」

と懐いてくる息子を、笑顔のまま、送ってやりたかった。

「ごめんね」

泡を吹いた白い顔を撫で、それから、すぐにやってくるだろう解体係たちのことを考えた。自分の命より大事にしていた存在を、金儲けのために使おうとする連中に、どうしても渡したくない。

「…ごめんね」

もう1度謝って、たえさんは幼児の口に腕を差し入れた。柔らかい粘膜を破れば、素手でも臓器を取り出すことができる。

名前を呼ばれた気がした。

「リヨウちゃん、ちよつと！起きなさいっ！」

姉貴が焦った声で叫んでいる。

「…なに？」

まだ夢の中から脱しきれていなかった俺は、震えの止まらない手を額に当てた。驚くほど冷たい。

自分の体にたえさんの粒子が群がっているのを感じた。俺、食われてるんだ。ぼんやりと理解する。

「なに、じゃないわよ。何よ、それ。気持ち悪い」

姉貴は、未だに不自由な動きに阻まれつつ、俺のそばに寄ってきた。

「…ああ、大丈夫…」

答えになってねえな、と自覚しながら、身を起こしてサチに言った。目を転じると、ミナミも不安そうな顔でこっちを見ている。

正常な2人を見たら、少し落ち着いた。

「急いだほうがよさそうだ。ミナミは俺が背負っていくから、サチ、歩ける？」

すぐに移動することを告げると、姉貴はふらふらと立ち上がりながら、

「無重力の宇宙から帰ってきた直後って、きつとこんな感じよね」と時事的なネタを口にした。気分じゃなかったが、あえて笑ってみる。

「どこに行けばいいのかは…わかってるの？」

屍の散乱する大地から目を背けながら、姉貴が聞く。

「うん。見当はついてる」

俺は自分が入ってきた場所に向かっていった。あの黒い障壁の向こう側に、きつと元の世界がある。行き来の自由なたえさんに協力してもらえば、難なく脱出できる気がした。

たえさんは姿を現さない。ポケットの骨は短い間にカスカスになっていった。今では、うかつに触ったら折れそうだ。このまま消えて行くのかもしれない。

「ここで消滅するってことは…成仏するってことなのかな。それとも…」

ただ、無くなるってことなんだろうか…。

この死者の世界を『優しい』と表現した彼女を思い出した。『希望のある現世』を、強い、恐らく彼女を虐げた生者たちに譲って、自分はこの屍の台地に残ると微笑んだ顔が、今になって、強烈に心臓を締めつけてくる。

「ミナミ…帰らなきゃダメかなあ…」

唐突に女兒が呟いた。サチが、

「なんでそんなこと言うの？」

と慌てる。ミナミはゆっくりと首を巡らせた。

「だって…帰ったらお母さんと会わなきゃいけないもん…。ここにいたほうがいい…」

そう言つて、また力なく頭を預ける。

生きていくことは戦うことだ。決して強靱ではないたえさんやミナミにも、その使命が課せられていることに、やりきれない思いが湧いた。弱い人間は、この停滞した世界に留まったほうが、本当は幸せなんじゃないか？『現世』が苦痛にしかないのなら、なぜ彼女たちは生まれてきたんだ？

サチがミナミの背中をポンポンと叩いた。

「それが大事なのよ。あんなお母さんと会いたくないって、向こうに戻つてからも、ちゃんとみんなに伝えるの。そうしたら、みんながミナミちゃんの味方になってくれる」

その言葉に、ミナミよりも俺のほうが驚いた。

「ミナミ、イヤって言つてもいいの？」

少女が聞き返すと、姉貴は、

「もちろん」

と請け負う。

「泣いてもいいの？お母さん、声出しちゃダメだつて言つてたよ」
姉貴のマンションで聞いた幻聴で、ミナミの声が厚い布越しのようにくぐもつていたことを思い出す。

「…それは私のせいね、きっと。私が中途半端にお母さんに注意したせいで、ミナミちゃんが被害を被ることになったんだと思う…」
サチは神妙な声で、

「ごめんね」

と謝った。

ミナミは涙声で謝罪を拒絶する。

「ミナミのお母さん、おばさんのこと、悪い人だつて言つてた。ミ

ナミの声が聞こえると怒ってくるからだって。だから、ミナミ、おはさんのこと嫌いだった」

そう言って。

でも、サチのほうに腕を伸ばした。

体力ギリギリで踏ん張りながら、姉貴はミナミを抱きとめて、

「その調子よ」

と微笑んだ。

「今みたいな調子で、言いにくいことでもちゃんと言うの」

耳元で囁くと、小さな体がしがみついた。

「もう独りで我慢しないでね」

サチの願いに、ミナミは答えずに、頭を何度も上下に揺らした。

熱い固まりが、体の中で、ゆっくりと冷えて沈んでいく。

口を開きかけて、俺は姉貴に伝えることをやめた。まだ早い。

前方に『出口』が見えてきた。

たえさんの骨をポケットから取り出すと、身を削るようになり粒子を湧かせ、異界への道しるべを作ってくれる。

「よかった。引き止められるじゃないかとひやひやしてたわ」

サチがほっとした表情で俺の手を握った。

「マンシヨンの場所に正確に戻れなくても、こうしてれば離されることはないよね」

明るい笑顔に、俺も笑って、

「うん」

と答えた。

それから、背負い直していたミナミを下ろし、姉貴に預けた。
「連れて行ってやって」

きょとんとした2人を黒い空間に押しやった。

「もう少しだけここにいる。後で必ず帰るから！」

そう大声で伝えると、姉貴が前後不覚な闇の中から叫ぶ。

「なに?! ちょ、ちょっと! 馬鹿っ。なに考えてんの、あんた…」
声が小さくなつて途切れた。

…今なら、まだ間に合う。一緒に帰れる。

もし…。俺は体力のもつ限界まで、ここで、たえさんと過ごしてやるつもりだった。だけど、もしその間に帰れない事態になったら…とも思う。帰るなら…今しかないんじゃないか…。

冷えて揺るがないはずの固まりが、また熱を帯びて口元にせり上がった。『俺はこんなところで死にたくない』。本音を口に出せば、たえさんより自分を優先できる気がする。とうの昔に死んでしまった屍たちに遠慮せずに、堂々と生きることを選べる気がする。

けど…。

「現代があるのつて、過去があつたからなんだよな…」

知らなければ先祖たちの生き様は否定できた。そんな過酷な時代があつたわけがないと。否定して、気楽に生きることができた。けど知つたから。俺の親の、そのまた前の、ほんの6代か7代遡つただけの人間が、苦しい時代から解放されずに、未だに因習の土地で彷徨っていることを。

茶色い皮膚に筋の浮いた痩せ細つた脚が、座り込んだ俺の隣に現れた。

「…一緒に暮らす…のは難しいけど…」

見上げると、複雑な表情を浮かべるたえさんの顔が透けていた。

「気が晴れるまで話に付き合う。それで手を打って」

笑いかけて手を差し出すと、静かに目を閉じた彼女は、隣に膝をついて、俺の手を自分の頬に当てた。

彼女の肌の感触は死人のままだったが、それでも、濡れていて、ほんのり温かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7532x/>

屍ヶ台

2011年12月1日17時02分発行